
罪と罰 守りたい人の為の戦い

竹馬プシー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

罪と罰 守りたい人の為の戦い

【Nコード】

N25970

【作者名】

竹馬プシー

【あらすじ】

2008年12月8日。吹矢春秋は大切な妹を交通事故に合わせてしまった。

妹の命は助かったが植物状態になってしまった。

彼はそれを自分のせいでこうなってしまったことを悔やんでいた。

そしてその二年後の2010年、彼は事件に巻き込まれる。

それは、四神戦争。不滅の力を持つ^{エターナルパワー}ている者たちが四つの所属に分かれて戦う戦争だ。

彼はそれに巻き込まれてしまう。

だが彼は全てを受け入れ守りたい人の為に戦う。

プロローグ（前書き）

竹馬です。またの名をΨです。

今作で六作目になります。

ちなみに今回はわりと本気で書いております。
それではプロローグをどうぞ。

プロローグ

2008年12月8日。クリスマスが近づいて来ていたこの頃、神奈川県横浜市に住む二人の兄妹が居た。

兄は十四歳で妹は十三歳だった。

二人は特に何も無いごく普通の中学生だった。

けど、一つだけ違う所があった。

二人は重度のシスコンとブラコンであった。

家に帰っても親が共働きの為、日曜日以外は誰も居ないので二人で超えてはならない事をやっていたりしていた。

それがいつもの日課になっていた。

だがこの日、二人を切り裂くような事が起こった。

二人は近くの公園で兄の友達と遊んでいた。

兄と兄の友達はキャッチボールをしていた。

兄は野球部だったので部活が無かった日でも同じ野球部の友達と一

緒にキャッチボールをしていたりしていたのだ。

そして妹は兄の付き添いでいつも一緒に来ていたのだ。

その時、兄が投げた野球ボールが間違えて高く上げて兄の友達がキャッチできず、ボールは公園の外に出てしまった。

飛んでいった方が妹が座っていた方に近かったので兄が妹にボールと取ってきてくれないかと言ったのだ。

だが、これが悲劇の始まりだった。

妹は兄の言われたとおり、ボールを取りに行ったのだ。そこまで良かった。

しかし、ボールが転がっていった方には路上があったのだ。

案の定、ボールは路上に転がって行った。

妹はそのまま路上を通り、ボールを取った。

だが、妹がボールを取って戻って来ようとした次の瞬間、妹はトラックが近づいてきている事に気づかずトラックにはねられてしまったのだ。

兄はすぐに妹に駆け寄り急いで救急車を呼んだ。

数分後、救急車が来て病院に運ばれたが、意識が戻る事は無かった。

妹は植物状態になってしまったのだ。

その日の夜、兄は自分の部屋に入り周りの物を落としたりなどをして、落ち着いたかと思ったらベッドに倒れて泣きじゃくっていた。好きだった妹が自分のせいでこうなってしまった事を悔やんでいたのだ。

次の日から兄は不登校になり、学校にも行かなくなってしまった。さらに、部屋に立てこもり食事など最低限度しか家の中では動かず、家を出たとしても病院に行つて妹に見舞いに行く以外は家から出てこなかった。

親には怒られたりもしたが、そんなのは無視をした。

これは自分の罪だと自分を責めこんだのだ。

妹は自分が殺したものだと思い込み、そんな人間が友達などを作つて良いのだろうかと思つたのだ。

だからこそ、兄は部屋に立てこもり、なるべく人を避けてきたのだ。

それから一年後、兄は中学三年生になっていた。

けど、相変わらず学校には通つてなかった。

野球部も退部したことになるっており、友達からメールが来ても返したりはしなかった。

だがさすがに親が高校には行きなさいと言われたので、最初は行かないと言ったが、挫けて仕方なく高校受験をする事にした。

成績は上の方だったので簡単に高校受験は受かった。

そしてさらに一年後の1010年4月7日、兄は入学式の為に学校に向かっていた。

高校生になってから兄は一人暮らしを始め、その家も妹の病院に近い所を選んだ。

また高校も病院から一番近い高校を選んでいたりする。

でも妹は未だに植物状態のままだ。

兄は毎日学校の帰りに妹の見舞いに行くのが日課になっている。

兄は自分の罪を償いながら普通に暮らしていた。

だが同じ年の6月19日、兄はまたしても事件に巻き込まれてしまった。

プロローグ（後書き）

はい今回の主人公は妹に重度のシスコンでその妹が自分のせいで交通事故に合わせてしまったという内容です。

ちなみに、あらずじに書いてある通りバトル物です。
それではまた次回に会いましょう。

登場人物&用語集？（第一章 第十三話まで）（前書き）

すみません。勝手ながら前回の登場人物&用語集は削除させていた
だきました。なので前回の登場人物もここに書かれていますのでそ
こは心配はしなくて平気です。

ちなみに何で前回の削除することにしたのかと言うと、前回のキ
ャラの設定に修正と追加が多すぎたからです。

登場人物&用語集？（第一章 第十三話まで）

朱雀

吹矢 春秋（ふきや はるあき）

性別 男

年齢 高校一年生で十五歳。

身長 168？

体重 63？

髪型 茶髪

近作の第一の主人公。

妹思いで重度のシスコン。

性格だが、昔は明るかったが妹の交通事故が起こってからは人を避けていて暗い。

実は、美咲が春秋に好意を持っていることは知っていたりしている。自分の罪を逃れようとすると、自分の能力『グリモワール七つの大罪』で心臓発作を起こしてしまう。

自分の決意は妹の菜乃葉に犯した罪を償う為と妹が意識を取り戻した時まで自分が生き残る為。

エターナルパワー
不滅の力

『七つの大罪』
グリモワール

七つの大罪の結晶を操作して攻撃をする。

『七つの大罪』
グリモワール
使用時は女性になってしまふ。

また、極光の断罪者を使ったときも『七つの大罪』
ジャッチメント
グリモワール
を解除しても女性
のままになってしまい、いつ戻るかは不明である。

ルシファー
superbia

赤色をした結晶。

相手に攻撃が当たる又は触れると嗅覚を失う。

レヴィアタン
Invidia

橙色をした結晶。

相手に攻撃が当たる又は触れると固有感覚を失う。

サタン
Ira

黄色をした結晶。

相手に攻撃が当たる又は触れると視覚を失う。

ヘルフェゴール
Acedia

緑色をした結晶。

相手に攻撃が当たる又は触れると聴覚を失う。

マモン
Avaritia

青色をした結晶。

相手に攻撃が当たる又は触れると触覚を失う。

ヘルゼフ
Gula

藍色をした結晶。

相手に攻撃が当たる又は触れると味覚を失う。

アスモデウス

Luxuria

紫色をした結晶。

相手に攻撃が当たる又は触れると痛覚を失う。

ディアボロス

悪魔の復活

相手に攻撃が当たった又は触れた結晶が人間の姿となって実体化する。

姿は春秋が女の時と同じ姿である。

実体化したものは春秋の意志で動かすことが出来、それぞれ結晶と同じ色の剣を右手に装備している。

それぞれ人間の体力を凌駕に超え、走る速さ、思考力が異常である。

ジャッチメント

極光の断罪者

七つの大罪を全て使って七色の光線を撃って砲撃する。

ディアボロス

また、悪魔の復活によって実体化したときの数の分だけ威力が強まる。

吹矢 ジャッチメント 春秋（夕香（ゆうか）） 『七つの大罪』 グリモワール 使用時。又は極

光の断罪者を使ったときに起こる副作用の時。

性別 女

年齢 男の春秋と同じ。

身長 152？

体重 秘密だよ。

髪型 赤髪で長い

春秋の性転換した姿。

大体は男の時の春秋と一緒にだが、女性になると一人称が『私』に変わり、女性らしくなる。

容姿に関してはfortissimoの里村紅葉と同じ姿である。
(どういうのか知りたい方は『fortissimo/akko
rd:busvier』の公式ホームページで見てください)

水谷 美咲 (みずたに みさき)

性別 女

年齢 高校一年生で十六歳。

身長 157?

体重 絶対に言わないません!!

髪型 青髪だが、オープンゲート魔術開放使用時は長くなる

春秋の幼馴染で春秋の二人目のヒロイン。

昔の春秋よりも全然明るく委員長的キャラ。

しかも成績優秀で、一年生で生徒会会長もやっていたりしている。だが一つだけぬけている部分がある。

実は方向音痴である。

美咲は自分の良く行く所以外は全然違う所に行ってしまうほどだ。そして今、昔の春秋に戻させようとがんばっている。

自分の決意は春秋を守る為。

エターナルパワー
不滅の力

アクエリア
『水の精霊』

水を操作する力。

ウォータークラッシュ
水の破裂

水の玉を作り、自分の思考でいつ破裂するか決められる。破裂した水の玉は槍のように相手を襲ってくる。

ウォーターカッター
水力切断

指を伸ばしてそこから水を細くして発射する。

攻撃方法は二つあり、ひとつは銃弾のように発砲する方法で、もう一つは指からずつと光線のように発射する方法である。

銃弾のように発砲する方は銃弾と同様、相手に貫通するだけである。光線のように発射する方は操作する事が出来、物に当たると切断する事が出来る。

ウォーターストリーム
水の流星群

現時点での美咲の必殺技。

ウォーターカッター

水力切断の銃弾のような方を上空から降らせて相手に攻撃する。

普通の人は避けられなく、確実に仕留める技である。

村雨 静香（むらさめ しずか）

性別 女

年齢 高校二年生で十七歳。

身長 168？

体重 言いません。

髪型 紫色をしていて髪は結んでいない。

春秋の三人目のヒロイン。

春秋、美咲の先輩で生徒会副会長をしている。

他の生徒会のメンバーが部活などでよく居ないと事が多いので、生徒会室に二人しかいないときは二人で作戦会議をしたりしている。

昔、春秋に助けてもらった事があり――（春秋は覚えてないが）その時から春秋に好意を持っている。

また、スキルナンバー？^{イクス}の中のスキル？^{ツイ}の実力を持つ不滅^{エターナルパワー}の力を持っている。

自分の決意は最初は学校を守るためだったが、今は春秋を守るためでも入っている。

エターナルパワー
不滅の力
不明。

松藤 清斗（まつふじ せいと）

性別 男

年齢 大学二年生で十九歳。

身長 176？

体重 69？

髪型 黒髪

朱雀のリーダー。

頭脳がスバ抜けていたったの十九歳で朱雀のリーダーになった。
なので作戦や今後の行動などは全て松藤が決めている。

自分の決意は平和な世界を作る為。

エターナルパワー
不滅の力
不明。

藤木 翔（ふじき しょう）

性別 男

年齢 二十五歳

身長 166？

体重 67？

髪型 黒髪

朱雀のメンバーの一人で松藤の右腕に近い人物。
よく朱雀が戦っている時に周りに人払いをかけてくれる。

自分の決意は不明。

エターナルパワー
不滅の力

不明だが人払いを使うので魔法属性か魔術属性であるのは確認できる。

前原 真太（まえばら しんた）

性別 男

年齢 二十三歳

身長 171?

体重 67?

髪型 黒髪

朱雀で一番の善人。

四神戦争で自分が殺した又は倒された人間の名前を全て覚えている。
だが、それを利用して朱雀のメンバーは真太に知られずに盗聴器を
つけていた。

自分の決意は過ちを犯した人間を善人にする。

エターナルパワー
不滅の力

プロバゲイション
『繁殖植物』

植物を操作して相手に攻撃する。

しかも操作している植物の蔦は結構頑丈である。

エンドレスローズ
永遠の薔薇

上空から無数の薔薇を降り注ぐ。

薔薇の茎は当たると傷が出来るので相当のダメージになる。

グランプラント
地面植物

地面から蔦を出して相手に襲う。

五彩 亮（いっせい あきら）

性別 男

年齢 高校二年生で十六歳。

身長 172？

体重 67？

髪型 黒髪で短髪だが、オープンゲート魔術開放使用時は金髪になる

近作の第二の主人公。

性格は昔の春秋の明るさに似ている。

違う所と言えば、義妹の奈雪が亮の事を好きだというのを相当アピールしているのに全然気づかないほどの鈍感。

また、豊と成海とは幼馴染である。

自分の決意は義妹の奈雪を守る為。

エターナルパワー
不滅の力

ライトナイト
『光の剣士』

光の剣を使って攻撃する。

ライトシエル
光の砲弾

光の砲弾を相手に打つ。

威力はそうでもないが、何発でも撃たれれば相当なダメージになる。

ライトウォール
光の壁

光の壁を作り、相手の攻撃を防ぐ。

スピードオブライト
光の速度

光の速さで移動する。

ライトロフ
視力光奪

光の剣が当たった場合に使える。

相手の視力を一時的に奪える。

マイクロライト
微小の光

光の光度を上げる。

それによって光の光度を上げられたものを見ると、明るすぎて一時的に何も見えなくなってしまう。

だが、これは自分にも被害が来るので亮はサングラスをかけて回避している。

ジャッチライト
光の宣告

亮の必殺技。

相手の地面から光線を放つ。

それが人間に当たれば跡形も無く消えてしまう。

だが、相当の魔力を消費するので亮は余り使わない。

透林 奈雪（とうばやし なゆき）

性別 女

年齢 中学三年生で十四歳。

身長 145？

体重 言ったらぶち殺す。

髪型 黒髪でツインテール

亮の義理の妹で亮のヒロイン。

亮以外には絶対に好意を持たないでいるほどの生粋のブラコンである。

性格はどじつこ娘で何かをするたんびに何か失敗をする。

容姿に関してはけいおんの梓に似ている。

なので胸にコンプレックスを持っている。

実は菜乃葉と同じ学校であり、菜乃葉とは親友である。

さらに、亮の事を二人以外では『亮』と言ってるが、二人っきりの時は『お義兄ちゃん』と呼んでいる。

またこれもどじつて二人以外がいても『お義兄ちゃん』と呼んでしまっこともある。

自分の決意は自分の身の回りの人間を守る為。そして、とても大好きな義兄を守る為。

エターナルパワー
不滅の力

スケルトンアーム
『透明武器』

透明な武器を使つて攻撃する。

透明な刀や銃、爆弾など他にもたくさんある。

また、自分と自分が触れている物を透明することも出来る。

魔力は必殺技しか使わないので特に魔力は温存できる。

唯一無属性で魔力を使う不滅^{エターナルパワー}の力である。

ビームスケルトン
透明光線

奈雪の必殺技。

透明の光線を放ち、相手に攻撃する。

これは奈雪が居るところから放つわけではないので、どこから放つてくるか相手には分からない。

白虎

岡崎 豊 (おかざき ゆたか)

性別 男

年齢 高校二年生で十七歳。

身長 174?

体重 66?

髪型 黒髪

亮と成海の幼馴染。

今まで三人でうまくしていたが、四神戦争のおかげで亮と豊の関係が崩壊。以後、お互いの決意の為にぶつかりあっている。
また、成海とは恋人関係である。

自分の決意は自分の身の回りの人間を守る為と、幼馴染で恋人である成海を守る為。
なので奈雪の決意と似ている。

エターナルパワー
不滅の力

スキンクロードブレイク
『皮膚腐食破壊』

ありとあらゆる物を腐らせる力。

だが『皮膚腐食破壊』エターナルパワー
スキンクロードブレイク 本当の不滅の力の名前ではない。

なので、物を腐らせる力は本当の名前の力の一部である。

ニアークロード
付近腐食

自分付近の物を腐らせる。

なので物体攻撃は効くが、電撃や光など腐らないものには効果が無い。

クロードカバー
腐食防壁

こげ茶色の固体を出して防壁に使って自分を守る。

だが、これは付近腐食の逆でこれで物体が当たったものは腐る事は無いが、電撃や光などの腐らない物も防げる事が出来る。

クロードスライム
腐食粘液

こげ茶色のスライムを出現させる。

速さはとてつもなく速く、音速を超える。

壁に張り付いて相手を逃げられなくさせたり、遠くのものまで腐らせたりする為に使う。

クロードフィールド
腐食世界

地面から全てを腐らせる。

自分の足からだんだんと広がり、腐らせた床は茶色に変色している。
人や物がその上に乗るとその人間も腐らせる。

氷川 深琴 （ひかわ みこと）

性別 女

年齢 高校一年生で十五歳。

身長 156?

体重 言わないわよ。

髪型 短髪で茶髪。

白虎のメンバーでよく豊と一緒にいる内の一人。
容姿は禁書の御坂美琴に似ている。

自分の決意は不明。

エターナルパワー
不滅の力
タイムコントロール
『時空操作』

時間を操作でき、時間を止めたり早めたりすることが出来る。

桐山 達也（きりやま たつや）

性別 男

年齢 高校三年生で十七歳。

身長 172？

体重 63？

髪型 黒髪

白虎のメンバーでよく豊と一緒にいる内の一人。

自分の決意は不明。

エターナルパワー
不滅の力

不明だが人払いを使うので魔法属性か魔術属性であるのは確認できる。

漸涼 奏（ぜんりょう かなで）

性別 女

年齢 高校二年生で十六歳。

身長 157？

体重 54？

髪型 白髪で結んでない。

白虎のメンバーでよく豊と一緒にいる内の一人。
稀に天然が入り、たまに豊達を戸惑わせる。
容姿は a n g e l b e a t s の立花奏である。

自分の決意は不明。

エターナルパワー
不滅の力
不明。

鈴川 准也（すずかわ じゅんや）

性別 男

年齢 二十三歳。

身長 167?

体重 67?

髪型 黒髪

白虎のメンバーの一人。

自分の決意と白虎の為ならなんでもする男。

自分の決意は現時点で不明。

エターナルパワー
不滅の力
リンレーンタック
『攻撃反射』

自分に向かってきた攻撃を自分が攻撃してくるもの分かる範囲で
反射する事が出来る。
だから不意打ちや気づかない内に後ろにまわられていた場合は反射
することが出来ない。

菅谷 凱真 (すがや がいま)

性別 男

年齢 二十歳。

身長 172?

体重 69?

髪型 茶髪

白虎のメンバーの一人。

鈴川同様、自分の決意と白虎の為ならなんでもする男

自分の決意は現時点で不明。

エターナルパワー
不滅の力
不明。

伴谷 嶺鬼 (ばんたに りょうき)

性別 男

年齢 二十四歳。

身長 174?

体重 71?

髪型 黒に近い茶髪

白虎のメンバーの一人。

鈴川や菅谷と大体は一緒に、自分の決意と白虎の為ならなんでもするのだが、人を殺すのを全然躊躇わない男。

さらにはスキルナンバー？^{イクス}の中のスキル？^{ナイン}の実力を持つ不滅の力を持っている。

しかし、春秋と戦った時に負けてしまい。今はもう存在しない。

エターナルパワー
不滅の力

インフィルトシャドー
『陰影浸透』

影の中に隠れたりそこから攻撃する事が出来る。

その他

吹矢 菜乃葉 (ふきやなのは)

性別 女

年齢 直物状態で入院中だが、学校に通っているのなら中学三年生で十四歳。

身長 植物状態なので不明。

体重 植物状態なので不明。

髪型 栗色の髪で植物状態でなかった時はツインテールをしていた。

春秋の妹で春秋の一人目のヒロイン。

今は植物状態でいつ目が覚めるか分からない。

容姿は魔法少女リリカルなのはA・sの最終回エピソードで出てきた中学生のなのはに似ているが、サイドポニーはしてないで髪を結んでない状態である。

滝沢 海斗（たきざわ かいと）

性別 男

年齢 高校一年生で十五歳。

身長 169？

体重 66？

髪型 髪は薄い茶髪

春秋と小学校からの友達。

美咲と同じく昔の春秋に戻させようとしている。

羽鳥 成海 （はとり なるみ）

性別 女

年齢 高校二年生で十七歳。

身長 161？

体重 絶対に言いません！！

髪型 緑色で短髪

亮と豊の幼馴染。

また、豊の恋人である。

だが後に亮の二人目のヒロインとなる。

- - - - -用語集- - - - -
- - - - -

四神戦争

朱雀、青龍、白虎、玄武の四神が戦争を起こし、一人だけ神になる

うとしている戦争。

エターナルパワー

四神達是不滅の力を持つ人間を使って争ってる。

エターナルパワー

だから実際は不滅の力を持った人間同士の戦いだ。

また、この戦争で死んでしまった人間は存在が無かった事にされ、死体も消えてしまう。

エターナルパワー
不滅の力

神によって選ばれて能力が芽生えた人達。

絶対に曲げない自分の決意があれば芽生える。

一部を除き大半は魔力を消費する。

また大きく分けて五つの属性に分かれる。

炎、水、雷などを使い、一番多い属性である能力属性。

自分が獣になったり獣を扱ったりする獣属性。

回復魔法、攻撃魔法などを使う魔法属性。

魔法とは違い術式を唱えて戦う魔術属性。

そして上の全てに属さず唯一魔力を使わない無属性。

しかも無属性はたったの八人しか居ない。

吹矢春秋と透林奈雪はこれに属し、その内の二人である。

オープンゲート
魔術開放

エターナルパワー

不滅の力を発動させる為に最初に唱える言葉。

唱えると、それぞれ所属する四神の紋章が地面に現れる。

スキルナンバー？
イクス

無属性を除く属性で上位十位の事を指している。

今現在で判明しているのははスキル？^{ツイ}のー静香とスキル？^{ナイン}の伴谷だ
けである。

登場人物&用語集？（第一章 第十三話まで）（後書き）

容姿に関しては突っ込み無しで。

第一話（前書き）

第一章ではなく序章のほうが良かったので変更しました。

第一話

2010年6月21日午前6時。

「うーん……、もう朝か」

とあるアパートの一室で男が目を覚ました。

彼は吹矢^{ふいきやはるあき}春秋。十五歳で、どこかのツンツン頭みたいに事件に巻き込まれたりなどはない普通の高校生だった。だが一つだけ嫌な過去を持っている。

春秋は二年前の12月8日、妹の吹矢^{ふいきやなのは}菜乃葉を殺してしまったのと同然なのだ。

菜乃葉は春秋が間違えて飛ばしてしまった野球ボールを取りに行つて、ボールを取った後に交通事故にあつてしまった。

それで植物状態になつてしまい。今も意識が無いままなのだ。

春秋はそれが自分のせいと自分を攻め込んでいた事もあり、中学の時はずっと不登校だった。

だが親に言われて高校には行く事にしたが、今でも自分の罪で苦しんでいる。

そんな6月21日の出来事だ。

「さて、朝食を取りますか」

春秋はベッドから起き上がり朝食を作ることにした。

彼の家は六畳間の畳の部屋が一つだけありそこにキッチンがあるだけで、後はお手洗いと風呂場があるだけだ。

春秋はキッチンに向かい、パンを取ってトースターに入れた。

その後、飲み物など朝食の準備をしてテーブルの上に置いた。
そしてパンが焼きあがるとトースターからパンを取ってマーガリンとジャムを塗ってパンを食べ始めた。

「さて、そろそろ行きますか」

パンを食べ終わると、学校に行く準備をして家を出て学校に向かった。

春秋が学校に向かっていると病院の前を通った。

この病院は妹の菜乃葉が入院している病院だ。

平日は学校の帰りに病院に寄り、休日には面会時間からずっと妹を見舞いしに行くのだ。

彼が一番和む時間でもある。

春秋はいつも、今日学校で起きた事などを菜乃葉に報告している。

毎日来ても菜乃葉の様態は変わらないがそれでも毎日通い続けている。

それが彼の日課だ。

「じゃあ、行ってくるな」

春秋は病院の方も見ながら、菜乃葉にそう言ったつもりなのだ。

これも彼の日課である。

そしてそれを言った後、春秋は学校に向かうのだった。

6月21日午前8時25分

春秋が学校に着き、すぐに教室に向かった。
教室に着くと春秋は自分の机に座った。

「お、やっと来たな」

春秋に声を掛けたのは中学の時から一緒に自称春秋の友達だと思
っている滝沢海斗。
たきざわかいと

海斗は二年前の公園で春秋とキャッチボールをしていた男だ。

だから菜乃葉の事故を目の前で見ている人物でもあるのだ。

また自称春秋の友達だと思っっているというのは春秋があ的事件の後、
誰とも友達だと思っていないのだ。

菜乃葉を交通事故に合わせたのは自分だと思い込んでいる為、自分
の罪を犯したとして自分が友達を作る資格はないと思っっているのだ。
だから春秋は海斗の事をただいつもまとり付いてくる人物と認識
しているのだ。

「毎回毎回、俺に何のようなんだよ。俺にまとり付いてくるなっ
て言ってるだろう」

「それはないんじゃないのか？友達が話しかけちゃいけない理由が
あるのか？」

「俺はあの時からお前を友達だと思っ
てねえよ。そもそも、俺に友
達を作る資格は無いんだよ」

これがいつも二人が最初に交わす言葉になっている。

春秋が何度もまとり付くなって言っ
ているのだが海斗はそれでも
春秋に話しかけてくるのだ。

そしてもう一人、まとり付いてくる人物だと思っ
ている女性がい
る。

「でも、そろそろ菜乃葉ちゃん
の事で思い込むのは止めた方が
良い

んじゃない？春秋が疲れちゃうよ」

そのもう一人が春秋に寄ってきて話しかけてきた。

「別に良いだろ。他の人に迷惑をかけている訳ではないんだから」

「そうだけど、私は春秋が心配なの！！友達として」

「だから俺はお前達が友達だと思ってないって言ってるだろ！！俺にまとわりつくんじゃないでって言ってるだろ！！」

「じゃあ、幼馴染として心配なの！！もうちょっと私たちの事も考えてくれても良いじゃないのよ！！」

そう。彼女、水谷美咲みずたにみさきは春秋の幼馴染である。

春秋とは幼稚園からの知り合いでそれからずっと一緒に居るのだ。

美咲は春秋に好意を持っていたりする。

だから、春秋がこう拒絶されても挫けずに前の春秋に戻って欲しかったのだ。

でも春秋は美咲のこともまとわり付いてくる人物だと思っており、ただの腐れ縁にしか思っていない。

「……」

春秋は黙ってしまった。自分でも分かっているのだ。他人に迷惑をかけてないとしても心配はさせている事に。

でも春秋はそれを許さない。たとえ他人を傷つけてしまっても、自分のした事は許されない。だから、そんな人間が友達を作って良いのかと。

「お願いだから、余り自分を責めないで」

拳げ句の果てには美咲が泣き出してしまった。

春秋はさすがに戸惑ってしまった。どうすれば良いのかと。自分のした事は許せないでいる。でも、

——菜乃葉、もう良いよね。俺が友達を作っても。

春秋は挫けてしまった。この二年間、菜乃葉を交通事故に合わせってしまった自分を攻め込んだのだからもう良いと思ったのだ。そして、美咲の頭に手を乗せて撫で始めた。

「…え？」

「ごめんな。心配させて。もうその事で心配させないから」

「春秋！！」

美咲は春秋に抱きついてきた。

春秋は背中に手を回した。

しかし、そのときだった。

> 罪から逃げようとするものに生きる資格なし<

「うつ、」

「春秋！？」

突如春秋が苦しみだしたのだ。

美咲はすぐに春秋が苦しみだしたのが分かり、抱きしめるのを止めて春秋から少し離れた。

すると春秋は手を胸に押さえ、床に倒れた。

訳が分からなかった。何故、いきなり苦しみだしたのかと。

だかこのとき春秋はある事を考えていた。

——菜乃葉……駄目なのか……俺が……した事を……許しては……いけ

ないのか？

春秋は菜乃葉に話しかけているようにそう心の中でそう言った。そして、春秋はある決心をする事にした。

——はは……今…分かったよ…俺は一生罪を償わなければならない。自分がやった罪を許してはいけないんだ。

春秋はそう答えが出ると心臓は苦しくなってきた。そして立ち上がり、美咲たちの方を見た。

「春秋、大丈夫なの？」

「ああ、大丈夫だよ。それと、もう俺に関わるな」

「ど、どういう事よ。さつきと全然違うじゃない！！どうして、またそんな事を言うのよ！！」

「今ので分かったのさ。俺はあの時の罪を一生許してはならない。分かったらさつきと俺から離れる」

「……分かったわ。海斗行きましょ」

美咲は諦めて、海斗と一緒に春秋から離れようとした。

「その前にちょっと。おい春秋ちょっとこっちを向いてくれ」
「なんだよ」

刹那、海斗は春秋を殴った。
突然の攻撃に春秋は驚いた。

「な、何するんだよ！！」

「すこしは美咲の気持ちを考えてやれよ！！」

そう言つと、海斗も春秋から離れてしまった。

「何なんだよ……俺だって、美咲の事は考えているよ。けど、これだけはどうしても譲れないんだよ」

春秋はそう小さく呟いていた。

第一話（後書き）

意見、感想お待ちしております。

第二話

6月21日午後3時30分

「やっと終わったな」

今日の授業が全て終わり、いつも通り一人で帰ろうとした。
でも、今日は少し心残りがあった。

——さすがに、ちょっと言いすぎたかな。後で謝っておくか。

春秋は朝の事でちょっと言いすぎたなと思い美咲に謝ることにした。

美咲の所に行く美咲は帰ろうとしていた。

「美咲、ちょっと待ってくれ」

「一体何よ。朝はあんな事をあつたのに何のようなの?」

美咲はどうみても怒っていた。当たり前だ。春秋はあんな事を言ったのだから。

春秋はそれでも朝の事を謝ろうとした。

「さっきはごめん。さすがに言いすぎた」

「そんな事を言いにくたの? 私は春秋が昔の春秋に戻るまで許すつもりはないわ」

「それは出来ない」

「どうして!?! 何で戻る事は出来ないの!?!」

「それは……」

春秋が何かを言い返そうとしたその時だった。

「『^{オープンゲート}魔術開放』！！」パリン

「「！？」」

突如、教室の中が光に覆われ、窓ガラスが全て割れる音がした。光はすぐに消えたが、春秋と美咲は何が起こったのか分からなかった。

幸いにも、もうこの教室には春秋と美咲しか居なかった。

「な、なんだ！？」

春秋は窓ガラスが割れているのに驚いた。

だが、美咲は冷静でいて、こう告げた。

「春秋、私の後ろに居て」

「み、美咲？」

春秋は今の美咲を見ていつもの美咲ではない事に気づいた。

今の美咲は周りを警戒していたのだ。

そして、窓の外に人が宙に立っていた。

「な〜んだ。折角簡単な仕事だと思ったに邪魔者も居たのかよ」

宙に立っている男は剣を持っていて、剣が光っていた。

「あなた、何処の所属よ」

「俺か？俺は東の青竜所属の五彩^{いはいごう}亮だ。まさか南の朱雀の『^{アクエ}水の精^{リァ}霊』が居るとは思わなかったよ」

「それとその言い草だと私に用がある訳ではないよね」
「その通りさ。俺にはそっちの男に用があるんだよ」

宙に浮いている亮は春秋の方を見た。

春秋は二人が何が言っているのか全然分からなかった。

「どういう事よ。春秋はこれに関係ないはずよ!!」

「いや、関係あるんだよ。こいつは『七つの大罪』の持ち主なんだからさ!!」

「う、嘘でしょ。春秋が『七つの大罪』を持っているなんて」

美咲は驚いていた。『七つの大罪』を持っているのが幼馴染の春秋だったなんて。

そして春秋もこの戦い、四神戦争しじんせんそうに関わっているなんて思わなかったのだ。

「『七つの大罪』。俺達、エターナルパワー物。俺達がそれを見逃すと思うか」

「なるほどね。要するに春秋を青龍に勧誘しようとしに来たのね」

「そう言う事だ。邪魔するのならば容赦はしないぜ」

「それはこっちもよ。『魔術開放』」

美咲が『魔術開放』オープンゲートと言うと、美咲の地面から鳳凰の紋章が出てきた。

そして美咲の服は変わり、水色のドレスの格好になり特徴ある青い髪は長くなっていた。

「じゃあ行くわよ!!」

美咲は手に水の玉を作り、亮の方に投げた。

「そんなもの、簡単に避けられるわ」

亮は飛んできた水の玉を簡単に避けた。

「それはどうかしら？ウォータークラッシュ水の破裂！！」

刹那、水の玉が爆発した。

「な、ライトウォール光の壁！！」

亮はさすがに予想外だったのか驚いていた。
でも亮はすぐに対応して、光の剣で壁を作ったのだ。

「俺は、『ライトナイト光の剣士』と言ってな。剣を使っているんなことが出来るのさ」

「なるほどね。貴方エターナルパワーの不滅の力も結構強いのね」

「それはこつちの台詞だ。朱雀の中でも何人のものを倒してきたと言われている『アクエリア水の精霊』がどんなものかと思ったがなるほどな。
有名なのは当然だな。それに、なんで俺がこの仕事が頼まれたのか分かったぜ」

「それはどうも」

二人は睨みあいながらも褒めていた。
そして、先に動き出したのは美咲だった。

「ウォーターカッター水力切断！！」

美咲は人差し指を伸ばし、そこから細い水のビームみたいに伸びた。

速度は音速を超えていき、亮に向かって行った。

ライトウォール
「光の壁！！」

亮はまたもや光の壁を作り、ライトウォール水力切断を防ごうとした。
ウォーターカッターだが、水力切断は光の壁を貫通した。

「な、」

亮は貫通するわけ無いと思っていたので驚いた。

スピードオフライト
「くっ、光の速度！！」

スピードオフライトだが亮は光の速度でその場から一瞬で消えた。

「！？」

美咲は亮が一瞬で消えたのに驚いた。

美咲は周りを探してたが見つからなかった。

「ど、何処行ったのよ！！」

「俺はここに居るさ」

「っ！？」

美咲はすぐに声が聞こえた方から逃げようとするが、そうは行かなかった。

亮が光の剣を振って、美咲を切ろうとしたのだ。

そして、その剣が美咲のわき腹を斬り付けたのだ。

「あがつ、」

美咲は一瞬バランスを崩しそうになるが、何とか持ちこたえた。そして美咲はわき腹から出ている血を抑えながらとりあえず亮から離れた。

「おいおい、さっきまでの勢いはどうした。もう終わりだと言っわけじゃないだろ」

ウォーターカッター
「くっ、水力切断!!」

美咲は亮の挑発に乗ってしまった。
ウォーターカッター
だが、美咲が放った水力切断は全然違う所を放っていた。

「言い忘れたけど、この剣に触れたものは五分だけ視覚を奪うのさ。奪うと言っても完全に目が見えるわけではないのだが五分あれば十分だ」

「な、何ですって」

「さて、そろそろ終わりにしますか。さようなら。『水の精霊』」
アクエリア

美咲は死を覚悟した。視覚を奪われた今の美咲には勝ち目が無かったのだ。

美咲は目を瞑った。

けど、何時まで経っても亮は美咲を殺そうとはしなかった。

「ど、どういふつもりだ。覚醒していない今のお前に何ができると言うんだ」

突如亮の声が聞こえた。

美咲は目を明けて確認をした。

「な、何をやっているのよ春秋!!」

美咲は驚いた。美咲と亮の間に春秋が割り込んで来ていたのだ。

第二話（後書き）

続けて投下しました。

登場人物に関してはちょっと待ってください。

第三話

「春秋、どういづつもりなのよ!!」

美咲は怒鳴りながら春秋に言った。

そりゃそうだ。まだ、覚醒もしていない人間が何も出来るわけが無いのだ。

そんな人間が自分を守ろうとしたのに驚いたのだ。

そして、春秋は微笑みながら言った。

「俺は、何が起こっているのか分からない。けど、目の前で美咲が殺される所なんか見たくないんだよ!!」

「死ぬ気なの!!春秋はまだ覚醒していないのよ!!そんな奴が目の前の敵に倒せると思ってるの!？」

「ふ、」

亮は笑いそうになっていた。こんな事は今まで無かったのだ。不^{エタ}滅^{ナルパワー}の力がまだ覚醒していない人間に守られるなんて。

「お前は面白い事をしてくれるね。気に入ったわ。命令で来たが、俺自身がお前を欲しくなった」

「俺はお前なんかについて行くつもりは無い!!絶対にだ」

「そうか。なら仕方ない。ついて行くつもりが無いのならお前も殺すまでだ。二人一緒に死ね」

亮は剣を構え、二人いつぺんに殺そうとした。

「春秋逃げて!!貴方まで死ななくて良い!!死ぬのは私だけで…」

…」

「そんなこと聞けるか！！俺は美咲を守りたいんだよ！！」

「でも……」

「おいおい、二人で口論をするなよ。どの道、お前らはお互いに死ぬんだからよ！！」

亮は剣に光を貯め始めた。

美咲はその時あることを思いついた。
だがそれは賭けだった。

「やっぱり逃げて！！死ぬのは私だけで良いから」

「俺は逃げない！！美咲こそ逃げる！！」

「春秋はそれで良いの！？菜乃葉は誰が面倒を見るの！！」
「っ！？」

そう。美咲の賭けは春秋の不滅の力を覚醒させる事だった。
エターナルパワー

不滅の力は自分の目的が鮮明で、それに揺ることがなければ使える
ようになるのだ。

春秋が持っている力が『七つの大罪』グリモワールだというのなら、何かの罪を
背負いながら戦う不滅の力だ。
エターナルパワー

美咲は春秋の罪が何なのか何となく分かっていたのだ。誰の罪を背
負っているのか。

そして、美咲は話を続けた。

「春秋は菜乃葉が目が覚めるまで見続けるんじゃないの！！」

「そ、それは」

「なら、早く逃げて！！春秋は生きていかなければならないのよ！
」！」

美咲は芝居をしながらそう言った。

美咲は春秋の性格は知っている。たとえ妹の菜乃葉を交通事故に合

わせて自分をずっと責め込んでいても、根っこの部分は変わってないと分かっているのだ。

だから美咲がそんな事を言ったとしても多分美咲を守るような事を言うと思ったのだ。

——確かにそうだ。俺は生きて自分の犯した罪を償わなくてはならない。けれど、

「確かに、俺は菜乃葉にしまった罪を償わなければならない。それでも、俺は美咲を殺させる訳にはいかない!!」

「春秋……」

現に春秋は美咲が予想してた通りの答えが返ってきたのだ。

——これで良い。後は賭けだね。これで春秋の不滅の力エターナルパワーが覚醒すれば……

「ふ、ふははははは。傑作だ。こんな友達思いなんてな」

「言っておくけど、春秋とは友達でも何でもないわ」

それを聞いて春秋は驚いた。美咲から友達ではないと言ったのだ。今まで俺が美咲を拒絶していたのに美咲からそれを聞くとは思わなかったのだ。

「そうか。まあそんなのどうでも良い。そろそろ死ね」

そして、亮は右手に持っていた光の剣を振りかざそうとした。

——ここで死ぬわけにはいかないんだ!!俺は、菜乃葉が意識を取り戻すまで自分の罪を償わなければならないんだ!!

刹那、亮の右手に何が貫通した。

「な、」

亮は予想外の攻撃に驚いたのだ。

そのおかげで手から光の剣が地面に落ち、手からは血が出ていた。

「な、何をしたんだ!!」

亮はもう片方の手で右手押さえながら言った。

そしてその直後、地面にある紋章が描かれていた。

描かれてた紋章は鳳凰。朱雀の所属と言う事だ。

だが、ここには美咲しか朱雀所属は居ないはずだ。しかも美咲は魔術開放を發動している。美咲では無いはずなのだ。

なら、誰なのか？そう思った亮はあることに気づいた。

ここに居たのは青龍所属の自分とと朱雀所属の水谷美咲、そして覚醒していない吹矢春秋だ。

覚醒してはいないにしろ魔術開放を使える人間はもう一人居たのだ。しかも、いつ覚醒すかは分からない。自分の決意が決まればいつでも不滅の力を覚醒するのだ。

そう。春秋が今覚醒してもおかしくないのだ。

でも、鳳凰の紋章は誰かを中心に發動していた。

その中心に居た誰かはどう見ても春秋の姿では無かったのだ。

髪は赤色で長く、服装はどこかのアニメで見たことがあるような私服みたいな女性だった。

でも、彼女の周りには七色の結晶が宙に浮いていた。

結晶には スベルビアsuperbia、インヴィディアInvidia、イラIra、アケディAcedia、アフリティアavaritia、グラGula、ルクスリアLuxuriaと書いてあった。そう。書かれてあったのはラテン語で書かれた七つの大罪だったのだ。

美咲と亮はこれを見て發動したのは一人しか居ないと分かった。七

つの大罪を使う^{エターナルパワー}不滅の力は『七つの大罪』^{グリモワール}しかないのだ。
そしてその『七つの大罪』^{グリモワール}を持つている人物は春秋なのだ。
そう。あの七つの結晶の中心に居る女性は性転換した吹矢春秋なのだ。

「春秋……なの？」

美咲は一応尋ねたのだ。それもそうだ。身長も体系も変わっており、男だった時の春秋の姿が跡形も無かったのだ。
だが女になった春秋は微笑みながら言った。

「そうだよ。私は吹矢春秋だよ」

春秋の口調に不自然が無く、正体が知らなければ絶対に元々女性だと気づかないような感じだった。
美咲は春秋の反応を見て驚いた。ごく普通に今の状況を受け入れていたのだ。

「驚かないのね？自分が女になったのに……」

「私も少しは驚いたけど、なんか簡単に受け入れられたわよ。何か女になって当然のような感じがしたのよ」

「そ、そうなんだ……」

「さて、無駄話はこれくらいにしてそろそろ……」

春秋は向きを亮の方に向けた。

「……はっ、俺に勝てると思ってたのか？まだお前は覚醒したばかりだろうが」

「確かにそうかもしれない。けどそれは私と戦ってから言いなさいよ！……」

「それもそうだな。じゃあいくぞ!!」

そして、春秋と亮の対決が始まった。

第三話（後書き）

春秋の性転換についてなんですが、『七つの大罪^{グリモワール}』を使っている春秋の姿が全然想像できなかったので急遽『七つの大罪^{グリモワール}』を使用したときは女になるようにさせました。

ちなみに姿なんですが容姿から私服まで何もかもfortissimmoの里村紅葉の姿です。っていうかそれしか思いつかなかった。どんな姿が見たければ『fortissimmo/akkord:bussvier』の公式ホームページを見るなりしてください。

第四話

「じゃあ私から行くよ！！Invidia！！」
レヴィアタン

春秋は七つの大罪の一つ、Invidiaレヴィアタンの結晶を亮に向けて撃った。

「チッ、」

亮は右手が使えなくなってしまったので左手に光の剣を持つてはじき返そうとした。

だが、亮が左手で振ったときは何故か全然遅く、Invidiaレヴィアタンが通過していたのだ。

しかし、Invidiaは亮の右腕をかすただけだった。

「は、かすただけじゃないか。やっぱり覚醒したばかりで慣れてないんだな」

亮はInvidiaレヴィアタンがかすったのを見てまだまだだと思った。
だが、これで良いのだ。春秋は元々右腕を抉らせるつもりは無かったのだ。

かすっただけ、それだけで春秋が優位になるのだから。

「今度はこちらから行くぞ！！光の速度！！」
ライトオブスピード

亮は春秋が考えている事も気づかないまま、春秋に近づこうとした。

だが次に亮が現れた場所は春秋から離れている所だった。

「な、！？」

亮は訳が分からなかった。確かに亮は春秋の近くに現れようとしたのだ。

だが現れた場所は全然離れた所。その時点でおかしいと思った。

「く、もう一度！！ライトオブスピード光の速度！！」

亮は訳が分からないままだったが、確認の為にもう一度春秋に近づこうとした。

だが結果は同じで、次に自分が現れた場所はまたもや春秋から離れていた所だった。

「貴様！！一体何をしたんだ！！」

亮はこれが春秋がやったのだと思いそう言った。

だが、次に春秋から返ってきたのは予想外の言葉だった。

「私は何もしてないよ。あなたが勝手にそこに向かっているんだよ。したと言っのなら最初の攻撃かな？」

そう。春秋は何もしていないのだ。これは、亮自身がそこに向かって行ったのだ。

したと言っのなら最初の春秋の攻撃で亮は春秋に近づけないのだ。
レヴィアタン
最初の攻撃と言っのはInvidiaで攻撃した方ではなく、亮の右手を貫通させた方である。

レヴィアタン
逆に言えばそれだけだ。Invidiaで攻撃したものもあるがそれは今の亮の行動とは関係ないのだ。

「最初の攻撃だと？まさかそれには何か特殊な効果でもあるのか？」

「確かにあるよ。最初に撃ったIraには視覚を奪う効果があるけど？」

「し、視覚だと！？俺の光の剣と同じ効果を持っているのか！！」

「そうだけど？それともう一つ貴方はInvidia喰らっている。
レヴィアタン

Invidiaは固有感覚を奪う筈よ。普通なら立っていられない筈だけど？」

「な、何だとっ！？」

「ようやく発動したようだね」

亮が何かを言おうとした時、突然倒れたのだ。Invidiaの
レヴィアタン
効果、固有感覚を奪う効果がやっとな発動したのだ。

何故、時間差で来たのか春秋にも分からなかったが、Invidia
レヴィアタ
の効果効いてなかったと思っていた春秋にとって今はどうでも良かった。

そして春秋は人差し指を唇の近くに寄せて微笑んでいた。

「もう分かっていると思うけど、私の『七つの大罪』はかすたり
グリモワール
するだけで効果が発動するのよ。superbiaは嗅覚、Inv
ルンファ
idiaは固有感覚、Iraは視覚、Acediaは聴覚、Ava
ベルフェゴール
mon
ritiaは触覚、Gulaは味覚、Luxuriaは痛覚を奪う
アスモデウス
効果がね」

「く、覚醒したばっかなのになんで自分の能力が分かるんだ？」

「それは私にも分からないよ。ただ、自分の能力が何なのか頭の
中に伝わってくるのよ」

そうなのだ。春秋が『七つの大罪』をこんなにうまく使っている
エターナルパワー
理由は普通の不滅の力ではありえないのだが春秋の頭の中に伝わっ
てきたていたのだ。

「そんなばかなー！普通はそんな事は無いはずだー！」

「そんな事は私に聞かれたって知らないよ。さて、もうめんどくさいからそろそろ終わりにしましょうか？Invidia、レヴィアタン Ira、ヘルフェゴール Accedia、アスモデウス Luxuria！！」

春秋がそう言った刹那、四つの結晶が四方八方から亮に向かっていった。

さすがに逃げられないと思ってそう攻撃したのだ。

しかも先ほどまで致死傷を避けていたが四つが亮の心臓、両膝、腹、を目掛けていたのだ。

残りの三つは亮が逃げたための備えてあった。

「くっ、」

亮は最初の四つはなんとか避けられた。

だが、まだ三つも残っているのだ。

「避けるのは分かってたよ！！ルシファールsuperbia、マモavaritia、ヘルゼラフGuila！！」

春秋は残り三つを亮が避けた方向に目掛けていた。

「私を殺そうとした罪を償いなさい！！」

春秋は最後にそう言って亮に止めを刺そうとした。

「くそおおおおお！！」

亮はもう逃げようが無く殺されるしかなかった。
だがその時、

カキン、カキン、カキン

ルシファー
superbia、マモンAvartitia、ベルゼブブGulaの結晶が弾かれたのだ。

「な、」

春秋は突然弾かれたことに驚いたのだ。

一体誰かと春秋は思ったが、いつの間にか亮の近くにもう一人が居たのだ。

それは髪が黒いツインテールで歳が中学生の少女だった。

「まったく、連れて来いって言われてただけなのに何でこんな事になってるのよ？しかも、目的の奴は朱雀として覚醒させてるしね」

「すまないな。奈雪^{なゆき}。お前が居なければ俺は死んでた」

「亮を殺させるわけ無いじゃない。私の決意は亮を守る事であって

……」ブツブツ……

「ん？なんて言った？」

亮は奈雪という少女の最後の方はうまく聞き取れなかったようだ。

「何でもない！！とりあえず逃げるよ！！」

「逃がすと思ってるの？ベルフェゴールAcedia！！」

春秋は二人を逃がさないとすぐにベルフェゴールAcediaを二人に放った。

だがまたしても『カキン』という音がして弾かれた。

しかも、何によって弾かれているのか分からないのだ。

「な、」

「私に効くと思っているのかしら？私はあなたと同じ上位八つに入

る『スケルトンアーム透明武器』。目に見えない武器を使って攻撃する。」

「私と……同じ？」

「そういえばあなたは今日覚醒したんだっけ？まだそんなに知っていないのか。そこの彼女にでも聞いておいてね。それじゃあ」

そう言うつと奈雪は亮と一緒に姿が消えた。

そしてこの教室に居るのは春秋と美咲の二人になり、春秋と美咲はオープンゲート魔術開放は解除して、春秋は元の男に戻った。

第四話（後書き）

元々、亮は敵キャラでいこうと思っていたのですがどうしてこうなった。

もはやこの感じだと敵キャラと言うより第二の主人公的になってるじゃん！！

って言う事で急遽亮は第二の主人公って言う事で。

後、登場人物紹介は序章が終わったという事で。多分序章が終わるのは後二、三話だと思います。

第五話

「美咲、大丈夫？」

春秋は亮の攻撃を受けて座っていた美咲に話しかけた。
美咲は未だにわき腹を押さえながら立ち上がった。

「だ、大丈夫よ。くれぐらしいの傷つ、」

「大丈夫じゃないじゃねえか！！ちよつと待ってる」

春秋は自分のリュックの中から汗を拭くために持ってきていたタオルをとりだした。
そしてタオルを血が抑えられるように巻いて結んだ。

「ありがとう」

「いや、俺は普通の事をしただけさ。さて、次は……」

春秋は美咲のわき腹にタオルを巻いた後、教室を見渡した。
あれほどはちゃめちやに暴れたのだ。だから教室も酷い事になっているだろうと思って見渡したのだ。
だが、教室は窓ガラスが割れたことと壁に細いくぼみが出来ていただけで後は机が倒れていたりしているだけだった。
春秋、美咲、亮の戦いは威力は強かったが余り被害は受けてなかったのだ。

「結構綺麗だな。お前の水力切断で壁にぶつかってその部分だけくぼんでいただけだからな」
ウォーターカッター

「そつえばそうね。でもどの道、先生に見つかったら大変な事になると思うけど……」

「それならもうとつくに誰かが来ているだろ。誰かが誰も来ないようになっているんじゃないのか？」

「まるで人払いのように？でも一体誰が……」

「それは俺だよ。ずいぶん暴れたようだが被害は少ないな」

「ふ、藤木さん！！どうしてここに？」

突如教室に現れた人物は藤木翔ふじきしょうという人物だった。

彼も美咲と同じく朱雀所属で美咲の先輩にあたる人物だ。

「いや、水谷に用があつて学校に来たんだけど、なんか大変な大変な事になっててさ。すぐさまこの教室とその周辺に人払いを發動させたのだよ」

「なら、早く来てくださいよ。私死にそうだったんですけど？」

「それでも良かったのだけど、君の彼氏が覚醒するのを見たかったのね。ちよつと観戦してた」

「か、彼氏い！？」

春秋と美咲は驚いた。いきなりそんな事を言うからだ。しかも美咲は口をパクパクして、顔を真っ赤にしていた。

「あれ、違うのかい？まあこの際どうでも良いや。俺は藤木翔。よろしくな春秋」

「ふ、吹矢春秋です。よろしく……」

春秋は未だに事情が分からないままだったが、とりあえず自己紹介をされたので自分も自己紹介をした。

「さて、本当は水谷に用があつただけどそれは今度にするか。二人の邪魔をしちゃいけないし」

「だから恋人同士じゃない！！」

「分かったから。もうおちよくないよ。それで水谷、この日本で何が起きているのか吹矢に全て話しておけよ。俺はここを綺麗にするのもうちよつとここに居るつもりだからな」

「……分かったけど先生とかに見つからないの？」

美咲は何か釈然としなかったが、とりあえずそう答えた。

「人払いを使っているから大丈夫だ。さっさと行け」

「分かった。じゃあ春秋行きましょ」

という事で春秋と美咲は自分の荷物を持って教室を出た。

「さて、そろそろ始めるとするか。魔術開放^{オープンゲート}」

藤木は二人が教室から出て行った後、自分の能力で教室を修復し始めた。

6月21日午後4時30分

春秋と美咲は学校を出て下校した。

ちなみに亮との戦いが約三十分かかっているのだが、その後の三十分間は何をしていたのかと言うと、さすがに美咲の制服が切られてしまい、さらには血がべったりと付いていたので学校のジャージに着替えたのだ。

また、二人は家に向かっているではなかった。

「で、今日はあの事で話す事があるから俺と一緒に病院について行

くんだよな？」

「そうだよ。ついでに菜乃葉のお見舞いも兼ねてね」

「菜乃葉のお見舞いはついでかよ……」

「別についてでは無いから。この一週間の間に行こうとは思ってたのよ」

「はいはい、分かった分かった」

「もう、全然分かってないじゃない……」

二人は菜乃葉が入院している病院に向かっていたのだ。

ちなみに美咲は本当にこの一週間の間に菜乃葉の見舞いに行こうと思っていたりしていた。

「そういえば亮と戦った時に助けに来た女。奈雪だっけ？どこかで見たことがある気がするんだが……」

「え！？春秋の知り合いだったの？」

美咲は驚いた。なぜなら春秋には菜乃葉の事件以降、知り合いが少ないのだ。

しかも美咲は菜乃葉の事件以降、ずっと春秋を見ていたのでその間にあった知り合いではないはずなのだ。

だとすると、奈雪という女性は菜乃葉が交通事故の前に知り合った可能性が高いのだ。

「分からない。けど昔にどこかで見たことがあるんだよね……。黒髪でツインテール……」

「まあ、そんなに考えなくても良いじゃない？今春秋は聞くことがたくさんあるんだから」

「それもそうだな。でもなんで今言わないんだ？別に歩きながら言っても良いだろ？」

「それは、一般人に盗み聞きされてたら大変な事になるからよ。世

間ではそんな事起こっていないとなっているのだから」

「なるほどな。だから部屋とかの囲まれた所じゃないと駄目なのか」
「そういう事。それで病院はどっちだったっけ？」

春秋がなるほど思っていたら次にそんな言葉が返ってきた。

「……お前って相変わらず自分の良く行く所以外は方向音痴だよな」
「私だって好きでそうなっている訳ではありません！！それでどっちなの？」
「こっちだよ」

春秋は十字路を右に曲がり、先に進んだ。

そして数分後、話しているとやつと病院に着いた。

病院の中に入るとエレベーターに乗り、菜乃葉が居る階のボタンを押した。

エレベーターがその階に止まると、二人は降りて菜乃葉の病室に向かった。

病室の前に着くと春秋が扉を開けようとしたその時だった。

『菜乃葉お久しぶり』

中から声が聞こえて来たのだ。

菜乃葉の病室は個室の為、一人しか居ないはずなのだ。

っていう事は今聞こえた声は菜乃葉のお見舞いという事なのだ。

「どうしたの春秋？」

「中に先客が居る。誰だか分からないが」

「そうなの。じゃあどうするの？ここで待つてる？」

「そうだな。時間がかかりそうだったら俺達も入ればいいか。」

二人は菜乃葉の病室に先客が居たので扉の前で待つ事にした。その間も、中から声が少し漏れていた。

『ごめんね。親友なのに病院の場所を知らなかったから来れなかったの。でも久しぶりに会えて良かった』

どうやら中に居る人は菜乃葉の親友だったらしい。

——菜乃葉の親友？確か菜乃葉の友達と言えば……

春秋は菜乃葉の親友だと分かると菜乃葉の友達を思い出そうとした。

——あれ？出てこない。つて当たり前か。菜乃葉が友達を連れてきた時、俺は気まずくて家を出て行ったからな。

だが、思い出そうとしても何も出てこなかった。

それから中から声が聞こえてきたが、さすがに盗み聞きをするのはどうかと思ったのでそれ以上は聞き流すことにした。

そして数分後、中から『そろそろ、行くね。お義兄ちゃんもそろそろ終わってると思うから』という言葉が聞こえて来た。

やっと終わったか。と春秋は思っていると扉が開いた。

だが春秋と美咲は今まで話していた人物に驚いた。

「「「な、あなたなんでお前がここに！？」」」

そこに現れたのは先ほど、亮と一緒に逃げた奈雪だったのだ。

第五話（後書き）

意見、感想お待ちしております。

最終話

「まさか春秋さんがあの『七つの大罪』^{グリモワール}だったなんて……」

「それはこつちもだ。まさかお前が菜乃葉の親友だとは思わなかったよ。まあどこかで見たことはあると思ったけど」

その後、春秋と美咲と奈雪の三人はまず美咲と奈雪が互いに知らなかったので自己紹介をして、その後菜乃葉の病室で話していた。また奈雪の名前は透林奈雪^{とつばやしなゆき}。菜乃葉の親友である。

「私って印象薄いですか？逆に背が小さくて黒髪でツインテールなのに……」

「いや違うんだ！俺は菜乃葉の友達が家に来た時、俺って外に出かけていったから余り覚えてなかったんだ！しかも三年前のことだったから忘れてただけだ！」

「そうだったのですか。まあそれでも忘れてたのはちょっと落ち込みましたよ」

「それはごめん！」

春秋は自分が奈雪の事を忘れてたことに謝った。

「しょうがないですねもう良いですよ。でも一つだけ聞いていいですか？」

「なんだ？」

「何で私や菜乃葉の友達に入院している場所を覚えてくれなかったのですか？私達、今でも菜乃葉の事相当心配していたのですよ」

「そうだったのか。それについては謝るよ。でも、菜乃葉に友達に迷惑をかけなくなかったのだよ。菜乃葉は今でもいつ目が覚めるか分からないからな。だから俺と俺の親は思ったんだよ。菜乃葉には

悪いが、友達にはもう菜乃葉の事は忘れさせてもらって今を生きて欲しいと」

「そんなの。余計なお世話ですよ。私達は現に今でも菜乃葉の事は忘れていませんじゃないですか。逆に辛かったですよ」

「……そうか。確かに余計なお世話だったかも知れないな。ごめん逆に辛くしちゃって」

「もう良いですよ。それにまた菜乃葉に会ったのですから」

奈雪はまた菜乃葉に会えたので春秋に謝らなくて良いって言った。春秋もそれを聞くと『じゃあ今度は菜乃葉の友達を連れてきてお見舞いに来てくれよ』と言った。

奈雪はそれに『はい』と答え、『今度友達も連れてきますね』と言いつ返した。

とても良い感じだった。何も無かったのように。

だが二人はある事を忘れていた。春秋は朱雀、奈雪は青龍所属で二人は敵同士だと言う事を。

そしてそれを思い出させこの空気をぶち壊したのは、今までずっと黙っていた美咲だった。

「ねえ、ずっと思っていたのだけど、私達は奈雪さんの敵同士じゃなかったけ？」

「「あ、」」

春秋と奈雪は今更気づいたようだった。

二人は少し無言になり空気が重く、気まづくなった。そしてさらにめんどくさい事になってしまった。

「おい奈雪、まだここに居るのか？」

亮が右手の怪我を治し終わって奈雪が居る病室に来てしまったの

だ。

「な、何でお前らが居るんだ!!」

亮は先ほど三人が言ったような事を聞いてきた。

「俺達がここに居ちゃ悪いのかよ」

「奈雪が昔の友達が入院している所にお前らが居るのはおかしいだろ」

「その友達が俺の妹だと言うのに？」

「は？」

亮はポカンとしていた。理解が出来ていなかったのだ。そしてやっと理解できたのは数分後のことであつた。

「なるほど。世の中って狭いものだな」

「納得したのは良いのだが本題は片付いてないよ。私達は敵同士。本当なら私達は戦わなければならないのよ」

「確かに水谷さんの言うとおりですね。じゃあ、休戦協定でも結びますか？」

「休戦協定？」

「一時この四人で戦う事は止めるという事です。私は春秋さんとは戦いたくはありませんし、そもそも自分の決意に反してます」

「自分の決意？」

「そういえば春秋さんは覚醒したばかりでしたね。仕方ありませんが一から話してあげます」

春秋は分からなかった。どうして自分の決意が関係するのか？そして奈雪は春秋がまだ覚醒したばかりということに気づき、敵であるが話が進まないなので仕方なく一から話す事にした。

「私も手伝うよ。元々春秋に話しておかないといけないのは私ですから」

奈雪が春秋にこの四神戦争の事について話すような事を言ったので手伝う事にした。

「まずは四神戦争からね」

「四神戦争？なんだそれ？」

「今、私達が関わっている戦争よ。もう戦争が始まってから二百年近く経っているの」

「に、二百年ってそんな戦争聞いたことがないぞ!!」

「そりゃそうだよ。だってこの戦争は表では知らされていないもの。そしてその戦争は四つの神、朱雀、青龍、白虎、玄武がそれぞれを殺そうとして一人だけ神になる為に争っている戦争なのよ」

「そして、この戦争には私達^{エターナルバワー}の力が関わっているんです。不滅^{エターナル}の力は神が意思を曲げない人物を選ぶのよ」

「だから、自分の決意が関係しているのか」

「そういう事よ。私の場合には自分の周りの人間を守る為。だから、さつき春秋さんを戦うことは出来ないって言ったの」

「なるほどな」

春秋は今まで自分に起こったことが分かった気がした。

今日、美咲たちとまた友達をなろうとした時に起こった心臓発作は自分の意思に反する事だったからであることに。

だとしたら春秋の自分の決意は妹の罪を償う為に友達を作る事は許されず、死ぬわけにはいかないという事だ。

「そして全て属性があり、炎、水、雷などを使う能力属性。

自分が獣になったり獣を扱ったりする獣属性。

回復魔法、攻撃魔法などを使う魔法属性。

魔法とは違い術式を唱えて戦う魔術属性。

そして上の全てに属さず唯一魔力を使わない無属性があります」

「それで、俺はどれに入るんだ？」

「春秋さんは私と同じ無属性になります。無属性はたった八人しかおらず、魔力をほとんど消費せず威力も強いので最強と言われています」

「だから、俺を誘拐しようとしたわけか」

「そういう事です。まさかそれが春秋さんだとは思いませんでした
が」

「それで他には？」

「とりあえず覚えておきたいのはそれくらいですよね美咲さん」

「まあそうね。後は春秋が戦っている時に分かんと思うから」

「分かった。大体理解したよ。要は自分の決意の為に戦えという事
だな」

「そういう事よ。春秋ってこう言うのは理解早いよね。勉強はそれ
ほどでもないのに」

「うるせえ」

春秋は美咲と奈雪の話聞いてすべて理解した。

そして自分の決意の為に戦うことも決意した。

「さて、そろそろ私達は帰る事にします。もう話す事も無いので。

じゃあまた今度。お義兄ちゃん行きますよ」

「分かった」

奈雪は待たせていた亮を連れて病室から出て行った。

二人が出て行った後、春秋と美咲は呆然としていた。

先ほど、奈雪が自然に亮を『お義兄ちゃん』と言った事に驚いていたのだ。

春秋と美咲はあの二人が兄妹だとは思わなかったのだ。

「……じゃあ美咲は先に帰ってくれるかな。まだ菜乃葉と一緒に居たいから」

「分かったよ。今度また改めて菜乃葉にお見舞いすることにします」

「そうしてくれると有り難いな」

「じゃあ明日学校で。後明日の放課後、ちょっと一緒に来て欲しい所があるから」

「分かった。明日の放課後な」

美咲は先ほどまであんな話をしていたので、また改めて菜乃葉のお見舞いに行く事にして今日は帰る事にした。

そして美咲が帰った後、春秋は菜乃葉の方を見た。

「ごめんな。今日は騒がしくて」

「……」

春秋は菜乃葉にそういい始めた。

当然、返事は帰ってくる訳は無いので、春秋はひたすら一人で菜乃葉に話し続けた。

「また目覚めてまた一緒に居ような」

春秋は菜乃葉の髪を触りながらそう言った。

それから数十分後、春秋はずっと菜乃葉に話し続けていた。そして面会時間の終了時間となった。

「じゃあ、俺はそろそろ行くな」

春秋は最後に菜乃葉の頬にキスをしてから病室から出ることにし

た。

そして、再度決意した。菜乃葉が目が覚めるまで絶対に死なないと。
その為なら、邪魔する人間を殺しても構わないと。

最終話（後書き）

やっと序章が終わりました。

今回は登場人物&用語集を書いてその次から本格的に始まります。

多分今日中には登場人物&用語集は書き終わらせます。それではまた。

第一話（前書き）

すみません。遅くなりました。

第一話

2010年6月22日午前7時30分

春秋はは何故かいつもより一時間早く学校に着いていた。
別に春秋は何かあつて早く学校に行った訳ではない。

一人で考え事をしたかったのだ。

一人暮らしなんだから家で考えれば良いかと思うが、家より学校で
考えていたかったのだ。

ちなみに考えている事はもちろん昨日の事である。

春秋は昨日美咲と奈雪からざっと聞いたが自分でも考えていたのだ。
本当は昨日言われた事についてあまり考えてなかったのだ。

だから今、一人しか居ない学校の教室で考えているのだ。

——昨日はあんな事を言っただけ、実際にそんな事が起こつてると
は考えられないな……。しかも、俺が持っている不滅の力エターナルパワーが強い部
類に入るなんて……

春秋はそんな能力者の事は普通にありえないと思つていたので
現実存在するとは思ひもしなかつたのだ。
しかも自分が『七つの大罪』グリモワールという不滅の力エターナルパワーの中でも強い部類に入
ると思ひもしなかつたのだ。

——多分、俺はこの四神戦争で次々に人を殺めていくんだろくな。
自分の決意の為に。

春秋は今後の自分がどうなるのか考え始めた。

——でも俺は本当にこんなので良いのか？そんな事をして俺は今まで通り普通に暮らせるのか？

春秋は本当にそれで良いのかと思った。

でもしょうがないのだ。自分の為^{ため}に他の人間を犠牲にする。そうしなければ自分が殺されるからだ。
それに、

——って俺はそう生きてきたじゃねえか。菜乃葉が交通事故にあつてから友達や幼馴染を捨ててきたじゃねえか。何を考えているんだか……

確かに春秋はそう生きてきた。周りの人間を犠牲にしても自分の罪を償^{かた}うために生きてきた。

だから今自分が考えていた事を何を今更と思い、馬鹿らしくなった。

——それにしても、何で『^{グリモワール}七つの大罪』を使うときだけ女性になるんだ？訳分からん。

そして春秋は別のことを考え、何故『^{グリモワール}七つの大罪』を使うときに女性になるのか気になった。

確かにそうだ。『^{グリモワール}七つの大罪』使用時に女性になる理由はない。

——だったら、『^{グリモワール}七つの大罪』には何かあるはずだ。そうでなければ女性なんかにならない。でもどうするか……

春秋はそう思った。女性になるなら何かの原因があるはずだと。
でもそんなのは調べようが無いと知っていた。

——あ、そういえば今日美咲が放課後に来て欲しい所があるって言

つてたつけ？多分四神戦争絡みだからそのときに聞いてみるか。

春秋は昨日、美咲が放課後に一緒に来て欲しい所があるって言うてた事を思い出し、何か知っているかもしれないからその時に聞こうと思った。

そして数十分後、春秋はまだ考え事をしていたが続々とクラスメイトが教室に入ってきて、美咲や海斗も教室に入ってきた。

春秋はそれを見て考える事をやめた。

春秋は二人が教室に入ってくるのをさにげなく見たが、昨日同様二人を無視する事にした。

美咲に関しては四神戦争についてだけ話すだけにするつもりで、それ以外は今まで通りにしようとしたのだ。

2010年6月20日午後3時20分

そして放課後、美咲はすぐに春秋に近づいて来た。

「何だよ。俺に何か用？」

「ちよつと来てくれない？」

「何でだ？」

「昨日聞き忘れたことがあったから」

「……分かった」

春秋は最初、断ろうと思ったが四神戦争の内容っぱいので了解した。

そして美咲に連れて行かれながら二人は学校の中で人気の無い場所に移動した。

「で、昨日聞き忘れたことって？」

「あのさ。春秋が私達を避けている理由についてなんだけど？」

「何だよ。全然四神戦争関係ないじゃないか」

「ちゃんと話は最後まで聞いてよ。それでね、その避けている理由ってこの前の心臓発作と関係している？」

「ああ、何となく美咲が言いたい事が分かったよ。その心臓発作が『七つの大罪』^{グリモワール}と関係しているのじゃないかって言う事だろ？」

「そういう事。それによって普段、春秋に対する私の対応が変わるから聞きたかったの」

美咲はこの前、春秋が心臓発作が起こっている理由が『七つの大罪』^{グリモワール}と関係しているのか聞きたかったのだ。

春秋はそれを聞いて正直に言おうか悩んだ。別に正直に言わなくても良い事だったからだ。けど、

「多分関係しているよ。『七つの大罪』^{グリモワール}は自分の罪から出来ているのだろ。その罪を逃げるようならば『七つの大罪』^{グリモワール}と矛盾してしまう。だから自分を殺しかねないんじゃないのか？」

「やはりそうよね。分かったわ。四神戦争以外は春秋と関わる事はやめる。その方が春秋を惑わせないから」

「ありがとうな。じゃああいつにも言っておいてくれ。説得するのは大変かも知れないが」

春秋は美咲にお礼をして先に下校する事にした。

美咲も少し経って下校する事にした。

「って忘れてた！！春秋には一緒に来て欲しい所があっただった！！」

とそんなどじっぷりを見せながらもとりあえず春秋を追うことに

した。

だが、走って春秋を探していたが見つからなかった。
なぜなら美咲が走った方向は春秋の家がある方に走っていったのだ。
春秋の日課である為、放課後は菜乃葉の病院に向かうことを忘れてたのだ。

「つてあれ？ここどこ？」

しかも美咲は方向音痴であるため、適当に走っていたせいか自分がどこに居るかも分からなくなっていた。

美咲は春秋を追うのを諦め、見覚えがある通りを見つけると仕方なく自分の家に帰る事にした。

2010年6月22日午後3時40分

その頃、県立藤村高校から一人の男性が下校しようとしたら校門の前で女性が待っていた。

「つてお前は何で毎日俺の学校に来るんだよ」

「だつてお義兄ちゃんと帰りたいんだもん」

「つておい！！呼び方！！」

「あ、またやつちゃった」

こんなやり取りをしている二人、五彩亮と透林奈雪はいつもこんな感じである。

ちなみに奈雪が毎日迎えに来るので学校では亮の知名度はとても高かったりします。

そしていつも通り二人は家に帰ろうとした。いつも通り、奈雪が亮

の腕にしがみ付きながら。

「なあ、毎回言ってるけど、しがみ付くのやめてくれないか？すごく恥ずかしいのだが」

「だって、亮の腕って気持ち良いんだもん」スリスリ

「だからやめてくれ！！」

そんな事を言いながらも下校している二人。

そしていつも通り通学路を通り、路地を右に曲がった時だった。

「おやおや、警戒もしないでいちゃついているなんて良い度胸ですね」

「「っ！？」」

右に曲がると男性が二人の前に居たのだ。

髪は黒で細長い体をしていた。

そして言い方からしてみれば多分四神戦争に関係しているだろう。

それしか見知らぬ人が二人に話しかける事なんて無いはずだからだ。

「……あなた、どこの所属なの？」

「俺か俺は白虎所屬だよ。そしてさようならオープングート魔術開放！！」

刹那、地面に虎の紋章が現れた。

だが特に男の体には特に変化は無かった。

「くっ、お義兄ちゃんは後ろに居てオープングート魔術開放！！」

奈雪もすぐに発動して、地面に竜の紋章が現れた。

奈雪は自分の周りにある透明な武器の内宙に浮いているナイフを操って男に投げつけた。

「ほう。それが『スケルトンアーム透明武器』か一つ一つには余り殺傷能力はなさそうだな。それでも」

刹那、透明なナイフは男に当たる前に跳ね返された。

見えるはずの無いナイフを跳ね返されて驚いた。

そしてそのナイフは奈雪に向かって飛んできた。

奈雪はすぐに自分の武器で防いでナイフを止めた。

「俺の『リフレクションアタック攻撃反射』には通用しない」

男はそう呟き、奈雪達を見た。

その目は見下している目だった。

「あ、あなたひょっとして私と同じ無属性なの？」

「いや違うさ。俺は魔法属性だよ。魔法属性でも特殊で心の中で唱えれば発動するという魔法属性さ」

「そう。魔法属性ね」

そして雪奈はすぐに攻撃の態勢に入った。

ナイフや爆弾、銃の発砲など有りとあらゆるところから攻撃した。だが全て跳ね返され、雪奈の方に飛んで来たものは全て避けた。

それでも雪奈は攻撃をやめず無駄だと分かっているが攻撃していたのだ。

「無駄無駄無駄！！そんなに攻撃しても俺には通用しない！！」

そんなの雪奈でも分かっている。けど雪奈は攻撃を繰り返した。敵のターゲットを自分にする為に。

そう。雪奈はターゲットを自分だけにする為に攻撃していたのだ。

しかも、相手の思考を考える暇をなるべく与えずに。
またこれにはもう一つ、相手の魔力を消費させる為というのもあった。
それが奈雪の目的だった。

——何故だ。どうしてこんな無駄の攻撃を続けるんだ？

だがさすがに男の方もおかしいと思った。何故無謀な攻撃を続けるのかと。

同じ攻撃を何度も続けても余り意味が無い事は男でも分かってた。
たとえ相手が無属性で余り魔力を消費しない人物でも。

自分の魔力を消費させるにしたとしてもそれっでは時間が相当かかってしまう。

そんなことよりもっと手っ取り早い方法を考えるはずとも思った。

——そういえば、今俺が戦っているのは一人。確か俺がここに来る時は二人……まさか！！

そして気づいた。奈雪と一緒に居た亮がいつの間にか居ないという事に。

そう。奈雪があの時、『お義兄ちゃんは後ろに居て』と言ったのは相手が敵を奈雪だけと認識する為。

そして案の定その作戦は成功していた。

「なるほど。俺は嵌められていたって訳か」

奈雪は男がやっとそのことに気づいた事が分かり、すぐに攻撃をやめた。

でも奈雪は微笑んでいた。予定通りだったからだ。
そう。男が今更亮に警戒をしても遅かった。

なぜなら亮が居るところは……

「俺ならお前の後ろ居るぜ」

男の真後ろだったからだ。

そして亮は光の剣を男の首筋に近づけたのだ。

「ど、どうやって俺の後ろに……」

「なに簡単な事さ。俺の『光の剣士』^{ライトナイト}は光を使って攻撃する。光の壁を作ったり光の速さで移動したり出来る。そして、光の中に化ける事もな」

「まさか、光の中に消えたと言うのか!!」

「そういう事。この世界は光で全て覆われている。俺が隠れる事なんて簡単に出来るのさ」

亮は男に首筋に少し斬りつけた。それだけで十分だからだ。
そして光の剣を男から放した。

「は？どういうことだよ」

「俺にはこれぐらいしか出来ないのさ。俺がとどめを刺そうとしたら多分お前の『攻撃反射』^{リフレクションアタック}で跳ね返されるのは分かっているからな」

「ふ、なんだ分かっているじゃないか。お前が俺に勝てないなんて
「ああ、そうさ。だから少し切り付ければ十分だったのさ。それだけで俺の力は発動するからさ」

「はあ？どういう……」

刹那、男が何かを言うとした時異変が起こった。

「な、何も見えない!?!」

そう。男は何もかも見えなくなったのだ。まるで失明したかのよう
うに。

目が見えないということは相手がどう攻撃してくるのかも分からな
い。『攻撃反射』という強い力を持っていたとしても何も見えなけ
れば意味が無い。

だから亮はこの手に出たのだ。とどめは奈雪に任せて。

でも、一つだけ疑問に思うことがある。それは何故美咲の時は全
ての視力を奪わなかったのかだ。

それは……

「くつ、やはり魔力を結構消費するな。光を奪うのは」

そうなのだ。視力を少しだけ失うだけならそれほど魔力を失わな
いのだが、視力を全て無くすのは相当の魔力を消費するのだ。

だから美咲の時は全て失わなくても勝てると思い、全ての視力を失
わせなかったのだ。

まあどの道、視力を失っているのは一時的なんだが。

「さて、今度こそ。あなたの終わりです!!」

奈雪は透明のナイフを操って四方八方にから攻撃するつもりだっ
た。

そして、攻撃とどめを刺そうとした時、異変が起こった。

ナイフが突然落下したのだ。

「なっ!?!」

さすがに予想外だった。ナイフが落下するなんて。
そして亮と奈雪にも異変が起こった。

「か、体が重い!?」

そう。二人は地面に吸い付かれるような力で動けなくなって居たのだ。

そして、三人の前に人が現れた。

「やれやれ。なに苦戦しているんだよ。俺が向こうに行かなくて正解だったな」

「その声は菅谷!? どうしてここに? お前は『七つの大罪』^{グリモワール}の方に
行ったのじゃないのか?」

「いや、何となく鈴川が危ない予感がしたからこちらに来て見たんだが予想通りだったな。毎回俺の推測には驚くばかりだな。後『七
つの大罪』^{グリモワール}の方は伴谷^{ばんたに}に任せてある」

今来た男、菅谷凱真^{すがやがいま}は先ほど亮と奈雪と戦っていた鈴川准也^{すずかわじゅんや}に近づいた。

しかし、亮と奈雪はそれを許すわけが無いのですぐに奈雪がナイフで菅谷に攻撃した。

「無駄だよ。俺には届かない」

だが菅谷には届かず、ナイフは先ほどと同じく地面に落下した。

「な、何よその力は」

「こいつほど俺は口が軽くないよ。言うわけが無いだろ」
「くっ、」

「さて、今回は逃げるとするか。まだ俺の目的の人物はこの町にも
う一人居るからな」

そう言うつと菅谷は鈴川を連れて逃げていった。

亮と奈雪は二人を追おうとするが、体がとても重いせいで動けなかった。

やっと動けるようになったのは十分後のことだった。

二人は魔術開放を解除した。

「くそ、逃げられた!!」

亮は近くにあった壁に向かって右手で殴った。

奈雪はそれを見て亮の右肩に手をのせた。

「そんなに急ぐ必要は無いよ。四神戦争が本格的に始まったのは最近なんですから」

「……そうだな。まだ焦る必要はないな。でもさっき、菅谷っていう男から『七つの大罪』^{グリモワール}って言うてたよな？」

「まさか今度は菜乃葉のお兄さんを狙うつもり!？」

「でも大丈夫だろ。『七つの大罪』^{グリモワール}は無属性でも上位一位、二位を争う代物のはずですから。それに俺達はいっからの敵なんですから」

「そうよね。まあ大丈夫ですね。じゃあ帰ろっか」

という訳で二人は春秋の心配はしなくても大丈夫だろうと思ったので家に帰る事にした。

第一話（後書き）

しょっぱなからバトルシーンを入れました。次回は春秋と伴谷という奴の戦闘です！！

後、新たに出た登場人物は第一章終了時にいっぺんに書くつもりなのでそれまで待ってください。

第二話

2010年6月22日午後4時

春秋はいつも通り、奈乃葉のお見舞いの為に病院に居た。もちろん。美咲が春秋を探しているなんて知る由もない。そしていつも通りに菜乃葉の病室を訪れようとしたその時だった。

——誰かが俺を尾行している！？

春秋は自分が尾行されている事に気づいた。

でも自分が尾行に気づいて行動したら向こうは何をするのか分からないのでいつも通りに奈乃葉のお見舞いをする事にした。

そして、菜乃葉の病室に着いて普通にお見舞いをする事にした。

だが尾行されていながらお見舞いは気が散って何も奈乃葉に話しかけられなかった。

春秋が逆に機嫌が悪くなり、とりあえず奈乃葉の頬にいつも通りにキスをして帰る事にした。

そして病院を出て家に帰る方向に歩いた。

少し歩いて人気が無くなる所に着くと足を止めて後ろ向いた。

「さっきから誰だよ。俺の後を尾行しているのは？」

「やはり気づかれていましたか」

すると、男が春秋の前に現れた。

「お前誰だ？」

「俺は伴谷嶺鬼^{ばんたにりょうき}。スキル？^{ナイン}とも言われている」

「スキル??」

「^{エターナルフォース}不滅の力の中で無属性以外の属性の中で上位十位の人間の事だ。その上位十名をスキルナンバーと言っているのさ」

スキルナンバー。伴谷が言ったとおり無属性以外の属性上位十名の事をそう呼ばれている。

しかも無属性と同等に戦えるとも言われており、無属性以外で唯一倒せるかも知れない人達だ。

そのスキル？が伴谷だという事だ。

「要するに無属性を除いたら九位という訳か。っていうかお前が^{エタ}不滅の力だっばらしているし」

「そうだな。どの道、ばれる事だから良いだろ」

「そうか。なら始めようか」

「^{オープンゲート}魔術開放!!」

それぞれ鳳凰、虎の紋章が現れた。

そして春秋は姿が変わり、女性に代わっていた。

その周りには『七つの大罪』^{グリモワール}の象徴、七つの結晶が表れた。一方伴谷も明るかった服装が黒く変わっていた。

「ほう。それが例の『七つの大罪』^{グリモワール}か」

「そうよ。これが私の力」

「ならばどういう物か見せてもらっぜ!!」

伴谷は一瞬で姿を消した。

春秋はすぐさま警戒して、周りを見渡した。

刹那、^{サタン}背中から気配を感じ、Iraで攻撃した。

だが、^{サタン}Iraが当たったのは黒い槍だった。

その黒い槍は地面に着くとすぐに消えた。

そしてすぐに別方向から気配を感じた。

「チツ、ちょこまかと!!」

春秋は少し苛立ちながらも飛んでくる黒い槍を弾き返していた。でもそれでは霧がない。伴谷もどこかに消えてしまつてどこに居るのか分からない状況だ。どう見ても春秋が不利だった。

「おいおい、グリモワール『七つの大罪』はそんな物ではないだろ。もっと力を出せよ!!」

伴谷の声が聞こえると、今度は三本違う方向から黒い槍が飛んできた。

春秋はすぐに対応して三本ともをかわした。

それでもなお、黒い槍は春秋に向かつて飛んできていたりしてきた。そんな中、春秋は伴谷のエターナルフォースの不滅の力を考えていた。

——エターナルフォースアイツの不滅の力はなんなの？先ほどから姿は見せないし一体……

だがそんな事を考えていたら春秋に近づいている黒い槍に気づかなかった。

「しまつ、」

春秋は何とか気づいたがベルゼブG u i l aで何とか防いだ。だがベルゼブG u i l aの結晶は砕け散った。

「は、まさか『グリモワール七つの大罪』ってこんなにも弱いのかよ。俺の『シャドー影浸透』がどの位通用すると思つたに……」

伴谷は春秋の前から姿を現した。

これほど弱いとは思わなくて呆れて出てきたのだ。

「さて、そろそろ終わりとする「よ、よくも」あん？」

「よくも、菜乃葉を傷つけたな！！」

刹那、伴谷の足に^{サタン} Ira の結晶が伴谷の右膝を刺さっていた。

一瞬だった。^{サタン} Ira の結晶が見えないほどの速さで伴谷の対応に追えなかった。

「な、なんじゃこりゃ！！」

伴谷はすぐに自分の右膝から血が出ているのに気づいた。

立っていられるだけで奇跡だった。思いつき貫通したのに伴谷は立っていたのだ。

そして睨みつけようと春秋を見たが逆に怯えてしまった。

春秋が完全にキレていたのだ。こんな春秋を見た人間は誰もいないだろう。

「菜乃葉を傷つけた罪、償え」

春秋は着々と伴谷に近づいていた。

こうなった以上春秋を止める術は無かった。目の前の伴谷を完全に殺すつもりだったのだ。

「く、来るな」

伴谷は逃げるために姿を消した。いや、影の中に入ったのだ。
だが、『^{グリモワール}七つの大罪』にはそんなものは通用しなかった。

「ジャッチメント極光の断罪者発射準備」

『了解しました。ジャッチメント極光の断罪者発射準備に取り掛かります』

春秋の背中から七色の翼らしきものが現れた。

そして両手を前に構えた。

『ターゲットロック。出力順調。命中率100%。いつでも行けます』

「ジャッチメント極光の断罪者！！」

刹那、七色の光線が地面にめがけて放出した。

光線は影を貫通し、伴谷が居る影の中に進入した。

「な、」

さすがに影の中には進入して来ないだろうと思った伴谷は光線が影の中に入って来たのに驚いたのだ。

もう逃げ場なんて無い。このまま直撃する事しか。

伴谷は諦めてまともにジャッチメント極光の断罪者を喰らった。

「ごめん、俺の家族よ。守ってやれなくて」

伴谷は最後にそう言って姿を消した。

そして地上では青白い玉が宙に浮いていくのが見えた。

伴谷の消えていく姿だった。四神戦争でた死体は血から全て消えて、生きていた事が無かった事にされるのだ。

だからこの戦争が有名じゃないのだ。存在が無かった事にされるのはとても残酷な話だ。

でもそれは実在する。それがこの四神戦争だ。

第二話（後書き）

意見、感想お待ちしております。

第三話

その頃美咲はやはり今日中に話しておこうと思い、春秋を探していた。

そして春秋を探していて階段を降りていたら光線らしきものが見えた。

——まさかあつちで誰かが戦ってる！？

美咲は春秋を探す事を後にしてすぐにそちらに駆けつける事にした。

光線が見えた辺りはここから約四百メートル先だった。

美咲はすぐに階段を下りて走ってそっちに向かった。

——まさか、春秋が戦っているというわけではないよね。

美咲はとりあえず誰が戦っているのか確認する為に向かっていたのだ。

ひよっとすると仲間が戦っているのかも知れないので急いでいたのである。

そしてもうすぐ着くという所で今度は絶叫が聞こえた。

——今度は何！？

美咲はそう思いながらも目的地に着いた。

そこには一人の女性しかいなかった。

でもその女性は見覚えがあった。

なぜなら一度、春秋の魔術開放をしたときに見たのだから。

「えつと……春秋だよな？」

美咲は疑問に思いながら聞いた。春秋ではないかも知れないかったからだ。

なぜなら、魔術開放オープンゲート以外で春秋が女の姿をしている事は無いのでもしかしたら関係の無い人だと思ったのだ。

美咲の声が聞こえたのかその女性は美咲の方を向いた。

そして、美咲の方に歩いてきて美咲に抱きついてきた。

「え、え、え！？」

美咲は一瞬訳分からなくなり戸惑っていた。

「みさきいゝ戻れなくなっちゃったよおゝ」

よほど何かにショックだったのかその女性は泣いていた。

美咲は『あわわわ』となっていたがすぐに冷静さを取り戻した。

「えつと、春秋で良いんだよね？」

「一度見ているでしょ。私が魔術開放オープンゲート使ったときの姿を」

これで確信した。今自分に抱きついてきたのは春秋だと。

でもそれだと逆に疑問が増えた。魔術開放オープンゲートを解除しているのに何故男に戻らないのかと。

すると、春秋は突然何かを言い始めた。

どうやらここまでの経緯を話し始めたのだ。美咲なら原因が分かるかも知れないかと思っただからだ。

そして一通り話し終わると、美咲は考え始めた。

「要するに、敵を倒して魔術開放オープンゲートを解除したら戻らなかったと」

「うん」

「うん……私でもさっぱり分からないわ。こういうのは本拠地でも行かないと」

「本拠地？」

「あ、そういえばまだ春秋は知らなかったね。朱雀の本拠地の事よ。鎌倉にあるからそんなに掛からないしね」

「そうなの？」

「っていつもより口数少ないわね。本当にどうしたの？」

「だ、だって話す事もないし今の状況を飲み込めないでいるから」

そう。春秋が口数が少なくなっているのは今の状況が飲み込めないでいて、焦っていた。

それに、ひよっとすると元に戻らない可能性もある。そう考えてしまったら焦るだろう。

「とりあえず、私について来て。さっき言った本拠地に向かうから」
「分かった」

春秋はとりあえず元に戻る方法が分かるかも知れないので美咲について行く事にした。

それから電車に乗り横浜駅で乗り換えて、本拠地がある鎌倉駅で降りた。

その後、人が全然来ないような通りを歩いていた。

そしてその通りの中にちょっと広くなっている所がありそこで美咲は立ち止まった。

「ね、ねえ、こんな所に本拠地があるの？」
「いいからちよつと待ってて」

美咲は春秋と離れ、不自然に立っていた鳳凰の像の前に立ち止まった。

そして、鳳凰の像を右に回した。
その刹那、自身みたいな振動が起こり、像の近くにあったコンクリートの地面が動き出した。
そしてその動き出した地面があつた所には階段があり、どこかに繋がっているようだった。

「さて中に入るわよ」

春秋は美咲に従い、美咲と一緒に階段の中に入って行つた。
階段を降りると、そこにはどこかのアジトみたいになっていた。
春秋はこんなものがあるとは思わなかった。

そして通路を歩いて数分後、美咲は一つの扉の前で止まった。
扉のすぐ横にある暗証番号みたいな所に番号を打った。
すると扉は開き、春秋達は中に入った。
中に入るとそこには誰かが居た。

「松藤さん。連れてきましたよ」

松藤と呼ばれた男は大学生ぐらいの年齢でごく普通の私服を着ていて、ごく普通に居るような感じの男だった。
そして美咲と呼ばれたので、体を春秋ではなく美咲の方に向けた。

「分かった。水谷はさがってくれ」

「いえ、私も同行させていただきます。報告もありますし、何より

春秋は私の幼馴染ですから」

「そうか。なら良いだろう。それでは吹矢春秋君、初めまして朱雀のリーダーを務めている松藤清斗まつふじせいとと言います。そしてようこそ、朱雀の本拠地へ」

「は、初めまして!!」

春秋はちよつとぎくしゃくしていた。少し緊張していたのだ。それを見た松藤は『まあ、そんなに緊張しなくて良いから』と春秋を落ち着かせた。

春秋が落ち着くとまず来てすぐに疑問に思っていた事を聞いた。

「ところで、君は確か男だね？」

「ええ、そうですか？」

「なら何故、『七つの大罪』グリモワール使用時のままなんだ？確かに『七つの大罪』グリモワールを使う時に女になるのは知っているのだが、どうして女のまなんだ？」

「あ、それについては私から言います」

松藤の疑問に美咲がすぐに反応した。

そして美咲は春秋が伴谷と戦って、倒した後、元に戻らなかった事を話した。

「なるほど。じゃあ吹矢君、戦った時の経緯を教えてくださいな。か。どういう風に戦ってどうやって勝ったのか？」

「分かりました」

春秋は松藤の質問に答えるように頼まれ、答える事にした。

まず伴谷がスキル？だと言う事を春秋に言った事から始め、戦っている途中でGuliaベルセラフが砕け、それに私がキレて極光ジャッチメントの断罪者を放ったと。

そうて魔術開放を解除したら元に戻らなかったと。

「なるほど。何となく理解した」

「それで何が原因分かりましたか？」

「いや、俺にもさっぱり分からん。不滅の力はまだ不思議な事がたくさんあるものでな。多分『七つの大罪』もその内の一つだろ」

「何も分からないのですか……」

春秋はガツカリしてしまった。ひょっとしたら何か分かるかも知れないと思ったので、結局分からないと知って落ち込んだのだ。落ち込んでいるのを見た松藤と美咲は励まそうとした。

「でもまだ男に戻れないと言うわけでないのだから大丈夫だよ」

「そうだよ。まだ戻るかも知れないのだから。……それに男に戻って貰わないと困るし……」

最後の方が小さくなっていたがそれは春秋には聞こえていなかった。

だが、それでも春秋は二人の言葉を聞いたが、全然意味が無かった。

「良いですよ。どうせ戻れなかったら女と過ごせば良い事だから……」

「「ダメりゃこりゃ……」」

二人は励まそうとしても春秋がネガティブモード全開だった。二人も諦めてとりあえず、もう一つの話しに入ろうとした。

「とりあえず吹矢君。話が進まないから立ち直ってくれろ？」

「はい。分かりました……」

春秋はとりあえず話を聞くことはするようだった。

そして松藤は先ほどとは全然違う顔になった。

二人も松藤が真剣な顔になったので春秋も真面目に聞くことにした。

第三話（後書き）

意見、感想お待ちしております。

第四話（前書き）

すみません。6月のカレンダーを見たら19日と20日が土曜と日曜だったので21日と22日にずらしました。

第四話

「さて、吹矢君は大体の事は全て水本から聞いてるな」

「はい。一応、これがどういふのかはもう分かっています」

「そうか。なら話が早い。まずはこれを見てくれ」

「これは？」

「これは、朱雀が白虎と戦った回数とその勝敗だ」

松藤は数枚の紙を春秋に渡した。

そこには『戦闘記録 白虎』と書かれており、先ほど春秋や奈雪が戦った白虎のメンバーが朱雀のメンバーと戦った時のデータだった。六十七回。それがこの一ヶ月で朱雀と白虎が戦った回数だった。約一日に二回のペースだった。

それを見た春秋は驚いた。この一ヶ月でこんなにも戦っているとは思わなかったのだ。

そしてその戦いの内、四十三回が朱雀の負けた回数だった。

「こ、こんなに負けているなんて……」

「ああ、三分の二くらい俺達が負けている。それによってこっちは戦力不足だ。だから『七つの大罪』^{グリモワール}を持っている吹矢君が入ってくれて助かった」

「そんな買い被りですよ。私はまだ未熟者ですし覚醒したのは最近ですよ」

「それは分かっている。けど欲しかったのだよ『七つの大罪』^{グリモワール}は無属性でも上位一位、二位を争う不滅の力なのだから^{エターナルフォース}」

「そうですか。そういえば他の無属性ってどんな能力って分かっているのですか？」

春秋は唐突に思った事を聞いた。

「そうだな。まず無属性は八つある。」

七つの大罪の悪魔を使う『グリモワール七つの大罪』。

透明なナイフや銃を使う『スケルトンアーム透明武器』。

全ての能力を無効にする『スキルインバイト無効能力化』。

筋肉を調整して回復したり筋力を強化する『マッスルリジャスト筋肉調整』。

不明な物質の微粒子を操作する『コーバスマター微粒子物質』。

相手の体に触れたりもしくは不明な緑と赤の線を出してそれに触れると、触れた人間の皮膚を腐らせ体中から血を噴出す『スキנקロードブレイク皮膚腐食破壊』。

黄道十二宮の天使を使う『トゥウエルフ十二宮の天使』。

そして、まだ一度しか覚醒を見たことが無いと言われ、全ての超能力、獣、魔法、魔術属性を全て使えて無属性最強と言われている『パーフェクトスキル完全能力』がある」

「『完全能力』ってそんなものがあるの？」

「ああ、だがそれを使ったのは第一次四神戦争で一人だけ生き残った人物らしい」

春秋は驚いた。そんな人間が昔に居たのかと。

そんな春秋が驚いているのを気にせず、松藤は話を続けた。

「そしてその内の六つが覚醒している。」

青竜は『スケルトンアーム透明武器』の一つ。

玄武は『スキルインバイト無効能力化』と『コーバスマター微粒子物質』の二つ。

白虎は『マッスルリジャスト筋肉調整』と『スキנקロードブレイク皮膚腐食破壊』の二つが居ることが分かっている」

そして朱雀は吹矢君の『グリモワール七つの大罪』以外を除けば誰も居なかった。

「じゃあ、私が居なかったら朱雀は一人も無属性はいなかったってこと？」

「そういうことだ。だから吹矢君はとても欲しかった。まあ、運良く水本の幼馴染だと言うのが良かったかもしれない」

「でもその言い方だと私が『七つの大罪』^{グリモワール}だと知ってた言い方ですね」

春秋は松藤が自分が覚醒する前から『七つの大罪』^{グリモワール}だと知っていた言い方だったので聞く事にした。

よく見ると美咲もそんな風な顔をしていたので。美咲も知らなかった事だろうと春秋は思った。

「そうだ。確かに俺は覚醒する前から知っていた。『七つの大罪』^{グリモワール}の使用者が起こす心臓発作を水本に聞いたときからね」

「美咲そんな事を教えていたの？」

「ごめん、松藤さんが周りで何か変な人物が居なかったって聞いて春秋がたまに心臓発作を起こす事を知っていたからつい言っちゃったのよ」

「そういうことだ」

春秋はまだどうして知っていたのか納得が出来ていなかったが、まあ良いだろうと思った。

「さて、話がかなりそれたな。白虎に対する作戦なんだが、水本には前線メンバーに入ってもらおう」

「前線メンバーって白虎の本拠地の居場所が分かったのですか？」

「いや、本拠地ではないがここを壊滅させておけば今後、責めてくる事は少なくなるからな」

「どういう事ですか？」

美咲は疑問に思った。白虎が責めてくる事が少なくなると言うのはどういう事なのかと思ったのだ。

松藤は待っていましたという感じで微笑んでいた。

「さつき、朱雀と白虎の戦った回数が六十七回と分かっているよな」
「ええ、確かにそう言いましたけど」
「それに規則性があったんだよ。さつきの紙を見てくれ。何かに気づくから」

そう言うとき春秋は先ほど渡した資料を見た。
美咲は春秋が貰った資料を横から見ていたが全然分からなかった。
春秋は文字では良く分からなかったので地図の位置で考えて見てみるとある規則性に気づいた。

「事件が起こっているのは福島県から新潟県、長野県、愛知県の間にある都県での五回に一度は神奈川県で事件が起こっている」

「そう。多分他の青竜や玄武もそうしているだろう。そして活発的なのが神奈川県って訳だ」

「なるほどね。神奈川県を拠点としてなるべく拠点がばれないように他の都県まで動いていたって訳か」

「文字では分からないが、地図にしてみれば分かると言う事。わざわざ事件が起こった場所を地図で見る事なんて普通はしないって言う所を突いたのだろう」

二人は納得した。これで神奈川県に白虎の拠点地があることが判明したからだ。

その後は朱雀のメンバーが白虎のメンバーと戦うふりをして発信機を付けて居場所を特定した。

ちなみに春秋が戦ったので六十八回目だが、六十六回目にも神奈川県で起きているのに二回も起きたのは多分、『グリモワール七つの大罪』が覚醒したからの試し勝負だろうと松藤は言った。

「さて、先ほど言ったとおり水本には前線メンバーに入ってもらう」
「じゃあ、私は？」

「吹矢は切り札だから後方で待機してもらおう。俺の命で突撃と言うからそれに従ってくれ」

「分かりました。でも学校はどうするのですか？」

「大丈夫だ。決行は6月27日の日曜日だから心配するな。それと、その姿で学校に行くのか？」

「あ、」

春秋は今の自分の姿に気づいた。そう今の春秋の姿は女である。すっかり自分の姿に忘れていたのだ。

このままじゃ学校に行けないと気づいた春秋はどうしようか慌てた。

「一応、学校には行きたいんだよね」

「はい。学校を休んだら追いつけていけなくなりますから」

「分かった。ならこっちで手を打っておこう」

「大丈夫なのですか？」

「ああ、水本の学校の校長は俺の母親の祖父なんだよ。だから四神戦争の事も知っているから事情を言えば転校と言う理由で入れると思うよ」

「ありがとうございます！！」

「じゃあ、サイズを測るからこっちに来て」

「分かった」

美咲はすぐに制服の大きさを合わせるために春秋と一緒に測定がある部屋に移動した。

移動すると、すぐに美咲がまずバストを測ると言ったので服を脱いだ。

服を脱ぐと美咲は不機嫌になった。

「み、美咲？どうしたの？」

春秋は突然美咲の手が止まったので気になって後ろを向いた。
すると突然春秋の胸を触ってきたのだ。

「ひゃ！？」

「どうして、私より胸があるのよ！！」

美咲は自分の胸が全然膨らんでいないので逆恨みとして春秋の胸を揉みはじめたのだ。

春秋も美咲の突然の行動に動けないでいた。

「こっ見るとほんとに女よね……」

「何するのよ！？今すぐ止めて！！」

「嫌だ。こんな胸を見られて止める訳無いでしょ」

「んっ……はあっ」

春秋は美咲に止めるように言うが、そんなことは聞く訳もなく美咲は揉み続けてた。

しかも春秋は胸を揉まれて感じていた。

「って何故か感じてるし。けどもうちょっと揉んでよ」

「もうやめて」

春秋は涙目になりながらもそう言った。

約三十分後、やっと美咲は揉むのを止めて測る事にして終わった時には午後7時になっていた。

第四話（後書き）

真面目にやると言ったはずなのに何故か最後に入れてしまった……
まあ、スキンシップと言う事で置いてください。多分また後に
ふざけて出てくると思いますから。

第五話

2010年6月23日午前8時35分

春秋はいつも通り病院に立ち寄ってから学校に来ていた。

だがいつもと違う所がある。それは、今春秋は女の子だと言う事だ。昨日美咲に制服のサイズを測った後、春秋と松藤で春秋が通っている学校である東原高校に転校手続きを済ませて今日から転校と言う理由で同じ学校に通うのだ。

ちなみに今、春秋は職員室の中に居る。担任の山瀬明美やませあけみと一緒に教室に向かうためだ。

明美先生は春秋や美咲の担任の先生なので教室が変わることは無い。

「はあ、」

「どうしたの夕香さん？転校初日からそんなため息を吐いて」

春秋のため息に明美先生は気になり春秋を見てきた。

何故ため息を吐いたかというのは今の自分の姿が女の子だと思って戻れる方法はあるのかと思ったからだ。

ちなみに夕香と言うのは春秋の女の子の名前である。さすがに本名はおかしいので名前は変えたのだ。って言うことでここからは夕香と呼ぶことにします。

「いえ、大丈夫です。ただ、昨日親が従兄のいる学校に転校するよ
うに言われてまだ落ち着いていないだけなので」

「そうだったの。確かに昨日校長室から出てきたのを確認したけど、
まだ現状が理解できていないと言う感じだったからね。でも数日経
てば慣れますよ」

「そうですか……」

夕香はとっさに思いついた嘘を言ったので嘘だと気づかれるかと心配したが、特に何も無くてホッとしていた。

後、夕香の設定だが名字は吹矢と変わっておらず春秋の従兄となっている。

転校理由は春秋が夕香の父親と海外に行ってしまった、その代わりに夕香が春秋の学校に来たという事になっている。

ちなみに、夕香が昨日校長室から出てきたときに落ち込んでいたのは先ほどため息を吐いていた時と同じ理由である。

「さて、そろそろチャイムが鳴りますから荷物を持って教室に行きますよ」

「はい」

夕香はスクールバック（女の子ばくする為に買った）を持って明美先生と一緒に自分の教室に向かった。

2010年6月23日午前8時45分

チャイムが鳴り、教室の前にたどり着くと明美先生に廊下で待っててと言われたので夕香は待っていた。

そして中からは先生が出席を確認していて、その後に話をしていた。

「突然なんですが春秋君は親の都合により、海外に転校することになりました」

「……」

教室の中はざわめく事はなく無言になった。

そりゃそうだ。春秋は教室に居るときは自分からみんなと拒絶していたのでざわめくなんてあるわけが無かったのだ。一人を除き。

「え、それは本当なんですか!？」

滝沢海斗だ。美咲みたいに事情を知らない海斗が驚くのは当たり前だったのだ。

折角春秋を昔の春秋に戻そうと思わ錯誤していたのに全て水の泡となつたからだ。

そして、昔の春秋に戻らないまま春秋は海外に行ってしまったので悔しかったのだ。

「まあ海斗君、落ち着いてください。まだ先生の話は終わってませんよ」

明美先生は海斗を落ち着かせようとした。

海斗は葉を噛み締めながらも自分の席に座った。

「それで春秋君の代わりとしてなんですが、このクラスに転校生が来ます。しかも女の子です」

『うおおおおおおお!!』

刹那、教室の中は海斗以外の男性の響が夕香の所まで聞こえてきた。

夕香は今までクラスの人たちに興味を持たなかったが、さすがにこれを聞かせれるとこのクラスは大丈夫なのかと思った。

「それじゃあ、入ってきてください」

「失礼します」

夕香は明美先生に呼ばれて教室の中に入ってきた。
入ってくると教師の中は無言となった。

そして夕香は自分の名前を黒板に書き始めた。
書き終わると、夕香はみんなの方を向いた。

「吹矢夕香と言います。従兄の春秋が海外に行ってしまったので代わりに入ってしまったって感じですが、よろしくお願いします」

夕香は笑顔でみんなに言った。

口調や言葉使いまで完全に女の子って感じで、もはや春秋の面影は無かった。

そして教室の中はまたしても無言になってしまった。

「あ、あれ？もしかして私、何か変でしたか？」

夕香は無言になってしまった事に戸惑っていた。

しかし数分後、無言であった教室はいつせいに声が聞こえた。

『か、かわええええええええええ！！』

「え、ええ！？」

今度は女子までもがそう言い美咲と海斗以外のみんなが一斉に夕香に向かって駆け寄ってきた。

用紙は元々可愛いのにさらに先ほど、戸惑っていた時にさげなく上目使いをしたのでなおさら可愛く見えてしまったのだ。

「ねえねえ、マジで可愛いんだけど！！」

「春秋の従兄ってほんとなの！？」

「付き合ってください！！」

「結婚してくれ!!」
「あわわわわ、」

夕香は質問攻めになるとは思っていなかったので慌てていた。
そんな慌てたのを見かねたのかずっと座っていた海斗が立ち上がった手を叩いた。

「はいはい、転校生が戸惑っているだろうが。少しは落ち着こうぜ」
「海斗君の言うとおりですよ。とりあえずみんな席に座りましょうね」

海斗と明美先生のおかげで何とかみんなは自分の席に戻った。

「ありがとう海斗君」
「いや、俺はただ見てられなかったただだよ。ってあれ？俺名前言っただけ？」
「え、えっとね、学校に来る前に名前を少し覚えてたから」
「でもそう言うのって顔写真とか載っていないだろ」

夕香は自分の失態に気づいて何とか誤魔化そうとしたが、逆に自分を追い込んでしまった。
だからそこで美咲が立ち上がった海斗のワイシャツの襟首を掴んで引っ張った。

「な、何するんだよ!!」
「別にそこまで聞かなくても良いでしょ。詮索すると逆に嫌われるわよ。それに周りを見てみなさい」
「……げ、」

美咲に言われて海斗は周りを見ると、そこには男女問わず自分に

向かって殺気が感じられた。

さすがに不味いと思った海斗は席に座ることにした。

「と、とりあえず夕香さんの席は春秋君が使ってた席に座ってくれ
る？ 後、教科書が来るまで春秋君の教科書を使って良いから」
「分かりました」

明美先生にそう言われると、夕香は自分が男だった時に使ってた
席に座った。

「じゃあ、これでホームルームは終わるけど、夕香さんを質問攻め
にしないように。それじゃあ終わります」

明美先生はそう言っただけで教室から出て行った。

そして、美咲と海斗以外のクラスのみんなは明美先生の言うことを
聞かず、すぐに夕香の周りに集まった。

「それで、どこから来たの？」

「好きな人とか居るの？」

「付き合ってください！！」

「結婚してくれ！！」

またしても、夕香は質問攻めに合っていた。最後の二つは先ほど
と同じ事を言っているが。

「だ〜から、お前らは転校生の事を考えろって言ってるんだよ！
！」

「お前だけには言われたくない！！さっき良いキャラをして高感度
を上げようとした奴に！！」

「な、俺は高感度を上げる為にやったわけじゃねえーよ！！」

「は、どうだか」

「なんだと!!」

海斗と先ほどから海斗に話していた日向直哉ひなたなおやは睨み合い始め、お互いに殴りかかりそうになっていた。
そして直哉が海斗に向かって殴った。

「な、何するんだよ!!」

海斗はすぐにやり返そうとしたが直哉を殴ることは無かった。

「やめて下さい!!私の為に争わないでください!!」

なぜなら夕香が二人の間に入って止めに入っただからだ。

二人は握った拳を下ろして、夕香は海斗の方に向かった。

「大丈夫ですか？」

「ああ、大丈夫だ。だから心配するな」

海斗はそう言うのと夕香の頭を撫でた。

夕香は海斗に頭を撫でられて心地よかった。

そしてチャイムが鳴り、海斗は夕香の頭から手を離れた。

「あ、」

夕香は海斗の手が離れると名残惜しくなっていた。

そして先生が来たので夕香はとりあえず席に着く事にした。
だが、夕香の胸は少し苦しかった。

第五話（後書き）

意見、感想お待ちしております。

第六話

2010年6月23日午後12時50分

午前中の授業が終わり、昼食と昼休みの時間になった。

東原高校では午前中は四時間授業で昼食は午後1時近くになるのだ。授業が終わって男の時と同じように一人で食べようとした夕香だったが、それは通じなかった。

「ねえねえ夕香さん、一緒に昼食を食べない？」

「えっと……」

クラスの女子達が夕香と一緒に昼食を食べないかと言ってきたのだ。

最初はすぐに断ろうと思ったのだが、どう断れば良いのか分からなくなっていたのだ。

そんな戸惑っていた夕香を見かねたのか美咲が夕香に近づいた。

「ごめん。さっき先生にクラス委員長だから夕香さんに学校を案内してと言われたから少し借りるね」

「でもそれって今でなくても良いんじゃないの？」

「そうなんだけど、今日の放課後だと私が用事があって放課後は無理なのよ。だから頼む」

「それなら仕方ないね。分かったよ」

「ありがと。じゃあ夕香さんを借りるね」

美咲は夕香の右手を掴みながら教室を出て、人気の無い所に連れて行った。

夕香はあの状況を助けてくれたので美咲に感謝していた。

「ありがとう。おかげで助かったよ」

「別に。朝から見ていて気になってたけどさすがに絶えられなかったから助けただけよ」

「それでも良いよ。それで、私を人気の無い所に連れてきたって事は何の話なの？」

「気づいていたのね……」

「まあ、大体こんな所に連れて来るって事は何かあるのでしょう」

ツンデレに少し気になった夕香だったが、それより美咲から何か重要な話をすぐ気がしたのでそちらの話を聞くことにしたのだ。そして美咲は気づかれていたのに少し驚いていたが本題に入ることにした。

「今日の早朝に連絡があったのだけど、昨日の深夜に朱雀の一人が白虎に倒されたらしいのよ」

「それってこの世界に居なくなっただって事？」

「そうよ」

「でもそれって重要な話なの？前にもそんな事は起きていたんじゃないの？」

確かに夕香の言うとおりだった。普通ならこんな問題は些細な事でしかないはずだ。

それなのに美咲は些細な事であるはずなのに夕香を呼ぶような問題ほど大げさだったのだ。

そしてすぐに美咲はここに呼んだ理由を言う事にした。

「確かに夕香の言う通りかも知れない。けどその戦った場所で場所でおかしい所があったのよ？」

「どういう事？」

「空き地だったのだけど、そこに生えていた一部の雑草が腐つていたのよ」

「雑草が腐ってたつてもしかして」

夕香は昨日そんな不滅の力を聞いた事を思いだした。

「そう。白虎には『皮膚腐食破壊』を持って人間が居る。もし

かしたら白虎も本格的に動き出したのかも知れない」

「でも『皮膚腐食破壊』は人間しか通用しないのじゃないの？」

「そんな根拠はどこにも無いわ。『皮膚腐食破壊』は途中からその名前で言われるようになったらしいから。本来の力を知っているのはそれを持っている本人だけよ」

そう。無属性でも『皮膚腐食破壊』だけは全然判明されていない
エターナルパワー
不滅の力である。

昔は名前を聞いたらすぐにどんなものか分かるような物だったらしいが、その名前はもう誰も覚えていない人は居ない。

しかも『皮膚腐食破壊』と言う名前は誰かが勝手につけた名前が広まっただけであるのだ。

ある意味、無属性の中で一番危険視しなければならぬものである。

「要するに、『皮膚腐食破壊』はどういう不滅の力なのか不明で、それを持っている人が動き出したから要注意しておいてと」

「そういう事。まあ、夕香なら大丈夫だと思うけど」

「それは買いかぶりすぎだよ。まだ『七つの大罪』を使いこなしてないのだから今の話は結構重要だよ。」

「そうだったの！？てつきり使いこなしているかと思ったのに……」

意外そうな顔をしながらもそう言った。

確かに二回戦っている内一度は夕香が戦っている所を見ている美咲だが、それを見て対応の早さが早かったものだから、もう慣れているだろうと思っていたのだ。

「そうだよ。もう二回戦っているけど、一階目の時は確かにそう見えたかも知れないけど、二回目なんか頭に血が上ってそれで倒しただけだし」

「そう。とりあえず話す事は終わったから」

「じゃあ私は戻るね」

「ちよつと待つて。戻る前に一つ聞きたかったことがあるの」

夕香が教室に戻ろうとした所で美咲が夕香を止めた。
まだ話があるのと思った夕香は体を美咲の方に戻した。

「今日の午前中を見ていたけど、何か男の時と結構変わってない？何か周りによく接しているような」

「ああ、そのことね。」

何かと思つたらそんな話ですかと思つた。

でもそれは自分でも思つてた事だ。こんな事をしていけないのは自分でも分かっているはず。でも、

「私も何故だか分からないのよ。こんな事をして絶対にいけないはずなのに、明るくなってしまう。自分が分からない」

そう。自分が分からなくなっているのだ。女の子になってから自分がどんな人間だったのか分からないのだ。

「私は、友達を作っても良いかも知れないのかな？」

夕香がそんな事を言い出した刹那、異変が起こった。

「ぐっ、」

「夕香！！」

夕香が心臓を押さえながら苦しみだし、地面に倒れたのだ。

美咲が夕香が倒れたのを見て叫ぶと、少し遠くに居た先生がすぐに駆けつけてきた。

「おい、大丈夫か！！」

その先生は夕香が心臓を押さえているところを見てすぐに心臓発作だと分かり、とりあえず夕香を持ち上げて保健室に連れて行こうとした。

分かっていると思うが、何故こんな事が起こったのかは『七つの大罪』^{グリモワール}の代償が発動したのだ。

どんな事があるかと『七つの大罪』^{グリモワール}は罪から逃れる事は許さない。こんな精神不安定な状態でも。

——菜乃葉、やはりダメなんだね。私は許されない事をしたのだから当たり前だよな。

夕香は思い知らされた。自分は絶対に罪を逃れてはいけなないと。

——分かったよ。これからは罪を償うまで絶対に逃れない。大丈夫だから。

前にもそんな事で決意したが、今回は決意の量が違った。もう絶対に罪から逃げない。それが夕香の使命だからだと。それ以外は全

て切り捨てると。
そう決意すると、心臓発作は治まった。

「先生、もう大丈夫です。もう治まりましたから」

心臓発作が治まった事を先生に伝えたが先生はすぐに言い返した。

「大丈夫なわけが無いだろ！！心臓発作だぞ。お前は死に掛けたのは分かっているのか！！」

「分かっています。でも心臓発作は治まりましたし大丈夫ですから」

「そうだとしてもまた起こるかも知れない。分かったら保健室行くぞ！！」

「え、だからちょっと待って……」

夕香は大丈夫だと再度言おうと思ったが、多分それでも保健室に連れて行かれると思い、諦めた。

でも先生の対応は普通なら当然の事をしている。だから夕香が大丈夫だと言っても保健室に連れて行かれるは当たり前だった。

そんな先生の対応を大げさのように見えてしまった美咲はその場に止まってしまっていた。

夕香は美咲に助けを求めたが「あはははは……」と苦笑いをして返すしかなかった。

そして、夕香は先生に連れて行かれて保健室に連れて行かれ、さらには早退までして病院にまで送られた。

第六話（後書き）

意見、感想お待ちしております。

第七話（前書き）

二話続けて投下

第七話

2010年6月23日午前6時00分

時間を朝まで遡り五彩家では、朝から凄い事が行なわれた。

「お義兄ちゃん、早く起きなさい!!」

亮の部屋で奈雪が亮を起こしていたのだ。

ちなみにこれはいつもの事であり、奈雪が亮を起こすのは奈雪の日課であるのだ。

「うーん……あと少し」

「またこれ？起きないと遅刻しちゃうよ」

たまに、亮がなかなか起きない事があり奈雪に迷惑をかけてしまふときもある。

だが、今日はそれだけでは済まなかった。

「うるさいな」

それは、奈雪に背中に向けてた亮が寝返りを打ち、奈雪の方をに顔を向けたときだった。

寝返りを打ったときに亮の左手が何か微妙に柔らかい物に触ったのだ。

亮はすぐに違和感を感じ、目が覚めた。

まだ少し寝ぼけていそうな顔をしていたが、それでも何を触っているのかと思って手を見ると、触っていたものは奈雪の小さな胸だった。

た。

一瞬で目が覚め、すぐに手を離した。
だがすでに遅く、奈雪からは黒いオーラが出ていた。

「な、奈雪、ちょっと待て。これは不可抗力で……」

「ふん……。じゃあ、感触はどうだった？」

「結構小さかつこはっ!？」

「一回死んどけ!!」

奈雪は亮にアッパーをかけてふっ飛ばした。
吹っ飛ばされた亮は壁にぶつかり、すぐに立ち上がった。

「朝から何するんだよ!!」

「それはお義兄ちゃんがいけないんですよ!!」

「不可抗力で胸を触っただけだろ!! それ以外に何か言ったか!!」
「胸が小さいって言った!!」

「それが何だって言うんだよ!! 別に胸が小さくても良いだろ」

「全然良くない!! 相変わらずお義兄ちゃんは女心を分かってないよ!! お義兄ちゃんなんか知らないから!!」

そう言っただけ奈雪は思いつきり力を入れてドアを閉めて部屋から出て行った。

「まったく、朝から何なんだよ……」

まったく持って意味が分かっていない亮は呆然としていた。

2010年6月23日午前8時40分

「一体なんで奈雪を怒らせたんだ？」

S H Rが始まる十分前、亮は何故奈雪を怒らせていたのか考えていた。

あの後、朝食を食ったのだがお互いに何も喋らず、いつもは学校も一緒に行くのに今日はバラバラに行ったりするなど未だに仲違いしているのだ。

そんな事を考えていると、教室に亮のよく知っている人物が入ってきた。

「よ、つてあれ？元気が無いな？」

「何だ豊か」
Gina

亮に声を掛けてきた人物、おかざきのほる岡崎豊は亮の幼馴染であり親友であり腐れ縁の仲である。

豊は亮が元気が無いのを見て奈雪と何かあったと察した。

「もしかして奈雪ちゃんと何かあったのか？」

「そうだよ。つてかその左手はどうしたんだ？」

亮は左手の甲に切り傷を見て少し驚いていた。

「ああ、これは昨日カッターを使ってたら間違えて切っちゃったんだよ」

「そうなんだ……」

一瞬、豊が不滅の力だエターナルパワーと思ったのだが、そんなわけが無いと思い切り捨てた。

なぜなら、こんな身近に居たらとつくに攻撃しているだろうと思っ

ただ。

だから豊の左手は本当に間違えて切っちゃったのだろうつと思ったのだ。

「それで、奈雪ちゃんと何があつたんだ？」

豊は話を戻して、亮と奈雪との間に何があつたの聞いた。豊に嘘が通用しない事は知っているので亮は正直に話した。全てを話し終えると豊はため息を吐いた。

「それはお前がいけないな。お前って相変わらず女心を分かってねえーよ」

「それ、奈雪にも言われたよ。俺の何がいけないんだ？」
「一発殴らせろ。この鈍感」

そう言つて豊は亮を殴つた。
亮は突然殴られたのに怒つた。

「な、何するんだよ！！」

「お前の鈍感にムカついたんだよ！！」

「鈍感って毎回聞くけど意味分かんねえーよ！！」
「それは自分に聞いてみる」

そう言い捨てると豊は自分の机に戻つていった。

「何なんだよ、一体」

亮は意味を考えようとしたら、チャイムが鳴ってしまったので考えるのをやめてしまった。

2010年6月23日午後3時25分

全ての授業が終わって帰りのSHRが始まるうとしていた時、亮は考え事をしていた。

——まったく分からない。俺が何に鈍感なんだよ……

そう。未だに豊に言われてた事を気にしていたのだ。もしかしたらそれで奈雪と仲直りできるかも知れないと思ったかだ。でも、考えていても何も思いつかなかったのだ。

——昼の時に豊にヒントを聞こうと思ったけど、豊は三時間目が終わったあとに早退するし。

「ねえねえ、亮君」

——でもアイツが早退するなんて珍しいよな。用事って言ってたけど何なんだろう？

「亮君ってば」

——まあ、家に帰ったから考えるか。

「亮君！聞いているの！！」

「うお！？」

亮は昼休みになったら豊にヒントを聞こうと思っていたのだが肝心の豊が早退してしまったのだ。とりあえず帰りながら考えようと思い、家に帰ることにした時に誰かが呼んでいることに気づいた。

「もう、何回呼べば気が済むのよ」

「ごめん、ちょっと考え事していた。それで、何の用なんだはとり羽鳥。」

「お前が俺に話してくるなんて」

亮を呼んでいた人物、羽鳥成海^{はとりなるみ}は豊と同じで亮の幼馴染である。幼馴染だが中学三年生から余り亮とは話さない事が多いのだが、たまにこうやって話してくるぐらいの関係だ。

「何の用って特に無いよ。だって亮君と話す事なんて余りないし。ただ、豊が早退したから一緒に帰る人が居なかっただけ」

「ああそうか。お前ら付き合ってるんだっとな」

実はと言うと、豊と成海の二人は付き合っているのだ。中学二年生の時、豊が成海を呼び出して告白したのだ。その時亮も豊の告白を応援していたので一部始終知っていたり。それから四年も経っているので結構続いているのだ

「そうだよ。亮君がそう仕向けたくせに」

「そうだったな。じゃあ、一緒に帰るか？」

「良いよ。奈雪ちゃんが迷惑だと思っし」

「いや、今日は奈雪は多分来ないと思うから大丈夫だよ」

「喧嘩でもしたの？」

「まあな。じゃあ行くか」

荷物を持って二人は一緒に帰る事にした。校門に着くと、やはり奈雪は居なく結局二人で帰った。

第七話（後書き）

今回出た二人の紹介はまだ他のキャラが出てくるので第一章のきりが良いところでやります。

第八話

2010年6月23日午後1時20分

夕香と亮がそれぞれ学校に居る頃、横浜市内で二人の青年と少女が逃げていた。

青年の方は二十代ぐらいの男で名前は前原真太まえはらしんたと言って左腕が無かった。

少女の方は中学三年生で村雨静香で袖の部分が破けていた。むらぬめしずか

二人は不滅エターナルパワーの力を持っていて二人とも朱雀所属だ。

何故二人が逃げているかと言うと後ろから追ってくる人が居たからだ。

もちろん、追ってきている人も不滅エターナルパワーの力を持っており、しかも無属性であった。

ここ最近、本格的に動き出した白虎の『皮膚腐食破壊』スキンクロードブレイクであった。

二人は偶然にも『皮膚腐食破壊』スキンクロードブレイクを持っていて男に会ってしまったのだ。

真太の左腕が無くなっているのと静香の服が破けているのは『皮膚腐食破壊』スキンクロードブレイクのせいである。

二人は逃げ続け、なるべく人気の多い所を通りながら逃げていた。

「はあはあ、一体アイツは何者なんだ。しかもこんな時間に襲ってくるなんて」

「す、すみません。私の不注意で左腕を……」

「今はそんなことより逃げ切る事が先だ。このまま近くの駅に向かって電車に乗って逃げ切るぞ」

二人は近くの駅に向かい、『皮膚腐食破壊』スキンクロードブレイクを持っている男から

逃げる事にした。

だが、人気が多いのに向こうは威嚇攻撃をしてきた。

二人はとっさに避け、なおも逃げ続けた。

しかし、先ほどの攻撃で関係者以外も気づき、みんながあわてて逃げ出した。

それにより、二人は離れ離れになってしまった。

完全に向こうの作戦だった。彼は二人を離れ離れにする為にわざとしたのだ。

真太と静香はお互いに離れ離れになってしまったがとりあえず近くの駅に向かうことにした。

「くそ！最悪だ。完全に向こうの作戦のように動かされている！！
アイツはどっちを狙うんだ？」

真太は舌打ちを打ちながらも逃げ続けた。

しかし、先ほどの攻撃で人が全然居なくなり、自分の居場所が分かるようになってしまった。

さらに最悪な事に『スキンクロードブレイク皮膚腐食破壊』を持っている男は真太の方に来ていた。

「くっ、ここまでか」

真太はもう逃げ切れない事を察し、後ろを向いた。

逃げても逃げ切れないなら戦うしかないと思っただ。

向こうも真太が逃げない事が分かると足を止めた。

「やっと戦う気になったか」

「もう逃げ切れない事は知ったからな。それとその制服は藤村高校の制服か」

「おや？良く知っているな」

「まあな。俺はその卒業生だからな」

「そうかい。そんなのどうでも良いのだけど」

「そつだな。ならそろそろ始めようぜ」

真太は魔術開放オープンゲートといい、自分の不滅の力を発動させた。
エターナルパワー
プロバゲイション

真太の不滅の力は『繁殖植物』植物を増殖させて攻撃する能力属性だ。

植物を使って薔薇を作って薔薇の枝で攻撃したり自分の姿を隠したりなど、普段なら応用力があるはずなのだが相性が悪かった。

『皮膚腐食破壊』は隠れようが攻撃してきても、全てを腐らせてしまふ。先ほど攻撃して分かった事だ。

だから先ほどまで逃げるしかなかった。けどもうそれも通用しなくなった。

——多分俺は負けるな。だったらせめてスキルツィ？である静香を逃がさなくては！！

そう。真太はこの勝負が負けるのは分かっていた。だから今後、絶対に必要となる静香を逃がす為の時間稼ぎをするしかなかったのだ。

だがそれは敵が静香の方に行っていたら大変だった。しかし運が良くこちらに来てくれた。それだけは助かっていた。

そして、先に動き出したのは真太だった。

エンドレスローズ
「永遠の薔薇！！」

真太がそう叫ぶと上空から無数の薔薇の枝が敵に向かって降ってきた。

普通ならこんなものを避けられるはずが無かった。

しかし、敵の男は避けもせず動かないでただそこに立っていた。

そして、男は小さく何かを呟いた。

「ニアークロード
……付近腐食」

呟いた瞬間、男に向かっていた無数の薔薇の枝は当たる直前で全て腐り、地面に落ちた。

やはりこんな事では通用しないかと思った真太は次の攻撃に移った。

「グランフロント
地面植物!!」

刹那、男の地面からつたが現れ、男をつたで縛った。

しかし男はまたしても付近腐食と呟いてつたを腐らせた。

「言っておくが、俺に物質を使った攻撃は聞かない。不意打ちをしない限りな」

「……」

「おや?もしかして怖じ氣ついたのか?ならさっさと死ね」

そういつて男は真太に近づき、止めを刺そうとした。

だが、これは真太の作戦だった。相手に余裕を持たせ不意打ちを狙っていたのだ。

そう。男の後ろには先が尖ったつたがうねうねしていたのだ。

そしてそのつたが男を攻撃しようとした。

しかし、そのつたは直前で腐った。

「なっ!?!」

「それで不意打ちをしたつもりか?そんな攻撃などするに分かるんだよ!!」

「くっ、」

最後の賭けに失敗し、とつさに逃げ出してしまった。

逃げられないのなんてそんなの承知だった。それでも、静香を逃がす為に一秒でも長く生き残るのだと思ったのだ。

もう自分の決意が叶わないのは分かっている。だからその分仲間が頑張ってくれば良いと思った。

そして路地裏に逃げ込んだがその先は行き止まりだった。

逃げる事も出来なくなつた真太は後ろを向いた。

路地裏の入り口にはあの男が立っていた。

「おや？もう鬼ごっこは終わりか」

「ああ、どの道俺はお前に勝てないからな」

「やっぱり自覚はあつたんだな。なら、」

「その前に名前ぐらい教えてくれ。どの道死ぬ人間に教えても良いだろ」

「別に良いが何でだ？」

「お前も自分の決意がある。どんな決意だが知らないが、自分と同じで決意の為に戦っている名前ぐらい知りたいんだ」

真太は自分が死ぬ前に戦った人間の名前が知りたかつたのだ。

彼は戦った人間の名前は覚えておきたかつたのだ。それは真太の性格だった。

彼は四神戦争で戦った人間の名前を全て覚えている。戦った人間の決意も大切にしているからだ。

そう。彼は善人で本当は人なんか殺したくないのだ。

そして彼の決意は過ちを犯した人間を善人に戻す。または殺されそうになっていた人間や自殺しようとした人間などを助けることだ。

だからこそ彼は自分の命より静香の命を優先させたのだ。

そして今、その役目が終わりもう良いだろうと思ったのだ。

「そうか。お前みたいな奴を初めてみた。俺の友達に教えてやりた

「いぐらいだ」

「そう言ってくれると嬉しいよ」

「俺の名前は岡崎豊。お前は？」

「前原真太だ」

「そうか。お前とは別の形で会いたかったぜ」

そう言っ豊は真太に近づき、真太の手を触れた。

刹那、真太の体は腐り始め、真太は死んだ。

そして真太の死体は消滅し、青白い玉が宙に浮いた。

「本当はもう一人の女の子の方も狙うつもりだったが、こいつに免じて今回は引き上げるか」

豊は路地裏から出て、そのまま家に帰ることにした。

第八話（後書き）

書き終わって思ったけど、今回出た前原真太と言うキャラはすつごく勿体無いようなキャラだった気がする……

第九話

2010年6月24日午前6時00分

「うーん……あれ？ここは？」

夕香は起きるといつもと違う天井を見てここはどこかと思った。

「あ、そっか。昨日、先生が大げさに言っただけで病院で入院しているんだっただけ」

夕香は昨日の事を思い出し、自分が心臓発作を起こしたせいで入院していることを思い出した。

その後起き上がり、自分の体が元に戻っているか確認した。けど、未だに女の子のままだった。

夕香はため息を吐き、いつまで自分は女の子なのかと思った。

——そういえば昨日、美咲が病院に来て、『スキנקロードブレイク皮膚腐食破壊』の正体が分かったって言ってたな。

夕香は昨日の事を思い出して再度考えていた。

昨日、美咲が突然やって来て何かと思っただけならその話だったのだ。

そして夕香は昨日の事を振り返った。

2010年6月23日午後6時00分

「はあ、何でこうなっちゃったんだろう……」

夕香は病室の中でため息を吐いていた。

転校初日という事であるのに心臓発作で入院してしまうなんて思ってもいなかったのだろう。

一応診断されたが、特に以上は無いのは当たり前だったので明後日には退院できると言われている。

ちなみに病室は個室で夕香が独り言を言っても平気である。

「まあ、病院は菜乃葉と一緒にの病院だから良いけど……」

夕香はそう呟いた刹那、ノックもせずに病室の扉が開いた。
そこから現れたのは美咲だった。

「なんだ。美咲か」

「何よその言い方は？」

誰かと思ったら美咲だったので少し安心していた。

一瞬、何者かが私を突き止めて攻めて来たのかと思ったのだ。

「それで、何のよう？」

「お見舞いと新たな情報を伝えにきたの」

「新たな情報？」

新たな情報つと聞いて四神戦争の事の情報だとすぐに分かった夕香だったが、何の情報なのかは分からなかった。

美咲は何の事が分かっていない事にため息が吐いていた。

「今日、学校で話した『スキנקロードブレイク皮膚腐食破壊』の正体が分かったのよ」

「……ああ、そのことか」

「今、完全に忘れてたでしょ」

「うん。忘れてた」

「素直に言っな!!」

美咲は忘れてた事を素直に言った夕香に呆れ、夕香の頭を殴った。夕香は涙目になりながら『いたいよあ』とか言っていた。涙目になった夕香を見て一瞬可愛いと思った美咲だが今はそれを抑えた。

「それで、誰だったの？」

「この人よ」

美咲は持つて来ていた一枚の紙を荷物の中から出して夕香に見せた。

そこには同じ高校生で藤村高校の制服を着ていた岡崎豊の写真が写っていた。

「岡崎豊。そこに書いてあるように藤村高校に通っていて私達より一つ年上の高校二年生よ」

「どうやってこの人が『スキンクロードブレイク皮膚腐食破壊』だと分かったの？」

「今日の午後一時頃、朱雀の人間がその岡崎豊に襲われたのよ。二人居ただけど一人は何か逃げたのだけでもう一人の方が倒されたの。そして倒された人の方に盗聴器を付けてたの」

「仲間なのに盗聴器？どうして？」

不思議に思った。同じ朱雀の人間に何故盗聴器を付けたのか。

「彼は正義感が強いよ。善人過ぎて彼が倒した人間と負けた人間の名前を絶対に聞くの。だからそれを利用して盗聴器を付けてたの。彼には知らせずにね」

「でもそれってその人を騙しているんじゃないの？」

「そうよ。私達の集まりは結束力はあるけど、要らなくなったらすぐに見捨てられるような組織なの。大体の人が神が勝手に決めた組織に勝手に入れられてそこに同じ組織のメンバーと一緒に居るだけだから、自分達の組織が有利になるのならたとえ仲間を犠牲にしても成し遂げるわけよ」

「そんなの酷いじゃない！！組織の為ならば犠牲がでも良いという訳！？」

「……そうよ。それがこの四神戦争なんだから」

それを聞いた夕香は齒をかみ締めた。

酷いと思った。自分の組織の為なら犠牲にしてもかまわないという事に。

何とかしたいとは思っていた。けど夕香は最近覚醒したばかりだ。

どうすれば良いのかなんて分からなかった。

そして疑問に思った。何故美咲はそんな事を知っていて何もしないで平然なのかと。

それに気づいた美咲は夕香が言う前に答えた。

「今、私がそんな事をされているのに平然としているのかと思ったでしょ。私だって何もしない訳が無いわ」

「ならどうして平然としているのよ！！」

「私も最初はそう思ったわ。けどそんな事をしていたら私は生き残れない。自分の決意以外の事を考えていたら死ぬわよ。私だってもう二度死に掛けたのだから」

夕香は度肝を抜かれた。その内一度は私を守るための時だろう。でもそれは美咲の決意である為に死んだという事になるから悔いは無いはずである。

けどそれよりも前に美咲は死にかけていた。それは夕香以外の誰か

を守ろうとした時ではないかと夕香は思った。

美咲の決意は夕香を守ること。それは一昨日の学校の昼休みの時に美咲から聞いたことだ。

だからもし美咲が夕香と関係ないところで死んでしまったら無駄死にに近いという事だ。

そう。四神戦争は四つの組織が争っているだけの戦いだと思ってしまうがそれは違う。それよりも前に自分の決意の為に生き残る戦いなのだ。

美咲はそれで一度後悔している。だから、自分が生き残る為なら仲間も見捨てる事にしたのだ。

そうしなければ自分が死んでしまう。正義感が強かった前原真太のように。

まあ、彼の場合は後悔はしてないだろうが。

そして夕香はそう思っただけで気づいた。自分だって二年間そうしてきたという事に。自分も美咲の言うとおりだと。

「……そうよね。美咲の言うとおりかも知れない。私だって自分の決意の為なら自分を優先するから」

「それでこそ春秋よ。今までだってそう生きてきたのでしょ」

「そうだったね。こんな事で怒ってごめん。だからさっきまでの私は気にしないで」

「全然気にしてないよ。それじゃ私は帰るね」

美咲はそう言って帰って行った。

夕香は美咲からそう聞かれて再度自分の決意を固めるのだった。

2010年6月24日午前6時15分

「さて、何してよっかな」

夕香はあれから十五分も考えていたがさすがにそれで時間を潰したくなかったので考えるのを止めた。

っていつても何もすることが無かった。あるとしたら菜乃葉の病室に居ることぐらいだった。

「とりあえず今日は菜乃葉の病室にずっと居ることにしようか。何もする事もないから」

結局、菜乃葉の病室に行く事しか思いつかず朝食を食べたら菜乃葉の病室に行く事にした。

普通なら面談時間しか入れないが夕香も入院患者なので今日は一日中菜乃葉の事を見れるのだ。

そして四十五分後、朝食の時間になって食べ終わるとすぐに菜乃葉の病室に向かった。

第九話（後書き）

意見、感想お待ちしております。

第十話

2010年6月24日午前8時35分

「はあ、」

藤村高校のとある教室で亮がため息を吐いていて机の上でうつ伏せになっていた。

なぜなら未だに奈雪と仲直りをしてないのだ。

昨日家に帰って奈雪に謝ろうとしたが何故か言えなかったのだ。それで今も奈雪で亮は悩んでいたのだ。

「まだ仲直りしてないのか？」

ため息を吐いているといつの間にか豊が教室に居た。

亮は顔を一度豊の方に向けてすぐにうつ伏せの状態に戻った。

「そつだよ。昨日謝ろうと思ったのだけど、どう切り出せばいいのか分からなかったから」

「そうか。それより今日の放課後、教室に残ってくれるか？ちょっと大事な話があるから」

「良いけど何の話だ？」

「それは放課後に話すよ。それじゃ、俺は自分の席に戻るから」

豊はそう言うつと自分の席に戻って行った。

一体何の話だろうと思っていた亮は放課後に分かるからいつかという事で余り考えなかった。

だが、もうこの時から亮の悲劇は始まっていた。

2010年6月24日午後3時50分

今日の授業も全て終わりSHRも終わってみんなが帰って行った。そして教室には亮と豊の二人になっていた。

「それで話って何なんだ」

「その前に先に一つ言っておきたい」

「な、なんだ」

豊の目はいつもと違って真剣な目だった。

亮はいつもと違う豊に少し気になったが真面目な話だろうと思うので真剣に聞くことにした。

「もしかしたらお前に成海の事を頼むかも知れないからだ」

「は、どういう事だよ」

「こう言えば分かるよな『ライトナイト光の剣士』」

「っ!？」

亮は驚いた顔をした。当たり前だった。幼馴染で腐れ縁であった豊が自分の不滅の力エターナルパワーの名前を知っていたのだからだ。

そう。豊が次のターゲットにしたのは幼馴染で腐れ縁である亮だったのだ。

完全に油断していた。昨日、豊の左手の甲にあった傷の原因をもつと疑っていて、早退した理由を聞いておけばこんな事にはならなかった筈だった。

幼馴染だからといって信用しすぎたのだ。だからこんな状況を作ってしまったのだ。

そして、今まで騙っていた豊を睨んでいた。

「あんま睨んだ顔でこっちを見るなよ。まるで俺が騙していたみたいじゃないか」

「その通りじゃねえか。俺が『光の剣士』ライトナイトだと知ってたのだからそうだろう」

「確かにそうなるかもな。ま、騙していたのは事実だけど」

あつさりと認めた豊を見て、亮は少し戸惑った。

そんな事は気にせず豊は話を続けた。

「それに、この状況を俺は待っていたんだよ。お前が奈雪ちゃんと離れるのをな」

「な、」

そう。今は亮にとって完全な不利だった。普段なら奈雪は学校に居るのですぐに助けに来れるはずだが、今は喧嘩中であるためすぐに来れない。

それにもしかしたら亮が戦っているのに気づかないかも知れず、助けに来ないかも知れなかったのだ。

何もかもが亮に不利を与えていた。しかも豊の作戦だったりしていた。

亮の近くにはいつも奈雪が居る。同じ無属性の奈雪と亮の二人を一緒に戦えば、どう見たって豊の不利になる。

授業中だとさすがに生徒がたくさん居るので戦いは出来るわけが無いし、放課後になると亮は正門で奈雪と会って一緒に帰ってしまう。だからこういうチャンスを待っていたのだ。

豊は昨日亮と奈雪が喧嘩をしているのを知って、一日様子を見て嘘ではないと発覚してすぐに行動に出たのだ。

「さて、そろそろ話は止めてさっさと始めようぜ」

「言われなくても、そのつもりさ」

「オープンゲート
魔術開放！！」

亮と豊はそれぞれ地面に竜と虎の紋章が現れた。

亮は光の剣を持ち、豊は服装が荒野の中にある町で着ているような服装に変わっていた。

「じゃあ、こちらから行かせて貰うぜ！！スピードオフライト
光の速度！！」

亮は光の速さで豊の後ろに周った。

そして後ろから豊を斬り付けようとした。

「クロードカバー
……腐食防壁」

だが光の剣は豊に当たる事はなく、なんだか分からないこげ茶色の物質で止められた。

「な、何だこれは！！」

「俺の『スキンクロードブレイク
皮膚腐食破壊』の一つ、クロードカバー
腐食防壁だ」

「『スキンクロードブレイク
皮膚腐食破壊』だと！！まさかお前が」

「そう。『スキンクロードブレイク
皮膚腐食破壊』は俺の不滅の力さ」
エターナルパワー

「スピードオフライト
く、光の速度」

亮はすぐに豊から離れる事にした。

「お前の属性は光か。物理攻撃をしてきても腐る事は無いか」

「それよりお前があの『スキンクロードブレイク
皮膚腐食破壊』だとはな。こんな身近に無属性が三人とはさすがに驚くな」

「三人？二人では無いのか？」

「『七つの大罪』がこの付近居るのは知っているんじゃないか？それを持っているのが義妹の親友の兄なんだよ。ほんと世の中は狭いもんだよ」

亮はそう言つて光の剣を構えなおした。

「さて、無駄話はこれくらいにしてさっさと終わりにしてもらつぜ」
「ああ。でもその前に逃げ場は無くして貰う。腐食粘液」クロードスライム

刹那、豊の地面から先ほどのこげ茶色のスライムが二体現れた。スライムはものすごい速さで教室の扉の前にそれぞれ向かい、スライムが通つた所にあつた物は何もかも全てが腐つていた。そしてスライムは教室の扉の前に着くと、隙間が無く出入口を塞いでいた。

「まあ、これで良いつか。窓からは逃げられるがここは四階だから逃げたとしても落ちて死ぬだけだしな」

「なるほど。でも廊下に生徒は居ないのか？」

「今更か。それは大丈夫だ。外にもう一人居るからそいつに人払いをさせてもらっている」

「そうか。それにしてもお前つて魔術開放オプニングを使うと口調まで変わるんだな」

「それは言つな。俺も気にしているんだから。それじゃ、行くぞ！」

今度こそ無駄話は止めにして本気で戦う事にした。

第十一話

2010年6月24日午後4時10分

亮は豊に向かって走り出した。

「おや、光の速度スピードオブライトというのを使わないのか？」

「別に、使った所で余計に魔力を消費するだけだからな」
クロードカバ
「そう。腐食防壁」

またしても簡単に亮の攻撃は止められた。
だが、まだ亮の攻撃は続いていた。

「微小ミクロライトの光」

刹那、光の剣がこげ茶色の物質を貫通した。

「な、」

さすがに予想も出来なかったのか豊は避けるしかなかった。

けどそれでも右肩に剣が当たり、切断までとはいかなかったが結構な深い傷を付けた。

さらに光の光度が相当上がったのにすぐに目を瞑ったが、少しもの光度の光を浴びてしまった為、目が少しやられていてあまり周りが見えなかった。

亮はいつの間にかサングラスをかけていて、一度豊から離れることにした。

豊は目の視点が合っていないが亮が居るほうに向かってそのまま話

しかけた。

「ど、どうやったんだ」

「物質と言うのはすっかりくっついて見えるが実際は違う。微小の隙間がありうまくいけば光を通過することが出来る。まあ、相当の光度が必要だが」

「ま、まさか光を屈折などをさせたというのか。金属でもない物質の中で」

「屈折と言うわけじゃなくて光の光度を上げただけさ。さすがに相当の光度が上がるので俺もサングラスを掛けないと失明してしまうけどな」

亮はそう言っていると豊が周りが余り見えてない今の内に攻撃を仕掛けようと剣を構えた。

これ以上のチャンスは無かった。豊の目が復活しても光の剣で斬り付けたので視力を見えにくく出来、時間を約十分ぐらい延長できるのだから。

これを逃せば多分勝ち目が無かった。亮はこの勝負に掛ける事にした。

そして、亮は豊に突っ込んだ。

だが、

「クロードフィールド
……腐食世界」

刹那、豊の足元の床が茶色に変色し始めた。

何かを察した亮はすぐに豊から離れた。

だが床の変色はだんだんと広まっていき、その上にある机は全て溶け始めていた。

亮はこれを見てすぐに分かった。変色した床に自分が触れれば即死だと言う事に。

亮は一度豊を見ると豊は微笑んでいた。

「まさかこれを使うとは思わなかったな。けど、これを使わせたのだから確実に死んでもらうぞ五彩亮あ！！」

豊は亮のフルネームを叫びながら言った。

確かにこのままだと本当に死んでしまう。この教室から出ようとしても、教室の入り口は先ほどの全て腐食粘液で塞がれている。

でも完全に逃げ場が無かったという訳ではなかった。

先ほどまで完全に閉まっていた窓であるが、腐食世界によって窓までもが溶けていた。

何とか窓から逃げられるのがここは四階。藤村高校はベランダが無いので何とか窓から逃げてもそのまま落下して死んでしまう。

だがこれしか逃げる方法が無かった。迷っている暇なんて無いのだ。

スピードオフライト
「光の速度！！」

亮はその掛けに掛けて教室から脱出した。

だがここからが問題だった。光の速度で地面に降りたら重力より速い為、逆に死んでしまう。

亮は何か助かる方法は無いかと探していると何かが目に止まった。

「学校の屋上……」

そう、学校の屋上だ。光の速度で学校の屋上に上がれば死ぬことは無かった。

もはや考えている暇も無いのですぐに光の速度で学校の屋上に着いた。

屋上に着いたのは良いが、それでもまだ終わっていない。
腐食世界が屋上まで侵略して来ていたのだ。

藤村高校は四階建てなのですぐに屋上まで到達して来たのだ。

もう四階は全てダメかも知れない。それでも亮はまだ諦めない。自分の決意、奈雪を一生守り抜くと言うのがあるからだ。

亮は屋上の入り口に向かい、そこから一気に階段を駆け下りた。

駆け下りて四階にたどり着くと、あと少しで階段の所まで腐食世界が広まっていた。

運が良かったので何とか四階を通過してさらに下の階と降りていった。

後は特になんとも無くな何とか学校の中から外に出て、グラウンドに逃げた。

何とか学校の中から逃げ出せた。と思って亮はホッとしていた。だがまだ終わっていない。外に逃げられたのは良かったがまだ豊を倒していないのだから。

そして数分後、学校の中から豊が出てきた。

「まさか、あの教室から逃げ出すとは思わなかった。まあ、俺は無属性だから魔力を消費しないのだから良いのだが、その様子だと結構魔力を消費したようだな」

そう。亮は『ライトナイト光の剣士』を使いすぎていた。特に微小の光は魔力を相当消費するのでもう残りの魔力が半分を尽きていた。

「はあ、はあ、た、確かにそうだな。あの時に俺はチャンス逃したのだから勝ち目なんて無いよ」

「じゃあ、なんで逃げなかったんだ？」

「逃げたとしてもお前には俺の家を知っているし、奈雪を巻き込まないためだ」

「妹思いだな。ならここで死ね。クラウドフィールド腐食世界!!」

豊はまたしても腐食世界で亮を追いつめた。クラウドフィールド

もう体力も少ない亮は走ったとしても腐食世界に追いつかれてしまうので逃げる気はなかった。

スピードオフライト
なら光の速度で逃げれば良いと思うが、使ったとしても魔力が消費されるだけで逃げ切ったとしても豊には亮の家を知っているので余り意味が無いのだ。それに家だと奈雪を巻き込んでしまう。

だから亮は逃げない。たとえ負けることになるうとも。死を覚悟していたのだ。それが亮の取った行動だった。

でも負けを認めたわけでない。無駄と思ってもあがき続けようとした。

そして、亮は腐食世界を避けながら攻撃を始めた。

ライトシエル
「光の砲弾！！」

亮は今まで使っていなかった攻撃を使った。

ライトシエル
光の砲弾。文字通り光の砲弾を放つ技である。

光の剣士で一番魔力を消費しない技でもある。だが威力はそれほどでもない。だが何発も撃てばダメージは大きくなる。

何故今まで使わなかったのかと言うと、豊に余裕を持たせるためであつた。

ライトシエル
でも光の砲弾は速度それほど無いので簡単に避けられる。

けどそれは先ほどの亮の一閃のおかげで何とか補えたのだ。

ライトロフ
「視力光奪そして、微小の光！！」

「な、また！？」

そう。この剣を触れたら時に視力を奪える視力光奪を発動したのだ。

クロードフィールド
先ほどはすぐに腐食世界を使われたので視力光奪を使わなくて済んだのだ。

だからこれが出来たのだ。これにより豊は当分の間、何も見えない。

その間に光の砲弾^{ライトシェル}で攻撃する事にしたのだ。

たとえ避けたとしても何も見えないのではどう避ければ良いのかなんて分からない。豊は光の砲弾^{ライトシェル}を受けるしかなかった。

そして、無数の光の砲弾の内^{ライトシェル}の大半は豊に直撃し、砂埃^{クロードカパー}を起こした。たとえ腐食防壁を^{ミクロライト}されようが、微小の光のおかげで光の光度を上げているので貫通してしまうだろう。

こんどこそ亮の最後の勝ちの道筋だった。これが通らなければ魔力も相当無い状態なので完全に亮の負けになる。

そして砂埃が消えるとそこには、

豊が立っていた。

「そ、そんな」

亮の幻想は完全に打ち砕かれた。あれほど撃つたのに倒れてもす
らなかったのだ。

そして豊は微笑みながら亮に話しかけてきた。

「危なかった。これを使わなければ俺は死んでいたのだろうな」

そういつて豊の近くにあったものは、何の物質か分からない黒い
物質だった。

その物質は宙を浮いており、豊の周りをまわっていた。

「な、なんだよそれ」

「これが『スキンクロードブレイク皮膚腐食破壊』の本当の力だ」

「本当の力？」

「そう。詳しくは言わないがこの黒い物質は今まで俺が腐らせたも
のを利用して作ったものなんだ。これはとても硬く出来いて光なん
かを通さない。これに隙間なんて無いのでな」

「く、」

亮はこれで自分の負けだと確信した。魔力がほんの少ししか残っ
ていないのだ。

相手が強すぎた。右肩に剣が当たって傷を負わせたのも奇跡にしか
思えなかった。

そして、亮は光の剣を地面に刺した。

「さっさと殺せ。もう、俺に勝ち目は無いのは分かっている」

「そうか。ならお前の望みどおりにしてやろう」

豊はそういうと、クロードフィールド腐食世界のスピードを少し上げて亮に近づいて

いた。

亮はそれを見ても逃げる事はしなかった。

そして、クロードフィールド腐食世界が亮の目の前に来た寸前だった。

クロードフィールド突然腐食世界が止まったのだ。

亮は一瞬どういう事だと思った。あと少しで俺は死ぬ所だったはずなのに突然腐食世界が止まったのに驚いたのだ。

そして、その疑問は豊に異変が起こったことに気づいた。

何も無いはずなのに豊に幾度の傷がどんどん増えていったのだ。

豊は何が起こっているのか分からなかったが、亮にはすぐに誰の仕業か分かった。

「お義兄ちゃんを殺すんじゃないー!!」

この場に居ないはずの人間でさらにはお義兄ちゃんと呼ぶ人物はたった一人しか居ない。

そう。完全にぶち切れていた透林奈雪が突然と現れたのだ。

第十一話（後書き）

意見、感想お待ちしております。

第十二話

2010年6月24日午後4時30分

「な、奈雪！？何でここに居るの？」

亮は何故奈雪が突然ここに居るのかと思った。
とりあえず迫って来ていた腐食世界を避ける事にした。

「なんでってやっぱりお義兄ちゃんは知らなかったんだ。私が昨日も今日も学校に来ていた事を」

「そうだったの！？知らなかった……」

そう。奈雪は昨日も今日もこの学校に来ていたのだ。

でも亮が気づくはずが無かった。なぜなら奈雪と一緒に帰ることが目的ではなく、亮が帰り道に不滅の力を持つている人間に遭遇するかも知れないと思って家に帰るまで後ろで尾行していたのだ。

そして今日、放課後になっても亮が校門に現れないことを疑問に思っている、亮の教室で光が見えたのだ。

すぐに亮の不滅の力だと分かり学校内に入ろうとしたが、亮の義妹だからと言ってさすがに普通に校門から入るのはどうかと思っただ。

だから亮が危険になったら入ろうと思いつている内に亮が教室に出て屋上に向かったのを確認した後、多分学校の中から外に出るだろうと推測してグラウンドが見える方に言ったのだ。

案の定、亮は学校の中から外に出てきてグラウンドに逃げてきた。

最後に亮が豊に無数の光の砲弾を打ち込んだのを見て全て効いてないのを見た直後に飛び出したのだ。

「まったく。相変わらず一人で抱え込んだやつってほんとお義兄ちゃんの癖だよな」

「ごめん、でも奈雪を巻き込みたくなかったんだ」

「お義兄ちゃんの言う事は分かるよ。でもね、私を庇ってお義兄ちゃんが死ぬを私が許すわけが無いでしょ」

奈雪はそういうと豊の方に顔を向けた。

先ほどまで顔がゆるかったのにわざと笑顔のような顔で豊を見ていた。

「さて岡崎さん。お義兄ちゃんがお世話になったようですね」

「まさか、奈雪ちゃんが来るとは予想外だったかな」

「相変わらず私の事はちゃん付けなんですね。まあ、それも今日で最後ですけどねえ」

先ほどまでの笑顔が突然変わり、豊に思いつきり殺意を噴き出していった。

完全にぶち切れていた。亮をここまでした豊が殺したかったのだ。これほどの殺意を亮は今まで見たことが無かった。それほど奈雪は切れていたのだ。

だが豊はそんなのを気にせずに後ろを向いた。

「悪いが、今日はこれで退散させてもらう。奈雪ちゃんが出てきたからこっちは分が悪いのでね」

「私が逃がすと思っているのか!!」

奈雪は豊が逃げようとしたので見えないナイフで攻撃し始めた。だが、豊の近くにもう一人現れてその人と一緒に姿を消した。

「悪いが勝負はお預けだ。だが亮、忘れるなよ。お前を殺すのは俺だからな。その前に死ぬんじゃないぞ」

どこからか分からないが最後に豊の声が聞こえ、亮にそう残していった。

そして次の瞬間、豊のおかげで腐食していた窓などは一瞬で元に戻っていた。

「……どうやら、向こうは岡崎さんの他にたくさん居たようね」
「だな。最低でも人払いの人、先ほど豊と一緒に消えた人、そして学校を一瞬で修復した人が居た訳だから三人は隠れていたという訳か」

「とりあえずこっちは何も呼ばなくて住んだ事だけは良かった事にしておこっか」

「だな、おとと」

亮は歩こうとしたらふらついてしまった。

それを見た奈雪はすぐに駆け寄った。

「お義兄ちゃん大丈夫!？」

「ああ、魔力と体力を相当消費したから疲れが一気に来ただけだ」
「これから家に帰るけど歩けそう？」

奈雪は心配しながら亮に聞いた。どう見たって危なかしかったのだ。

「少し無理かも知れない。すこし休ませてくれないか？」

「分かった。じゃあ学校の近くにある公園まで頑張れる？」

「多分そのくらいなら大丈夫だ」

そういうと、奈雪は亮の左腕を自分の左肩に乗せて近くの公園まで歩いていった。

2010年6月24日午後4時45分

亮と豊との戦いが終わってから15分後、豊は人気の無い路地裏に居て豊を含めて四人の男女が居た。

あの時はごく普通に話していたが、亮に右腕の斬りつけられ奈雪にはナイフで体中に傷つけていられたので少し休んでいたのだ。

それでも休んでいるだけって感じで余り苦しい顔はしていなかった。でもこれは『皮膚腐食破壊』スキנקロードブレイクの力と言うわけではない。豊が不滅の力エターナルパワーが使えるようになった時に何度も戦って身につけた力だ。

だから相当の怪我を負おうがもう何度も斬りつけられたりされているのもう慣れているのだ。

まあそれでも異常だといえば異常だが。

「ほんと、よくそんな大怪我をしているのに無事ですすよね」

先ほど豊を連れて逃げた女性が言ってきた。

彼女は氷川深琴。ひかわみこと豊と同じ白虎の一人である。

ちなみに先ほどどう逃げたかと言うと、深琴の不滅の力である『時空操作』タイムコントロールのおかげである。

『時空操作』は時間を遅くしたり、早くしたりすることが出来る。

また、時間を遅くしている時に自分が触れているものはその間も動けたりする。

だが遅くしている時間や時間を止めている時間などが長くなると魔力をどんどん消費するのだ。

だから先ほどは時間を止めて豊を連れて逃げてきたのだ。

「確かに疑問だな。毎回思うけど、何でお前はそんな傷をしているのに平気なのか？」

今度は先ほど、藤村高校に人払いをかけた人が言ってきた。
彼は桐山達也^{きりやまたつや}。彼もまた白虎の一人である。

「確かそう思うよな。でも俺も不思議なんだよ。普通こんなに傷つけられても慣れることなんて無いと思うからどうしてなのかな」
「もしかして、痛覚が余り感じないんじゃないのかしら？」

そして、藤村高校を修復した漸涼奏^{ぜんりょうかなで}がそう言った。
確かに奏の考えは一理あった。痛覚を余り感じてなかったらもつと辛い顔をするはずだからだ。

「でも俺が小学生だった頃は普通に怪我をしても痛かったぞ」
「なら今までで不滅^{エターナルパワー}の力と戦って痛覚を少し無くされたとかは」
「そんなの、『七つの大罪』^{グリモワール}しか思いつく……！？」

豊はある事を思い出した。
そう。一度痛覚を失うような不滅^{エターナルパワー}の力を持った人と戦った事が居たことに。

それはまだ豊が不滅^{エターナルパワー}の力を覚醒してなかった頃の話であつてそして、戦っている途中で覚醒することになった戦いであつた。
だがそいつが女性であること以外は覚えていなかった。あの時は訳が分からなくて余り覚えてないのだ。

そしてそれを思い出した豊はそいつに怒りを増してきていた。
今思えばその女性を殺すのは簡単だと思っていて、そいつを殺し損ねたのだから。

そう。その女性は豊が覚醒したとたんに逃げたのだ。

「……どうやら、亮を殺す前にやることが出来たな」
「なにか思い出したような」

豊が何かを思い出したことに気づいた奏はそう言った。

「ああ、俺の痛覚が余り感じなくした人物を殺すというな」
「もしかして、その人ってまだ生きているのか？」

達也は今まで豊が逃した人物は亮を除いて誰も居ないと思っていたのでそう聞いた。

「生きているよ。俺が覚醒する原因になった人物だよ。今になつたら簡単に殺せるからムカついているんだよ」

「じゃあ、次の目的はそいつで良いの？」

深琴は次の目的はそれで良いのか確認した。

ちなみにこの四人は白虎の中でいつも一緒に行動している四人である。

元々、豊の事後修復、移動手段、人払いの要因として四人を組ませたのだが、それがきっかけで年が近いと言うこともあって仕事以外でもいつも一緒に行動することになったのだ。

「ああ、でも今は一度戻った方が良いな」

次の瞬間、四人は姿を消した。

第十二話（後書き）

次々回、今まで出てきた登場人物と用語を書き直します。

第十三話（前書き）

続けて投下

第十三話

2010年6月24日午後5時00分

「……暇」

病院の一室、夕香は一人でそうつぶやいていた。

入院しているので暇になるのはしょうがないのだが、それでも呟いてしまうほど暇だったのだ。

何かすることを考えているとドアをノックする音がした。

多分看護師が様子を見に来たのだろうとそう思っていたら、扉を開けて入ってきたのは美咲だった。

それほど驚きもしなかったが今日は何しに来たのだろうと思った。

「今日は何しに来たの？」

「ちよつとね。夕香に会わせたい人が居たから寄ったの」

「会わせたい人？」

夕香は誰だろうと思った。

なぜならこの二年間人を避けて来ていたから余り自分の接点がある人なんて居ないからだ。

あるとしたら菜乃葉の事件が起こる前の人ぐらいしか居ないのだが、その時の友達海斗を除いてみんな夕香から離れていったのでそれほど居ないはずなのだ。

そんな事を思っていると病室の外から誰かが入ってきた。

髪は紫色をしていて何も結んでない女性だった。

だが夕香は見覚えがあった。っていうより見覚えが無い方がおかしかった。

なぜなら彼女は美咲と同じく生徒会をしており、副会長をしていた人だったからだ。

「こんにちは。私の名前は分かっているよね？」

「ええ、知ってますけど何で私のところに？」

「それはね、夕香さん。いや、今は春秋君でもいつか「ツー！」

夕香は驚いていた。何故目の前に居る人物は夕香の正体を知っているのかと。

もしかして美咲が言ったのかも知れないと思って美咲を睨み付けたが、美咲は『私は教えてないよ』とアイコンタクトで返してきた。なら何で目の前の人物、村雨静香は知っているのかと思った。

「あら、どうやらどうして私がそんな事を知っているのかと
思っているわね」

「どうして知ってるのー！！」

「簡単なことよ。四神戦争とでも言えば分かるんじゃない」

それを聞いてすぐに分かった。静香は四神戦争の関係者だと。

そして美咲がここに連れてきたと言うことは静香は私達と同じ朱雀のメンバーだと。

それがわると、夕香は静香に向かって警戒をするの止めてホッとしていた。

「なんだ、私達と一緒にいう訳ね」

「そういう事。っていつても春秋君の事は私が覚醒する前から知っていたけどね」

「え、私達ってあったことありましたっけ？」

「あるわ。一度だけね」

静香はそう言ったが夕香には見覚えが無かった。静香の顔を見ても思い出せなかった。

でも夕香が思い出せないのも当たり前だった。静香と初めて会ったのは菜乃葉が交通事故を起こす一週間前だったからだ。

それは、静香がナンパにあっている時だった。

静香は嫌がっていたがナンパの三人組は静香を連れて行こうとしたその時、通りすがりの少年がその三人を殴ったのだ。

それが春秋だった。春秋はすぐに静香の手を引っ張って逃げたのだ。それが二人の初めての出会いであった。

静香はお礼を言おうとしたが、どうやら春秋は急いでいたようなのですぐに離れようとした。

だが静香はせめて名前だけでもと言ったので、春秋は吹矢春秋と名乗ってすぐに静香と離れた。

その時静香は春秋と離れると胸が苦しくなったがその時はよく分かっていなかった。

その後、春秋に事件が起こったなんて知るよしも無かったが、そして二年後の四月に静香は生徒会をしており入学式に参加していた。

そして、偶然にも新入生の中に春秋が居るのを見つけたのだ。だが二年前の春秋とは違い、まるで人と関わりたくないオーラを出していたのが分かった。

一体何があったのだろうと思っていたがそれはすぐに分かった。

それは生徒会選挙が終わり、生徒会室で美咲と静香の二人きりだったときだった。

このとき二人はお互いに覚醒していて同じ朱雀のメンバーだったので二人とも知っていたのだが、生徒会で美咲が春秋の事を呟いたのだ。

これによって美咲が春秋と知り合いだと言う事を知り、そのときに春秋の事を全て聞いたのだ。

そこですべて知ったのだ。春秋があんな風になってしまった理由を。その夜、静香は家で泣いていた。

何で泣いているのかなんて分からなかったが、その時も胸が苦しかった。

そして泣きじゃくってから数分たってやっと分かった。自分が春秋に恋していることに。

自覚をすると胸の苦しみは楽になった。けど何も変わっていないのは事実だった。

だが静香は自分から進んでいこうと思った。そして春秋を振り向かせるんだと。

けど、それはうまく行かなかった。生徒会活動が多くてそんな暇は無かったのだ。

一度美咲に頼んで春秋を生徒会室に呼べないかと美咲に言ったが、美咲でもそれは無理だと言い切った。

そこで春秋は幼馴染の美咲からも拒絶していることを静香は知った。完全に手詰まりだと知った静香だったが良い転機が起こった。

春秋が覚醒したのだ。

それは静香にとって嬉しかったり悔しかったりした事でもあったが、これで春秋と会う機会が出来たのだ。

そして今日、やっと会える機会が出来たのだ。

「そうなんですか。覚えてなくてすみません」

「良いのよそんなのは。だってあの一週間後に事故が起こったんですよ。覚えてなくて当然よ」

「はい」

「さて、無駄話はこれくらいにしましょ。そろそろ本題に入らないと」

「本題？」

夕香は何の事かと思った。ただ私に会いに来ただけではなかった

のかと。

「そう。三日後の進入について明日と明後日で話し合うの」

「本当はそれを伝えにきたの。だから退院したら直接鎌倉の本拠地に向かつてという事」

「そんなことだったら、メールで言えば良いのに……」

「そう思ったのだけどほら、静香が夕香に会いたいと言うから」

「あ、そうか。でも何で私に会いたかったの？」

「え！？そ、それは……」

「ああ、その反応を見れば何で会いに来たのか分かったよ……」

夕香からの質問に静香は顔を赤くしてしまった。

それを見て夕香はすぐに分かった。静香が自分のことが好きだと。

そして自分のため息を吐きなくなってしまった。美咲同様、めんどくさい人が増えたと。

でも夕香は美咲や静香とは付き合うことは出来ない。自分の罪から逃れることは出来ないからだ。

もし告白したら自分は返事をしない。

なぜなら、告白をされて断ったとしたら夕香は自分を悔やんでしまう。罪のせいで断ってしまったと思っているからだ。

それが今の夕香にとって一番の選択なのだ。だから二人からも告白をされても返事はしないだろう。

「え！？本当に私の気持ちがあったの！？」

静香は夕香の言葉に驚いていた。

それを見ていた美咲は二人の話に割り込んできた。

「ええ、夕香はこう言うのはすぐに分かるのよ。私の気持ちだって気づいているし」

「え、じゃあ返事は貰ったのですか？」

「貰ってないわよ。いや、返事が出来ないと言ったほうが良いのかもね」

「そういう事なの。私は告白されても返事はしないのよ。そうしなければ自分を悔やんでしまうから」

夕香は真面目な顔でそう言った。

静香はその顔を見て理解した。それほど夕香の立場が危ういという事に。

でも夕香はそれを逃れることは出来ない。それが自分の罪だからだ。

「さて、じゃあ私達は帰るね」

「分かった。静香さん、後は美咲から聞いてください。一応、大体の事は分かっていますので」

「うん。じゃあ明日」

美咲はこの場の空気に耐えられなく、静香と一緒に帰る事にしたのだ。

夕香も静香もこれ以上は話さなくても良いと思っていたので二人は美咲に合わせたのだ。

そして美咲と静香は病室から出て行った。

第十三話（後書き）

予定通り次回は登場人物紹介です。

第十四話

2010年6月25日午前11時13分

「それじゃ、お大事に」

「はい。ありがとうございました」

夕香は夕香の担当の医師に迎えられながら病院を後にした。

まさか迎えられるとは思っていなかったので少し戸惑っていたが、何とか冷静を取り戻して普通に出来た。

そして、夕香はタクシーを拾って近くの駅である菊名駅に向かうように言った。

それから約10分で菊名駅に着き、電車に乗って鎌倉駅に向かった。約45分後、夕香は鎌倉駅に着き朱雀の本拠地である入り口に向かった。

約5分後、夕香は朱雀の本拠地にたどり着き、美咲がやったように鳳凰の像を右に回して入り口を開いた。

階段を下りて行き、松藤が居る部屋に向かった。

扉の前でこの前教えてもらった暗証番号を打って中に入った。

「お、やつと来たようだな」

夕香が扉を開けるとすぐに松藤が夕香の方を向いた。

夕香が中に入るとそこには静香、松藤、藤木と夕香が知らない人たちが六人居た。

そこで美咲がまだ来ていない事に気づいた。

「あれ？美咲は？」

「ああ、美咲なら学校に行ってから来るって言ってたよ。うちの学校の生徒会って大体は私と美咲しか居ない事が多いから、さすがに二人とも休むのはどうかと思って学校に行くことにしたらしい。それに今回は美咲は別の部隊だから今日は来なくても良かったのよ」
「なるほど。それにしても、あいつって相変わらずそういう所は律儀だよね……。まあ、あいつらしいけどね」

「それは私も同感する」

「なんか、話が合いそうだね」

「確かにそうかもね。今度美咲の事で愚痴らない？」

「それは良いわね。じゃあいつにする？」

夕香と静香はにやけながら言っていた。
それを見ていた松藤が咳払いをして夕香と静香は話を止めて松藤の方を向いた。

「そんな無駄話は良いからとりあえず作戦を言うぞ」

「すみません」

「まあ、良い。それでなんだが……」

松藤は真面目な顔になり、真面目に話し始めた。

「今、この中に居るメンバーは鎮圧部隊である。前線部隊と中堅部隊で開けられた道を通って一気に鎮圧する部隊だ」

「要するに白虎に止めを刺す部隊だと言う事？」

松藤の話を聞いて確認をしてきたのはさいとうはゆき斎藤葉由紀と言う人物である。

斎藤も静香と同じスキルナンバー？イクスのスキル？シックスであるのだ。

「そういう事だ。だからここにいるメンバーは朱雀のスキルナンバー

「？であるスキル？の村雨静香とスキル？の杉田達樹とスキル？の斎藤葉由紀の三人、

朱雀の魔法属性の中で魔力を馬鹿でかいほどの持っている鈴木美雪と柊楓の二人、

朱雀の魔術属性の中で魔術の使い方に一番なれている藤木翔と紀伊龍馬の二人、

同じく魔術属性で回復魔術にスバ抜けている萩原美紀、

そして、朱雀で唯一の無属性である『七つの大罪』の持ち主である吹矢春……いや吹矢夕香の九人だ」

「あの、今なんで私の名前を言い替えたのですか？そのまま言っても良かったと思いますが……」

「いや、そっちの方が良いだろうと思ったから」
「あ、そうですね」

夕香は自分の名前の言い方が夕香のほうが良いと納得した。

春秋の名前だとどう見たって男の名前だし、そっちの方が良いのは当然だった。

なのでこういう時も春秋という名前より夕香という名前の方が良いのだ。

「では話を戻すぞ。その中でやはり一番厄介になるのが無属性の『皮膚腐食破壊』を持っている岡崎豊だろう」

「そういえば、岡崎豊っていう人と同じ学校に行っている人に聞いたのだけど、青竜の五彩亮と幼馴染という事を聞きましたのけど」
「五彩亮ですって」

鈴木が亮の名前を言って夕香は鈴木の方を向いた。

菜乃葉の友達である奈雪の義理の兄あたる人物。夕香は亮の名前が出てくるとは思っていなかったのだろう。

様子が変わった夕香を見て藤木は何かを思いついたようだ。

「ああ、確か君と水谷が戦った人物だよな」

「ええそうですね、今はちょっと別のことで」

「？」

藤木はなんと事だろうと思ったがそんな話は後回しなのでそれ以上は聞かなかった。

「それじゃ、もしかしたら青竜も来るかも知れないって事？」

「それは無いだろう。たぶん向こうは神奈川県にある白虎の基地は見つかっていないはずだ。神奈川県で襲っている回数は多いがあの規則性には気づかないはずだ。それに、たとえその事に気づいていたとしても神奈川県どこにあるかは分からないはずだ」

松藤は青竜がまだ気づいている筈がないと断言した。

「そういえばさつきから気になっていたのだけど、松藤リーダーはどうやって白虎の居場所を知ったのですか？」

みんな思っていたことを代表して萩原が松藤に聞いてみた。

確かにそうだ。夕香も一度聞いたがその時だって規則性しか聞いてないのだ。

なので気になっていた。でもあの時以外に会う時は無かったので聞くことが出来なかったのだ。

「ああ、そのことね。それは簡単だよ。一度白虎に戦いを挑まれてそれで勝った一人が『思考強奪操作』ロブコントロールだったものでね。その時に白虎の奴から聞いたらしい」

「……それだけですか？」

「それだけだか？」

次の瞬間、松藤を除くみんなは思いっきりずっこけた。

当たり前だ。松藤が知った理由が調べたわけでもなくただ白虎に戦いを挑まれてそれで勝ったら居場所が分かったってただの偶然でしかなかったのだ。

特に夕香は昨日、規則性やらなんやら言われていたのにそんなことで分かった事を知ったので今までの気になっていたことは何だのかと思っていた。

「期待した私が損でした……」

「同じく」

「同感」

松藤を除くみんなは同じ事を思っていた。

「とりあえず、今はそんな事は良いだろう」

「そうですね。それで、明日は前線部隊と中堅部隊も一緒に集合するの？」

「そのつもりだ。だから今日はみんなここに泊まってくれ。不滅の力の特訓をするなりしても良いから」

「ってもう話し合いは終わりなのですか？」

「ああ、大半は明日話す予定だから余り話すことも無いんだよ。っていう事で解散」

松藤がそう言ったのでみんなは解散した。

夕香は静香と一緒にいることにしたただが部屋を出て行ったところで静香が夕香に話しかけてきた。

「ねえ、一度戦ってみたい？」

「良いけど、私の『七つの大罪』グリモワールは感覚を失わせる技だよ。数時間

は感覚が戻らなくなるけど良いの？」

「大丈夫だよ。みきつちには頼みであるから」

「みきつちって萩原美紀さん？」

「そ。漢字だとよく『みき』っていう事が多いから、そこから取ってみきつち。彼女の不灭の力ははそういうのもすぐに回復できるから」

「それなら分かった」

という訳で夕香は静香と戦うことになった。

途中で萩原と合流して練習場に向かった。

第十四話（後書き）

意見、感想お待ちしております。

第十五話（前書き）

ブログを始めたので遅くなりました。

第十五話

2010年6月25日午後12時24分

夕香と静香は萩原を連れて練習所に来ていた。

練習所は朱雀の一番下の階にあり、高さは建物の四階くらいの高さがあった。

さらに広さは東京ドームくらいの高さがあった。

夕香はそれの広さを見て驚いていた。

「凄い、こんな広い所があるなんて……」

「もともと、訓練の為に作られているの。しかも、敵が侵入してきたときの為の非常出口もここにあるのほらあそこよ」

夕香は静香が指を指した方を見ると、非常口と書いてあった扉があった。

「それに、ここは中から閉めると中からしか開けられないの。しかも核が当たってもびくともしないらしいよ。多分、不滅^{エターナルパワー}の力にも対応していると思うよ」

「へえ」

「そんなことよりフィールドはどうするの？ 静香が練習すると言ったのだから静香が決めないと」

夕香が感心していると、萩原は入ってきた入り口の近くにある機械を触っていた。

フィールドって何の事だろうと思った春秋だが、それを気にしないで静香は萩原の方に向いた。

「あ、そうだったね。じゃあみゆっち、住宅街でお願い」
「分かった。住宅街ね」

静香からそれを聞くと、萩原は機械を弄り始めた。

そして数秒後、練習所は変化し始めた。

地面から何かが出てきて、それを良く見ると家が地面から湧き出していた。

次々に家が湧き出てきて最終的には住宅街になっていた。

それを見て夕香は驚いていたが、驚いている夕香に静香は話した。

「ここ、ありとあらゆるフィールドを設定できるのよ。私も最初は驚いたけど」

「へ、へえ」

「それじゃ、始めるから二人とも準備して」

静香はそれを聞いて準備をした。

未だに驚いている夕香もその言葉を聞いて準備をした。

そして、お互い一箇所の通りで向き合った。

「あ、そういえば吹矢さんは聞いているかしら？同じ朱雀同士だと本気で戦っても死ぬ事が無いって」

「え！？そうなの！？」

「そうよ。たとえ切断されようが時間は掛かるけど直るわよ。まるで不死身の体みたい」

「なんか、それって気持ち悪いですね……」

夕香はそれを想像して気持ち悪いと思った。

そりゃそうだろう。切断されたとしても治るのだから。

「それじゃ、吹矢さんと静香は位置についているね」
「ついてるよ」

「私もついていきます。後、吹矢じゃなくて夕香で良いですよ。私も美紀みのりと呼びますので」

「分かった。とりあえず準備は良いのね。それじゃ、練習スタート」
「オプンゲート魔術開放！！」

夕香と静香はお互いに不滅エターナルパワーの力を発動させた。

夕香は自分の周りに七つの結晶が中に浮いていた。

そして、静香は特に静香には何も変化は無かったが、静香の近くに一人の女性が居た。

年齢は夕香や静香と同じくらいの年齢であり、髪と目は藍色で結んでなく椅子に座れば地面に付くくらいの長さがあった。

『マスター。これは練習ですか？』

「そうよ。藍眼藍髪の予知念力者、シスカIIアイリス」

彼女は静香の事をマスターと呼び、静香は彼女をシスカIIアイリスと呼んだ。

「それが、静香の不滅エターナルパワーの力なの？」

「そうよ。私の不滅エターナルパワーの力は『不滅の召喚獣』。獣属性の最高上位に当たり、私達と同じ人間でなの」

そう。それが静香の不滅エターナルパワーの力である。

『不滅の召喚獣』。静香の言ったとおり獣属性で最高上位にあたる不滅エターナルパワーの力。

そして、獣属性で唯一不滅エターナルパワーの力を使う召喚獣である。

さらに、静香が持っている召喚獣は全部で九体。九人も静香に仕えているのだ。

その内の一人が藍眼藍髪の予知念力者、シスカⅡアイリスであるのだ。

「それじゃ、始めましょうか」

「そうね。」

こうして、夕香と静香の練習が始まった。

第十五話（後書き）

すみません、次からバトルに入るたかったので短くなってしまいました。

第十六話

2010年6月25日午前9時50分

時間をかなり前に遡り、亮は学校に居て一時間目の授業が終わった。

もちろん豊は欠席だ。あんな事があったのだから来る訳が無かった。そして機能あった出来事は何も無かったかのように綺麗に消えていた。

ちなみに、雪奈とはあの後仲直りした。それに続けて、

『もしかすると、学校の生徒の中に別の組織が居るか分からないからお義兄ちゃんも気をつけてね』
と言われた。

確かにそうだった。現に亮は幼馴染で腐れ縁である豊がそうだったのだから。
今回ので分かったのだ。平和な日常の中にも敵は居るかも知れないという事が。

——そうは言ったが、どう警戒すれば良いんだよ……

実際、警戒なんてどうすれば良いのか分からなかったのだ。
亮はため息を吐くと、亮に寄ってくる人が居た。

「どうしたの？ため息なんか吐いちゃって？」

成海だ。成海は亮のため息を吐いているのを見てどうしたのかと思っていた。

亮は成海の声が聞こえてそちらを向くと、何かを思い出した。

『お前に成海の事を頼むかも知れない』

豊と戦う前に豊が言った言葉だ。

この言葉の意味は分かっていた。もし自分が死んで存在が無くなったら俺に託したと言う意味だと亮は思っていた。

けど、それだけの意味だけが込められていないのだと今気づいた。
エターナルパワー
不滅の力だと気づかれれば普通は一緒に居ることなんてしない。現に豊は学校に来ていない。

あの時豊は、亮と戦う事にしてからこうなる事が分かっていたのだ。だから、豊はそう言ったのだ。成海を守るのはお前に託したと。

——ふざけるなよ。それは恋人である彼氏の役目だろうが！！

亮は豊が許せなかった。自分の彼女をほったらかしにして幼馴染で腐れ縁に頼む豊が許せなかった。

けどもう過ぎた事だった。最初から、豊はその覚悟は出来ていたのだから。

それに気づいていればこんな事にならなかった。その悔しさに亮は歯をかみ締め、両手に力を入れていた。

「なんか変だよ、亮。今日は豊も無断欠席するし何かあったの？」

そんな事を知らない成海は亮が変だと気づき、どうしたのか聞いてきた。

それが亮の胸に突き刺さった。この世界で何が起きているのか知らない成海を見て。

でも何も知らない成海の方が羨ましくも思った。こんな、思いをしなくても良いのだから。

だが亮の苛立ちは消えない。こんな何も出来ない自分が。

「ねえ亮、聞ってるの！」

成海はその言葉に亮の堪忍袋は切れた。

「さっきからうつせんだよ！！俺と豊の気持ちも知らないくせに！！」

亮は立ち上がって成海に怒りをぶつけていた。クラスにいる他の生徒達も亮の怒りに驚き、亮の方を見た。

八つ当たりなのは亮でも分かっていた。けど、先ほどから何も知らない成海を見ているとさらに苛立っていたのだ。

そして、その成海は先ほどの言葉の中に気になる言葉が入っていた。

「亮と豊の気持ちって、豊にも関係がある話なの！？」

そう、つい先走って豊という名前を出してしまったのだ。

それに気づいた亮はすぐに成海から離れようと教室から出ようとした。

「ねえ、何で私に何も言わないで出て行っちゃうのよ！！ねえってば！！」

成海は亮を追いかけてようとしたが、突然教室のドアの前で止まった。

そして、成海の方に振り返った。

「成海は、何も知らなくて良い。何も、知らなくて良いんだ」

それを言つと、亮は教室を出て行つた。

追いかけてよとしたが、先ほどの亮の悲しそうな顔を見てその場に立ち止まってしまった。

そして教室を出て行つた亮は屋上に向かつていた。

屋上はいつもは鍵で閉まっているのだが、亮は去年先輩から屋上の鍵を貰つた。

その先輩は良く授業をサボつたりするときに屋上に行つて寝ていたそうだ。

亮は先輩の卒業の時にその鍵を貰つたのだが、まだ一度も屋上に行つた事が無く縁が無いと思つていた。

だが屋上は誰も来る事は無いので考えるのに最適だった。

そして屋上の入り口に着くと、鍵を開けて屋上に出てドアの鍵を閉めた。

上を見れば青空が広がっており、前や周りを見渡すと小さな山が幾つかあった。

もうすぐ夏ごろになるので山は緑で茂っていた。

そんな事は関係なく、亮は屋上ドアを閉めて屋上の中心あたりで横になった。

横になると暖かくて心地よかった。

——なるほどな。先輩が心地良いつて言うのも何となく分かるな。

亮はこの鍵を貰つた先輩の事を思い出して笑い出した。

その先輩は亮にとって一番の理解者だった。また、似た物同士であった。

自分の性格に似ているからお互いに理解しあえる、そんな二人だった。

——先輩が居れば、こんな事も簡単に解決できるのかも知れないな。

亮はここに先輩が居れば簡単に解決してくれると思ってしまったけど、その先輩はもう卒業してしまった。もう亮を手助けしてくれる人は居ないのだ。

だが、亮はそれでも良いと思った。助けてもらってばかりだったので今度からは自分一人で解決をすべきなのだ。

——豊は、俺を倒すのは自分だと言っていた。なら豊を倒すのは俺だ。成海には悪いがこうなってしまった以上、俺も食い下がる訳には行かないんだ！！

亮は決心した。自分も食い下がる訳には行かない。奈雪を守るために！！

でも今のままでは完全に豊に負ける。そんなのは分かっていた。たとえば自分がスキル？^{ファイブ}だとしても勝ち目は無い。

——そもそも、豊の不滅の力^{エターナルパワー}は何なんだ？ 『皮膚腐食破壊』^{スキנקロードブレイク}は元々そんな名前ではない。そしてあの黒い物体は……

亮はあの黒い物体を思い出すと何かを思い出した。

亮が神奈川県にある青竜の基地にある本をまとめたある図書館みたいな所に一度入って、気になっていた事が書いてあったものがあったのだ。

それは、四神戦争の事ばかり書いてある本の中に、その本だけにしか載っていない不滅の力^{エターナルパワー}があったのだ。

名前は『養分吸収の未確物質』^{エネルギーアブソーブダークマター}。それがその時気になった名前だ。あの時たくさん読んだのにその本だけに書かれていた不滅の力^{エターナルパワー}だった。

——『養分吸収の未確物質』^{エネルギーアブソーブダークマター}。もう一度調べる必要がありそうだな。

亮はそう思い学校が終わったなら、青竜の基地に行こうと決心した。そうなるともう何も考える事も無くなり亮は教室に戻るうとしたが、もう二時間目は始まっていた。

——… 今教室に戻るのも何だから、今日は授業をサボるか。

そう思うと立ち上がるうとした体をまたしても横にした。

何もする事も無いので寝ようかと思うと、手に持っていた屋上の鍵が目に入った。

——そういえば、この鍵って東原高校の屋上の鍵と一緒に先輩が言ってた気がするけど……ま、どうでもいいか。

亮はそんな事を思い出して、どうでも良かったのでそのまま昼寝をした。

第十六話（後書き）

今回、重要な言葉がたくさんだしました。
次回は夕香と静香のバトルに戻ります。

第十七話

2010年6月25日午後0時47分

夕香と静香の練習だが、夕香は苦戦していた。

静香とアイリスに一度も当たらなかったのだ。

いや、夕香は確実に二人に向かって結晶を放っている。

だがアイリスによって方向を変えられているのだ。

アイリスの不滅の力は彼女の名でもあるエターナルパワー藍眼藍髪サイコロオーデルの予知念力者からわかるとおり、予知と念力を使う『念力予知』である。

そう、夕香の放つ結晶の攻撃は彼女の念力で方向を変えられているのだ。

一度、本体である静香を狙ったがアイリスによって簡単に方向を曲げられた。

守りに関しては鉄壁だった。だが夕香にも考えがあった。

守りが鉄壁なら隙を狙うしかない。ジャッチメント

極光の断罪者を放つと言う手もあるが、静香は戦う前に九人の召喚獣を操れると言っているので仕留めると言う事は出来ないだろう。

やはり隙を狙うしかなかった。

隙を狙うには結晶を隠さなければならなかった。

なら一度、住宅街の中を逃げるしかなかった。

そうと分かると夕香は少しずつ後ろに下がり、十字路に差し掛かると夕香の見ている方向を見て左の道に行こうとした。

『そんなの、私が許すとても？』

しかし、夕香の行動は全て読まれていた。

攻撃しても全て防がれる、なら次はどうするのかとアイリスは考え

ていたのだ。

バトルをする時は先読みをしたり、隙を見せない方が勝つ。そんなのは常識だ。

なのでアイリスは次の夕香の行動を読んでいた。全て防がれたらどうするかと。

まず自分の隙を作る為に行動する。でも夕香の技を見ていると遠距離攻撃だとすぐ分かる。

遠距離攻撃なら隠れていた方が攻撃しやすい。なので夕香の行動がすぐに読めたのだ。

まずこの場から逃げ、そして追いかけてくる自分に角を曲がった所で遠距離から攻撃すれば良い。

ならアイリスがすることはそんなことをさせない事だ。

夕香が逃げた後、いやそれより前だ。

逃げる前に夕香を止めてしまえば良い。それがアイリスの考えだった。

召喚獣にしてその思考力。優秀すぎるにもほどがあった。

そして夕香がアイリスの念力で動けなくなると、アイリスは夕香に近づいた。

『あら、先ほどの余裕はどうしたのかしら？』

「……」

夕香は何も答えずにアイリスを睨みつけながら見ていた。

いや自分を恨んでいたのかも知れない。今の自分じゃ、勝てない自分に。

『私を睨みつけてどうしたのかしら？それほど悔しかったのかしら』

「……」

『まあいいわ。とりあえず練習だけど、一度気絶させるから』

アイリスが念力を使って夕香を気絶させようとしたその時だった。

「……そうね。確かに勝負がついたわね」

夕香が微笑んだのだ。

アイリスはそれが気色悪かった。何故、夕香は微笑んでいるのか？

『気が狂ったのかしら？』

「いや、私は狂ってないわよ。そして、その余裕が貴方のミスよ」
『一体何を』

「アイリス逃げて！！」

アイリスは未だに夕香の微笑みが分かっていたいなかったが静香は分かっていた。

静香は次に何が来るが分かったようだ。『七つの大罪』グリモワールにはまだ何かがあると察したのだ。

アイリスはすぐに危険を察して後ろに夕香から離れようとした。

「けど遅い！！ジャッチメント極光の断罪者！！」

刹那、七色の光線がアイリスに向かって放たれた。

アイリスは念力が間に合わなかったので上に飛び跳ねるしかなかった。

だがそれによって念力で動かないようされていた夕香と七つの結晶の気が緩み、解除してしまった。

それを逃さなかった夕香は七つの結晶を全てアイリスに向けて放った。

アイリスもすぐに反応して念力で外そうとしたが、七つ全てを念力をしたせいで完全に操る事が出来ず、七つのうちInvidiaとIraxレヴィアタン以外はかすってしまった。

『チツ、かすつちゃったか……』

アイリスはかすってしまったと思っていたが、夕香にとってはそれはとても良い事であった。

そしてアイリスが夕香のほうを見るとそこには足りないものがあった。

夕香の周りに結晶がたった二つしかなかったのだ。しかも、先ほどアイリスに当たらなかったInvidiaとIraが残っていた。レヴィアタンサタン

それが何を意味しているのかは静香とアイリスには分からなかった。逆に結晶をどこかに隠したのかと違っていたぐらいだ。

だがそれはある意味あっているが間違っていた。

そして、夕香は微笑みながらこう言った。

「さあ始めよう！！悪魔の宴の始まりよ！！」

刹那、屋根の上に五人の女性が静香とアイリスを囲むように居た。その女性達は全員、夕香とまったく同じ顔、容姿、姿をしていた。

そして彼女達はそれぞれ、赤色、緑色、青色、藍色、紫色をした剣を装備していた。

『傲慢のsuperbia。ここに』
ルシファー

『怠惰のacedia。ここに』
ベルフェゴール

『強欲のavaritia。ここに』
マモン

『暴食のgula。ここに』
ベルゼブブ

『色欲のluxuria。ここに』
アスモデウス

彼女達は夕香のほうを向き、お辞儀をした。

そう、彼女達は元々アイリスに当たった結晶であった物が人間になった者達だった。

夕香が使ったのは悪魔の復活。相手にかすった結晶を人間にする技。アイリスに当たったのは五つ。なのでその五体が人間になったのだ。そしてアイリスは何か危ない感じを察して静香と逃げようとした。

「そんな事をして無駄だよ。私達には逃げられない。テメエらは私のディーナーになるのだから。ひやはははは！！」

夕香は悪魔のような笑みを浮かべて言った。

もはや夕香って感じではなかった。夕香も悪魔って感じだった。

悪魔の復活は結晶が人間になった分、夕香に七つの大罪を背負うのだ。

なので今の夕香は傲慢、怠惰、強欲、暴食、色欲の五つを背負い、五つの感情が表に出たのだ。

そう、これは全て夕香の感情である。夕香の中に眠る感情が湧き出た感じなのだ。

「さあ私の悪魔達よ。だるいけどあのもの達を殺す程度にやれ。私が勝つために」

『『『『御意』』』』

刹那、五人の悪魔達は一瞬にして消え去った。そして一瞬にして静香とアイリスを囲んで現れた。

「「なっ、」」

さすがに驚いた。先ほどまで屋根の上に居たのにいつの間にか目の前に現れたのだから。

しかも、見るだけで戦闘能力が高いとすぐに分かった。彼女達は戦闘に特化されるように鍛えられたかのように。

それを見て不味いと思ったアイリスだが、すぐに五人一斉に静香と

アイリスに攻めてきた。

確実にやられると思ったアイリスだが、静香はそうは思っていなかった。

なぜなら静香はまだ召喚獣を一体しか出していないのだから。

「ヘリン＝サクラ魔法界の英雄！！」

静香がそう叫んだ直後、五人の悪魔達の攻撃はバリアで全て防がれた。

彼女達の戦闘能力は尋常でないほどの力だ。普通ならこんなバリアでも割れるはずだった。

だが、彼女達の攻撃を簡単に防いだのだ。尋常でない戦闘能力を持っている悪魔達の攻撃を。

それを見て夕香は驚いていた。あの悪魔達をいとも簡単に防いであたのだ。

夕香は一度、五人を自分の近くまで呼び戻した。

そして、彼女達が離れるとバリアは消えた。

バリアの中に居た数はさらに一人増えていた。

ピンク色の髪をしていて、髪は結構長く白い服装をしていた。

『お呼びですかマスター』

そしてバリアを解除した彼女、サクラは静香の方を向いた。

第十七話（後書き）

分かる人もいると思いますがサクラの容姿はfortissimmoのサクラと同じです。

第十八話

2010年6月25日午後1時09分

『お呼びですかマスター』

先ほど、バリアで五人の悪魔達を防いだサクラは静香の方を向いてそう言った。

夕香は先ほど悪魔達を防いだサクラを見ていて、一番警戒をしていた。

身体能力がスバ抜けているはずの悪魔達を防いだサクラの魔力総量はとてつもなくヤバイと察してサクラを警戒していたのだ。

そんな夕香を見て静香はサクラに話しかけた。

「もう、相手の不滅エターナルパワーの力がどんなのか分かっているでしょ」

『もちろん分かっているんだよ』

「ならそれを私に教えて。どう行動するかそれで決まるから」

『分かったんだよ』

静香は夕香の『七つの大罪グリモワール』がどんなのかサクラから詳しく聞く事にした。

何故、先ほど召喚されたのに知っているのかというと、静香によって召喚されなくても見る事が出来るのだ。

どういう事かと言うと、召喚されていない間は静香の体の中にあり、痛みなどを共有しているのだ。

そして静香の目で周りを見る事が出来るのだ。

さらにサクラは相手の不滅エターナルパワーの力がどんなものか詳しく知る事が出来る対兵器戦略思考をいつでも使っている。

なので静香の目で見て、対兵器戦略思考で夕香の『七つの大罪』が
ミームスブルン
どんなのか分かっていたのだ。

『今現在で分かっている所はあの結晶に触ればそれぞれ持った感
覚を失うこと』

「それで、」

『そしてその触れた結晶は実体化することができず事ぐらいなんだ
よ』

「じゃあ、ジャッジメント極光の断罪者というのは？」

『あれは七つの結晶を利用して光線を放つぐらいしか分からないん
だよ』

「分かった。それだけ分かれば十分よ」

静香はサクラから夕香の『七つの大罪』がどんなものが聞いて理
解した。
グリモワール

サクラの説明に夕香は驚いていた。

あつという間に自分の『七つの大罪』がどんなものかサクラによつ
てばれてしまったのだから。

そしてそれに夕香が不利なってしまったからだ。

「さて、ほとんど夕香の『七つの大罪』がどんなものか分かってし
まったけど、どうするのかしら？」

「くつ、でも私が使っていないのはまだ分からないじゃない」

確かに事実だった。サクラが分かっていたのは夕香がこの戦いで
使った技だけだった。

それに使った技でも一部分からない所は分かっていない。ジャッジ極光の断
罪者とか。
メント

だからまだ夕香が完全に不利になた分かった訳じゃなかった。

「そうね。ならサクラの技を見ても言えるのかしら？サクラ」
『分かったんだよ。魔法拘束！！』

刹那、夕香に桃色の腕輪みたいなものが四肢に全て付けられた。夕香は動こうとするが、そのせいで動けなくなっていた。

「な！？う、動けない！？」

「それでも、不利じゃないといえるのかしら。サクラ、止めを頼むわね」

『了解なんだよ。穢れなき桜光の聖剣！！』

そして、サクラは動けない夕香に向かって桃色の光線を放った。まったく動けない夕香はこれを直で喰らったらまずいと察した。

「く、ジャッジメント極光の断罪者！！」

だが、夕香が極光の断罪者を使えないという訳ではなかった。
ジャッジメント デイアボロス
しかも極光の断罪者は悪魔の復活によって実体化した悪魔達の数だけ、威力が上がるようになっていた。
ジャッジメント
なので今の極光の断罪者はアイリスに放った時よりはるかに威力が強かった。

そしてお互いの光線が当たり、ぶつかった。

どちらが上回ったかというところ、サクラの穢れなき桜光の聖剣の方が上回った。
ジャッジメント

極光の断罪者は穢れなき桜光の聖剣に押されてどんどん夕香に近づいて来ていた。
レーヴァテイン

そして、穢れなき桜光の聖剣は夕香に当たり、砂埃がだった。それを見た静香は自分の勝ちだと思った。

「さて、これで終わったわよね」

『うんうん、まだ終わってないんだよ』
「え？どういう事？」

静香は終わったかと思っていたので、サクラから終わってないと聞いてどういうことかと思った。

サクラはどうして終わってないか静香に話した。

『だって、当たるちょっと前に魔法拘束が全部壊されたんだよ』

「壊された？一体どうやって！？」

「それは、私の結晶で壊したのよ」

静香が思った疑問は穢レーヴァテインれなき桜光の聖剣の放った方から聞こえた。

そう。あの時夕香は一瞬の間に結晶のままであるInvidiaとマジックバインドサタン

Ir aで魔法拘束を壊したのだ。

でも魔法拘束はそんな事では壊れないのは静香は知っていた。ならどうして壊されたのか？

それは人間が元々出来ないことが原因だった。

「やはり、召喚獣だとしても人間なんだね。人間は物事を二つ同時に考える事は無理。魔法拘束と穢レーヴァテインれなき桜光の聖剣を両方考え、尚且つ私が極光の断罪者を放てば穢レーヴァテインれなき桜光の聖剣を優先に意識してしまい魔法拘束の魔力が弱まってしまっマジックバインドって言う事を利用したのよ」

「そうなのサクラ？」

『ごめんなんだよマスター。私も無意識に穢レーヴァテインれなき桜光の聖剣を優先していたんだよ』

「そう。でも夕香、戦況は変わってないわよ」

確かに夕香は避けたが戦況はまったく持って変わってなかった。
未だに夕香が不利なのは変わらない。そんな事は夕香でも分かっ

いた。

だが、夕香は微笑んでいた。

「確かに戦況は変わってないし、今のままじゃ私の不利だね。今のままだとね」

そう言う夕香はInvidiaとIraの結晶を操り始めた。
静香はその二つを見て何をするつもりなのかと思った。あの二つだけでは自分達を攻撃するつもりなのかと思った。

「その二つの結晶で何をするつもりなのかしら？それだけでは私に勝てないわよ」

「そんなのは知っているよ。だから、こうするのよ！」

夕香はInvidiaとIraの結晶の尖っている方の方向を変えた。自分に向けて。

そして二つの結晶は夕香に向かって夕香の皮膚を掠らせた。
静香はそれを見て驚いた。自分の武器を自分に攻撃したのだから。
しかも静香はサクラに聞いてあの結晶が感覚を失うのを知っている。
それを自分に掠らせたのだからさらに不利になるのは夕香にも分かるはずだ。

なのに夕香はそんな事をした。訳が分からなかったのだ。

「くっ、固有感覚と視覚を失ったけどこれで良いわ。すぐに感覚は戻るから」

「な、何をするつもりなの？」
「すぐに分かるわよ。貪る贖罪の鎖」

夕香はそう言ったが特に何も変わる気配はなかった。一人を除いて。

「っ!？」

「アイリス!？どうしたの!？」

アイリスが突如顔の表情が変わったのだ。先ほどまでなんともなかったのに。

少し苦しそうにしていたアイリスを見て、静香は何をしたのかと夕香の方に向き直した。

「何をしたの？」

「なにつて、感覚を戻したただけだけど？魔力を少し奪う代わりに」

「っていう事は痛覚も戻ったって事？」

「そういうこと。だから私も固有感覚と視覚は失ってないの。魔力を奪う代わりに。でも私は魔力は持っていないから特に変わり無いのだけど」

『でもそれでもそっちが不利なのは変わりが無いんだよ!！』

確かにサクラの言うとおりだった。アイリスの魔力を奪った所でサクラが変わりないなら意味が無かった。

でも静香は一つ疑問に思った。そんな事をするためなら自分に攻撃する意味が無い筈だ。ならまだ何かあると察した。

「サクラ、気をつけて。まだ何かあるはずよ」

「そうとおりだよ。悪魔ディアボロスの復活!！」

またしても悪魔ディアボロスの復活を使い、残り二つの結晶も実体化し始めた。そう、これが夕香が狙っていた事だった。全ての七つの大罪を実体化させることが。

そしてInviddiaとIraサタンの結晶は実体化し終わると、夕香の方を向いた。

『嫉妬のInvidia。1111』
レヴィアタン

『憤怒のIra。ここに』
サタン

「さあ、今度こそ宴の始まりよ。と言いたい所だけど、今回はみんなは後ろに居て」

『『『『『『『分かりました』』』』』』

悪魔達は夕香の命令で後ろに下がった。

一体何をするつもりなのかと思った静香達は警戒をしていた。

「なにをするつもりなの？」

「何、すぐに分かるさ」

静香は夕香に何をするつもりなのか聞いたが夕香は微笑みながらそう言った。

第十八話（後書き）

意見、感想お待ちしております。

第十九話

2010年6月25日午後1時27分

静香は夕香の微笑みがどういふ事なのか全然分からなかった。

どう見たって夕香の方が不利の筈だ。なのに夕香は微笑んでいた。まるで勝ちが分かっているかのように。

サクラはとりあえずもう一度魔法拘束^{マジックバインド}を使った。

だが夕香は避けもせず。先ほどと同様に捕まった。

おかしかった。わざと捕まっているかのようにだったのだ。

静香達は気味が悪かった。未だに微笑んでいる夕香を見てまだ何かがあるのかと思った。

そして静香はサクラに一度確認してみる事にした。

「サクラ、何か分からない？」

『全然分からないんだよ！どうして微笑んでいるのか』

「そう。なら、試してみるしかないわね。サクラ、もう一度穢^{レイ}れなき桜光の聖剣を」

『了解なんだよ』

サクラは静香の命で穢^{レイ}れなき桜光の聖剣の体勢に入った。

先ほどは召喚する前に溜めていたので溜めなくて済んだのだが今回は穢^{レイ}れなき桜光の聖剣を放つのに溜める必要があった。

そして数秒して溜め終わり、穢^{レイ}れなき桜光の聖剣を放つ準備が出来た。

『準備できたんだよ』

「じゃあ、もう一度撃って」

『分かったんだよ。穢れなき桜光の聖剣！！』
レーヴァテイン

刹那、桃色をした光線は夕香に向かって放った。
だが夕香は表情も変えず未だに微笑んでいた。
そして、夕香に当たる直前で夕香はやつと口を開いた。

「……悪魔からの断罪」
ディアボロス ・ ジャッチメント

マジックバインド
刹那、魔法拘束が一瞬にして砕け散り、七色に黒が混じった光線が静香たちのほうに向かって放たれた。
レーヴァテイン
穢れなき桜光の聖剣と悪魔からの断罪がぶつかり、先ほどとは違って穢れなき桜光の聖剣が一気に押された。

『な、魔法の防壁！！』
マジックガード

サクラはすぐさま穢れなき桜光の聖剣を放つのを止めてバリアを作り、静香達と一緒に守ろうとした。
レーヴァテイン
そして、ディアボロス ・ ジャッチメント悪魔からの断罪はバリアを覆った。
マジックガード
魔法の防壁はだんだんとひびが割れてきていた。
そして数分もしない内に魔法の防壁は砕け散り、静香達は光線の中に飲まれてしまった。

光線を放ち終わると光線を放った方のアスファルトや建物が砕けていた。

そして少し離れたと所に静香達が倒れていた。
その周りには血溜まりが出来ていて、普通なら死んでいるほどの出血だった。

だが仲間同士での戦いでは死ぬ事は無い。なのでこれほどの出血をしていながら生きているのだ。
ある意味不気味な事であった。

そして戦いが終了という事であることを示す萩原が静香達の方にやってきて静香達を回復させ始めた。
夕香も戦いが終了だと分かると魔術開放を解除して悪魔達は消えて夕香だけになった。

そして住宅街は消えて何も無い状態に戻った。

2010年6月25日午後1時41分

戦いが終わって数分後、静香は目を覚ました。
まだ魔術開放を解除していないので、サクラ達も出ていてアイリスは目を覚ましていなかったがサクラは目を覚ましていた。
そして、自分が夕香に負けたのだと自覚した。

「そつかあ。私、負けちゃったんだ」

『ごめんなさいなんだよ。私がつまらなくっていいならこんな事にはならなかった筈なんだよ』

「良いのよ。負けは負けなんだから。それにあれほどの力を持っているとは思っていなかったから」

『多分、アレは実体化した悪魔達全員分が極光の断罪者に力を与えていたのだと思うんだよ。しかも、全員が実体化すると相当の力を持つ事が出来るんだよ。私の穢れなき桜光の聖剣と比べものにならないほどの力を』

「なるほどね。だから、夕香は微笑んでいたのね」

静香はやつと理解した。夕香は自分に結晶を掠らせてからずっとこれ wait していたのだと。

悪魔達が実体化すれば極光の断罪者もその実体化した数の分だけ威力が上がる。全員が実体化すればそれと比べ物にならないほどの威

力に上がるという事なのだ。

ディアボロス・ジャッチメント

それが悪魔からの断罪。喰らえば絶対に死ぬほどの力であった。

あんなのをどうすれば避けられるのかと思った。サクラの魔力を持つてさえも砕けたのだから。

そんな事を思っていると夕香が近づいてきていた。

「大丈夫？ちよつとやりすぎちゃったかな？手加減なしでやったから」

「大丈夫よ。みきつちに回復させてもらったから」

「そう。なら良かった……」

夕香は何かを言っている途中で倒れてしまった。

レヴィアタン

自分に掠らせたInvidiaとIraのせいだった。

オープンゲート

魔術開放を解除すれば魔力を減らす方から感覚を失った方に戻るため、固有感覚と視覚を失っていたのだ。

それによつてバランスはあまり取れておらず、目も視点が合つてなく何とか静香の所に行くのが精一杯だったのだ。

静香はそれを見て、すぐに萩原を呼んで朱雀の本拠地にある治療室に移動した。

オープンゲート

そのときサクラとアイリスは魔術開放を解除したので居なくなっていた。

第十九話（後書き）

意見、感想お待ちしております。

第二十話

2010年6月25日午後4時17分

「えっと確かこの辺に……」

亮はたくさんある図書館みたいな所に居た。

ここは青竜の基地にある四神戦争に関する事が置いてある本の部屋であった。

全ての不滅の力はここに全て分かる様になっている。なので分からない事は一つも無いのだ。

そして亮が探しているのは朝考えたことだ。

『エネルギーアブソルブ養分吸収の未確物質[□]』。エターナルパワー辺りにある養分を吸収して未確不明な物質のエネルギーにする不滅の力だったと亮は記憶していた。それを確認する為に本を探していたのだ。

「それで見つかったの？」

それを見ていた亮の義妹、奈雪は少し呆れながらもそう言った。どうしてそこまでして探しているのかと思ったのだ。

ちなみに奈雪には何を探しているのかは言っていない。

「全然見つからない。まあ、あの本を見たのが去年だからな」

亮は一つ一つ本を確認しながらそう言った。

ひよっとしたら場所が変わっているかもしれないのでその場所にあるかどうかなんて分からなかった。

でも他の本と比べて少し古かったので分かりやすいはずなのだ。

それでも見つからないでいた。

「ねえ、まだ見つからないの？ここ、涼しいから良いけどさすがに暇でしょうがないんだけど」

さすがにもう三十分もそんな事をしていたので奈雪は疲れて近くの椅子に座っていた。

そして三十分も探しているのに諦めない亮を見て良く諦めないと思った。

2010年6月25日午後4時39分

それからさらに二十分後、亮はさすがに探すのに疲れて少し休む事にした。

奈雪を探そうとしていたら奈雪はいつの間にか居なかったのどこに言ったのだろうと思っていた。

そんな事を考えていたら亮の頬に何か冷たい物が触れた。

そちらを見ると、飲み物を持っていた奈雪が居た。

「はいお義兄ちゃん。これ」

「ああ、ありがとう」

奈雪から飲み物を貰い、飲み物の蓋を開けた。

少し飲んで飲み物を置くと奈雪が話しかけてきた。

「それで見つかったの？」

「いや、一通り探したんだけど見つからなかった」

奈雪はそれを聞くとため息を吐きなくなっていた。

今までずっと居たのに見つからなかったと言ったのでさすがに一緒

に居たくは無かったのだ。

それを感じたのか亮は奈雪にこう言った。

「別に奈雪はここに居なくても良いぞ。俺に付き添う必要は無いんだから」

亮は奈雪に付き添わなくて良いと言った。

けど奈雪はそれをすぐに『良いの』と答えた。

「だって私はお兄義ちゃんと一緒に居る方が嬉しいから」

「あ、そう。なら良いけど」

亮はそう言っただけで飲み物が残ったまま椅子から立ち上がった。

そしてまたしても本を探すのを再会しようとしていた。

「まだ探すの？」

「だから言っただろ。嫌なら付き添わなくて良いと」

「そうだけど良く諦めないよね」

「まあな。俺も分らないくらいだよ」

自分でも何でそこまでしてするのか分からないでいた。

けど幼馴染で腐れ縁である豊を昔のただじゃあう関係であった豊にしたい。ただそれだけの為に亮は動いていた。

しかしそれは叶う訳が無い。敵同士である限り絶対に殺さなければならぬ。

それでも今までの豊に戻したかった。昔みたいに三人で仲良く行きたいと思って居たのだ。

だが、それでも本は見つからなかった。

「一体、どこにあるんだよ……」

亮は少し諦めかけ始めていた。

これほど探してまったくもって見つからなかったのだ。
それでも本を探している時に誰かがこの部屋に入ってきた。

「おー、何を探しているんだ？」

「「甲斐谷リーダー！？」どうしてここに？」」

亮と奈雪は驚いていた。

甲斐谷リーダーとは青竜のリーダーであって神奈川県ではなく本部がある福岡県に居るはずの人物である。

だから本来、ここには居てはならない人物であった。

「ちよつとな。ここの本で確認したかったものがあつたから先週からここに居たんだよ」

というと、甲斐谷は右手に持っていた本を持ち上げて言った。

その本を見た亮は『あ、』と言っていた。

それは亮がずっと探していた物だった。

どうりで見つからなかったのだ。甲斐谷が持っていたから。

「ん？どうしたんだいきなり？」

突然亮が声を出したので甲斐谷はどうしたのかと思った。

「それ、俺がさっきからずっと探していた本なんです」

「あ、そうだったの？だったらすまん」

「いえ、そこまでしなくても……」

甲斐谷が謝ってきたので亮はすぐに慌ててしまった。

青竜にとって彼は尊敬する人物であるのだ。

彼は守れるものは確実に守り、勝てる戦いと負ける戦いが全て分かっているのだ。

そして、彼は邪魔な人間は仲間だろうと全て捨てる。効率よくする男であるのだ。

それによって彼に反感をする人間は居ない。反感すれば即刻青竜のある所に移されそこでずっと暮らさなければならぬほどだからだ。彼が中世のヨーロッパに居ればきっと良い王になっていたに違いないだろう。

だからこそ青竜のみんなは彼には頭が上がりず、亮もついこうなってしまうのだ。

けどそれでもみんなを自分と同じくらいで見てくれるので話をしやすかったりもするのだ。

「とりあえずこれが欲しかったのだろ。ほら」

甲斐谷は亮に近づいて甲斐谷が持っていた本を渡した。

亮はとりあえず本を受け取って何を調べていたのか聞こうと思った。

「そつえばこの本で何を調べていたのですか？この本って確か偏りがあつた気がしますけど」

「ああ、それはまだ覚醒していない『トゥウェルフ十二宮の天使』を調べていたんだよ。この本ならどういふ人物が覚醒するのか分かるからな」

「『トゥウェルフ十二宮の天使』ですか。要するに『グリモワール七つの大罪』の時と同じく仲間にしたいという事ですか？」

亮は『グリモワール七つの大罪』の時と同じように『トゥウェルフ十二宮の天使』を仲間にしたいのだと分かった。

あの時は結局朱雀として覚醒してしまったが今度こそ無属性を青竜に入れようとしているのだと。

エターナルパワー
不滅の力は大半は自分の決意と似ているような事が多い不滅の力
を使える事が多い。

けど一部例外で、自分の決意と似ているような不滅の力エターナルパワーが使える事
がある。

夕香の『七つの大罪』グリモワールはそれに該当する。彼女の罪と連動して『七
つの大罪』リモワールが使えている。

もちろん夕香以外にもそういう人物は他にも居る。特に無属性の大
半はそれに該当する事が多かったりするのだ。

「さて、それじゃ俺は行くよ。二週間ぐらいはこっちに居るつもり
だから」

そう言つて甲斐谷は部屋から出て行つた。
亮と奈雪はそれを見送ると本を読み始めた。

第二十話（後書き）

意見、感想お待ちしております。

第二十一話

2010年6月25日午後4時43分

「えっと、確かこのページ辺りだった気がするんだけど……」

亮は甲斐谷から渡してもらった本を読んでいた。

これには目次が無い為、探しているページを探すのには自力で探すしかなかったのだ。

ちなみに奈雪だが眠くなったらしくここにある休憩室のベッドに寝に行った。

そして二、三分してやっと見つけて読み始めた。

2010年6月25日午後5時17分

約30分後、亮は読み終わった。

最初はそれほど書かれていないと思っていたが、結構内容が書かれていた。

「これって今更ながら凄いな。どおりで甲斐谷リーダーも借りていく訳だ」

亮は自分が探していた本がこれほど詳しく載っているとは思っていなかった。で少し驚いていた。

そして亮が探していた『エネルギーアブソルタ ダークマター 養分吸収の未確物質』の事も同じく詳しく書かれていた。

『エネルギーアブソーブダークマター』
『養分吸収の未確物質』は名前の通り、周りにある養分を吸収してそれを材料として未確定な物質を作り出す。
そして技は大きく分けて二つに分類される。

一つ目は『エネルギーアブソーブ養分吸収』

養分を吸収する力を使って攻撃する技である。
自分付近の養分を吸収する付近養分。
養分を吸収する物体で防壁を作る養吸防壁。
養分を吸収する物体が動かせ、操作する事が出来る養吸粘液。
辺り一面にある養分を全て吸収する養吸世界。
他にもあるが良く使われるような技はこの五つのようだ。
そしてその五つの内四つは豊が使っていた『スキנקロードブレイク皮膚腐食破壊』とまったく持って一緒だった。
それを見た亮はこれで『スキנקロードブレイク皮膚腐食破壊』の本当の名前は『エネルギーアブソーブ養分吸収』の未確物質』なんだろうと分かった。

二つ目は『ダークマター未確物質』

『エネルギーアブソーブ養分吸収』を利用して未確定な物質を作る。
『ダークマター未確物質』を発動すると常に宙に黒い物質が周りをまわっている。
養吸防壁とは違い、光なども全て通さない未確防壁。
宙に浮いている物質が無數の槍に変化し一斉射出する未確の無數槍
宙に浮いている物質で翼を作り出して防御と攻撃の両方を備えている未確の黒翼。
もちろん他にもあるが基本は上の三つである。

そして、『エネルギーアブソーブ養分吸収』と『ダークマター未確物質』の両方を使った『エネルギーアブソーブ養分吸収』の未確物質』の究極必殺技、終焉の地がある事を知った。

亮はこれほどの情報が載っていたとは思ってなく逆に驚きたくな

った。

亮は目的のを読み終わってこの本に載っているのをペラペラとめくって見ると、『エネルギーアブソルブター 養分吸収の未確物質』と同じように詳しく書かれていた。

それを知った亮はさらに驚いた。そして誰がこんな情報を書き記したのかとも思った。

この本は古いが詳しく書かれている。そう思った亮は甲斐谷に頼んで借りようかと思った。

けどそれは諦めた。別に今すぐに必要な訳でもないので必要な時に読むべきだと思ったのだ。

そう思ったのでもう少しこの本を読んでいようと思った。

2010年6月25日午後5時53分

約45分後、亮は本を閉じた。

『エネルギーアブソルブター 養分吸収の未確物質』を調べた時より本気で読もうとは思っていないのでまったく持って記憶してなかった。

だがそれでも一つ気になった事があった。

本を読んでいると一部切れている所があったのだ。

しかもそれは『グリモワール 七つの大罪』と『トゥウェルヴ ソンディカル 十二宮の天使』の最後の一文が無かったのだ。

さらにいえばそれは意図的に破かれていたのだと分かった。

手で破いた跡があったが綺麗にそこだけ無かったのだ。

多分重要な事がここには書かれていたのだろう。何かは分からないが多分そうだろうと亮は思った。

——でも、一体何が書かれていたんだ？

亮はそう思いながらも本を本棚に戻す事にした。
そしてそろそろ6時になるので奈雪を起こして帰る事にした。

第二十一話（後書き）

意見、感想お待ちしております。

第二十二話

2010年6月25日午後5時57分

練習試合が終了してから約四時間後、夕香は未だに目を覚まさなかった。

意識不明なのかと思ったりしたが、一時間前くらい前に寝返りをしたのでただ眠っているだと分かっている。

ちなみにここには静香と一時間前に来た美咲の二人が夕香を見ていた。

しかも静香は自分の怪我を萩原に治して夕香が倒れた後からずっと見ていたのだ。

「何時まで寝ているのかしらね」

「さあ、でも疲れているから寝かせておきましょう」

そんな話をしながらも二人は寝息を立てている夕香を見ていた。夕香の寝顔を見ているととても可愛くて何故か気持ちが落ち着いていていたのだ。

「そういえば夕香が倒れるほどってどんだけ凄い戦いをしていたわけ？」

ふと美咲は思いついたかのように静香に聞いていた。

まあ、夕香が倒れるほどって言えばそれほど凄かったのだらうと思うだろう。

仮にも夕香の^{エターナルパワー}不滅の力は^{エターナルパワー}不滅の力最高上位の無属性の中に含まれている『^{グリモワール}七つの大罪』である。

静香の不滅の力も強いのは美咲も知っているが、夕香には簡単に負けるだろうと思っていたからだ。
なのに夕香は最初は意識不明であった事を静香から聞いている。
だからこそ、表情には見せていないが内心では驚いていたのだ。夕香が負けるとは。

「えっとそれはね……」

美咲の質問に静香は一から答えることにした。

2010年6月25日午後6時21分

「っていうわけなの」

静香が戦いの全貌を全て話すと美咲は黙ってしまった。

黙る理由は二つあり、一つは静香が勝ったのではなく夕香が勝った事である。

ただ夕香が自分に掠らせた レヴィアタン India と サタン Ira のせいで気絶してしまったのだと分かったからだ。

自分の早とちりに少し恥ずかしくなっていたのだ。

二つ目は美咲が想像していた以上に壮絶な戦いだったということである。

特に夕香の ジャッチメント 断罪者とサクラの レーヴァテイン 穢れなき桜光の聖剣をお互いに放った時が一番驚いた。

サクラの不滅の力が夕香の不滅の力を上回ったことだ。
エターナルパワー ジャッチメント

極光の断罪者は夕香から聞いていたので分かっているのだがそれが夕香の必殺技だと思ったからだ。

それを打ち破ったことを知って驚いていたのだ。

そしてその後の極光の断罪者より強い悪魔からの断罪があることを知った時も驚いていた。

もしかしたらあれよりも強いものがあるとは思わなかったのだ。それを聞くとまだそれよりも強いのではないかと美咲は思ってた。黙ってしまったのだ。

「ってあれ？美咲聞いている？」

静香は話し終わると、美咲がボケーとしていたので聞いていたのかと思つて聞いたのだ。

「え、ちゃんと聞いていたよ。ただ、静香のを聞いていて夕香の『七つの大罪』ってまだそれよりも強い技があるのかなと思つてただけだから」

ちゃんと聞いていたのは事実なので、美咲は動揺する事も無く普通に答えられた。

そして、美咲の言葉に静香は確かにそうかも知れないと思った。夕香の『七つの大罪』にはあれだけではないと思つたのだ。無属性なのにあの程度の力だというのはどうなのだろうかと思つたのだ。

多分『七つの大罪』にはまだ隠している力がたくさんある。二人はそう確信した。

「まあ、考えるのはこの辺にして今は夕香が目覚めるのを待ちましょ」

「そうね。そうしましょうか」

二人はそう考えついたが、今は夕香が目覚めるのを待ちたいので心の中にしまっておく事にした。

2010年6月25日午後6時36分

グリモワール

『七つの大罪』の事を考えるのを止めてからちょうど15分後、二人は無言で夕香が目覚めるのを待っていた。

ただ時計の針の音が鳴るだけで本当に静かだった。

そうやって時間が過ぎていくと、一つの声が聞こえた。

「うーん……あれ、ここは？」

夕香が目覚めたのだ。

それに気づいた美咲と静香はすぐに夕香のベッドに駆け寄った。

「夕香……！」

「うわ！？二人ともいきなりどうしたの？そして私は何で眠ってたの？」

レヴィアタン

サタン

どうやら夕香はInvidiaとIraのせいで気絶していた事を忘れていたようだ。

それに気づいた二人はどうして夕香が眠っていたのか話し始めた。

戦いが終わった後に夕香が静香に近寄ったのだが、その後自分に掠

レヴィアタン

サタン

らせたInvidiaとIraの影響で倒れてしまったのだと分かった。

固有感覚と視覚を失ったのは夕香にとってもさすがに辛かったのだと自分でも理解した。

レヴィアタン

サタン

ヘルフェゴール

なのでInvidiaとIraそしてAcediaを自分に攻撃するのは止めようとすることにした。

他なら何とかなるかもしれないが固有感覚と視覚と聴覚の三つを自

分に掠らせるのは、戦っているときはもちろん戦いが終了した後も危険だと分かったのだ。

もうその三つは掠らせる事はしないと決意した。危険すぎるからだ。

——まあ、それ以外の四つもなるべく避けないとね。また、美咲達に迷惑をかけるかも知れないからね。

夕香はそれ以外の四つもなるべく避ける事を思いながたも、二人の顔をみて微笑んだ。

第二十二話（後書き）

意見、感想お待ちしております。

第二十三話

2010年6月26日午前6時03分

翌日、夕香、美咲、静香の三人は朱雀の本拠地にある部屋で一緒に寝ていた。

あの後、夕香と静香は戦いの疲れがまだ残っていたのでそのまま朱雀の寝室を借りて三人で寝ていたのだ。

そして一番最初に起きたのは夕香だった。

相変わらず夕香はいつもの時間に起きてしまったのだ。

もう習慣が付いているのであまり気にしてないが、さすがに今日は早いと思った。

「何しよう、ってあれ？」

二度寝をするのはどうかと思い、夕香は仕方なく起き上がろうとしたら起き上がれなかった。

何故か両腕が動けなかったのだ。

なんで動けないのかと思って確認をすると右腕に美咲、左腕に静香が抱きしめていたのだ。

それに見た夕香はため息を吐いた。

「起こすのもどうかと思うし、腕を話させようとして起こしてしまうかも知れないから抜け出すのもしたくないしね……」

夕香はどうしようか考えたが、二人を起こすのはどうかと思ったので仕方なく二人が起きるまでこのままで居る事にした。

そして何で二人とも自分に抱きついていていいのかと思った夕香であっ

た。

どう見たって自然に抱きついた訳ではないと分かった。だからこそどうして抱きついているのかと思ったのだ。

別に夕香が鈍いという訳ではない。

夕香は今の自分ではなくて男である自分が好きなのだと思うているのだ。

なのでこの二人が夕香に抱きついてくる事には疑問に思ったのだ。

「まあ、それほど深く考える必要は無いか。私はそんな事を許されている訳ではないのだから」

夕香はそう思って先ほど思った疑問をすぐに切り捨てた。

そう、夕香にとってどうでもいい話なのだ。

二人の気持ちには、答えられないのだから。

それに今だってぎりぎりの所にいるのだ。

なので美咲と静香とよく話しているが、極力夕香は話さないようにしているのだ。

そして、夕香にとって美咲と静香は友達とも思っていないのだ。

多分二人は夕香を友達だと思っているだろうが、夕香にとってそんな事はどうでも良い事だった。

別に相手に友達だと思ってないと言う理由も無く、そう思わせておけば良いと思っていたのだ。

夕香には友達などというのは許されていないのだから。

それに二人には気づかれていないが、たまにだが夕香の自分の気持ちに緩んでしまい、友達だと思ってしまっただけで苦しんだりしていたのだ。

だからと言って死ぬ訳にはいかない。菜乃葉が目覚めるまでは。だからこそ、夕香はこの思いを変えられないのだ。

「そつえば昨日、菜乃葉のお見舞いに行けなかったな」

夕香は昨日は家に帰らないでここで寝る事にしたので菜乃葉のお見舞いにいけなかったことを少し悔やんでいた。

今まで毎日菜乃葉をお見舞いしていて一度もお見舞いをしてない事は無かったのだ。

それは菜乃葉が入院してからずっとそう決意した事だった。

だが、この四神戦争に巻き込まれてからこういうことはあるのではないかと、前から懸念していたのだ。

そして現に起こってしまった。

一度も休まずに菜乃葉をお見舞いしていた夕香にとって約束を守れなかった事が悔しかったのだ。

「まあ、過ぎた事はしょうがないのだけどこの四神戦争が終わったらずっとお見舞い出来るから、それまでしないとね」

夕香はそう思うと、早くこの戦争を終わらせようと思った。

だが夕香は知らない。数ヶ月先にとんでもない事になってしまう事を。

2010年6月26日午前6時56分

夕香が起きてから約50分も経った。

さすがに50分もずつとこのままは少し辛いと思った夕香だがやつと片方が開放される事になった。

美咲が起きたのだ。

美咲は目を擦りながら目を覚ました。

そしてすぐに美咲が硬直した。

「……………」

「……おはよう美咲」

夕香もどう対応して良いのか分からないでいてとりあえず『おはよう』と言った。

だんだんと美咲の顔が赤くなっていった。

「う、ごめん!!」

美咲はすぐに抱きついてた夕香の右腕を離した。

自分から抱きついたのに夕香がこちらを見ていたので驚いたのだ。

夕香は自分から抱きついたのだと思っているので、どうして驚いているのだろうと思っていた。

そんな事していると、静香が美咲の声で起きてしまった。

起きると美咲が赤くしているので何があったのかと思った。

そんな事を思っているながら静香はさげなく夕香の左腕から離れた。

数分間後、美咲もやっと落ち着いたので三人は服を着替えて朱雀の

本拠地にある食堂に向かった。

第二十三話（後書き）

意見、感想お待ちしております。

第二十四話に行く前に一つ言っておく事が。絶対に読んでください！！（前書き）

まずは遅れてしまってすみません！！

ちょっと微妙にスランプだったので遅れてしまって。

第二十四話に行く前に一つ言っておく事が。絶対に読んでください！！

今日、第二十四話を投稿するのですが一つ言っておく事が。

第二十四話なんです、四つに分割して投下する予定です。

何故そうするのかという理由があります。

今回から√分岐が発生します。

要するにギャルゲー方式になるという事です。

前々から考えていたのですが、それがこの第二十四話に発生するという事です。

まず最初は一緒ですが、第二十四話の途中で分岐があるということです。

読み方については皆さんに任せます。全部を読むことにするのもありだし、一つの分岐しか読まないというのもありと思っています。

なのでそれは皆さんの自由という事にします。

それでは第二十四話の前編を投下します。

第二十四話 その1（前書き）

それでは例の分岐の前編を載せます。

第二十四話 その1

「そういえば、ここの食堂って何があるの？」

「それは私も気になるわね。一度もここで食べた事が無かったし」

三人が食堂に来ると、夕香と美咲はふと思った事を言った。

夕香がこの食堂で食べてない事は分かるとしても、美咲もここで食べた事は一度も無かったのだ。

そこで、唯一この食堂で食べた事がある静香にお勧めなどを聞こうと思ったのだ。

「そういえばそうなのか。そこにある食券の券売機で食べたいものを買っただけだけど。まあお勧めはうどんだけだね。ここのうどんはだしがしっかりしているし麺のこしも良いからね。トッピングもさまざまにできるから」

「そうなんだ。でもお金はどのくらい掛かるの？」

「別に払う必要は無いよ。ここで料理しているのは全部機械だから人件費なんて無いから」

そう話しているうちに静香は自分がお勧めしたうどんのボタンを押して、うどんの食券が出てきた。その後その食券を取って機械に食券を渡した。

続けて夕香と美咲も同じように、静香がお勧めしたうどんのボタンを押して食券を出し、それを取って機械に渡した。

そして一分もしないうちにうどんが出てきて、三人はそれを持って近くのテーブルに置いてそこに座ることにした。

「ふと思ったけど、あんまり人が居ないわね」

「そりゃそうよ。だって朱雀の本拠地に住んでいる人なんて本の少

ししか居ないから。」

「え、そうだったんだ」

それを聞いて夕香は納得した。

そうなのである。朱雀の本拠地にいるのはほんの僅かで、本拠地で暮らしている人は元々少ないのだ。

みんな自分の家に居る事が多く、自分の事は自分で守るという人が多いのだ。さすがに本拠地に住むことにするのは学生より大人の方が多い。元々学校が近ければ良いが、遠いに通うのに苦労するので家に暮らす人が多いのである。

よって、食堂に人がたくさんいるという事は少ないのだ。

「そういえば、今日の午後はどうする？一緒に出かけたのだけど？」

「今日の午後？でも今日は忙しいんじゃないの？」

夕香は今日はそんな時間は無いのではと思った。

確かに今日は首都圏内に居る朱雀のメンバーが全員集まる日である。しかも今日は最後の確認をする為の作戦会議である筈であるから、時間が無いと思っていたのだ。

「別にそれは午前中には終わるよ。それほど時間はとらないと言っていたし」

「そうなんだ」

美咲からそれを聞いて、夕香は少し考え始めた。

それならば少し出かけられるかもしれないと思ったのだ。

——うーん、どうしようかな？

- ・ 美咲と一緒に出かける。（第二十四話その2 - 1に移動）
- ・ 菜乃葉の病院にお見舞いに行く。（第二十四話その2 - 2に移動）
- ・ のんびりとしている。（第二十四話その2 - 3に移動）

第二十四話 その1（後書き）

こんな感じですね。

意見、感想お待ちしております。

第二十四話 その2・1（前書き）

っていう事で√分岐その1です。

第二十四話 その2 - 1

——美咲に誘われた事だから、一緒に出かけようかな。

「じゃあ美咲、一緒に出かけようか」

「え、良いの？」

美咲は断れるかと思ったので夕香が良いよと言われたので驚いていたのだ。菜乃葉のお見舞いに行くのかと思ったので、諦め半分で誘ってみただけだったのだ。

「別に良いよ。どうせする事も無いし。菜乃葉に会うと言う事も考えたけど、ここからだ時間がかるし」

「じゃあ話し合いが終わったらこの入り口で集合ね。静香も一緒に行く？」

美咲は自分の隣に座っている静香にも話を聞いてみた。静香は二人の会話に関係なかったので先ほどまでうどんを食べていたのだが、箸を置いて美咲の方を向いた。

「私は良いわ。ちょっと頼まれている事があるから。本当は行きたいところなんだけど……」

「あ、そういえばそうだったね」

けど静香はどうやら頼まれている事があるらしいので美咲の誘いを断り、美咲もその事を思い出したので静香を誘うのは諦める事にした。

静香が頼まれている事は一体なんだろうと思いつながらも、夕香はその事を聞こうとまではしなかった。別に聞こうとするまでは思っ

いなかったのだ。

そんな事を思っていると、美咲が話しかけてきた。

「それじゃあ夕香、さっきも言ったけど話し合いが終わって準備が終わったら待っているからね。なるべく早く来てよ」

「分かってるわよ。それじゃ、うどんが冷める前に食べちゃいまいし
ようか」

夕香と美咲はそう言って、いつの間にか静香がうどんを食べていたのと同じようにうどんを食べる事にした。

そして数分してうどんを食べ終わると、三人は食器を返して一度さつきまで寝ていた寝室に戻る事にした。

第二十四話 その2 - 2

——時間が余っているなら菜乃葉のお見舞いでも行こうかな？

「ごめん、ちよつと菜乃葉のお見舞いに行きたいから無理かな？」

「やっぱりそうよね。時間があれば菜乃葉のお見舞いには行きたいか。分かつてはいたけどね。じゃあ私一人で行くよ。静香も何か頼まれているらしいし」

「ごめんね」

「いやいや別に夕香が謝る事じゃないよ。私は暇だから鎌倉を散歩でもしようかなと思ったただけだから」

美咲は夕香の予想通りの答えに納得して、一人で行くことにした。夕香はそれを見て美咲に謝ったが、謝らなくても良いと美咲に言われて少しホッとしていた。

そしてふと思った事があり、静香が頼まれている事は一体なんだろうかと夕香は思ったが、その事を聞こうとまではしなかった。別に聞こうとするまでは思っていなかったためで、そこまで知りたいと思わなかったからだ。

「それじゃあ、うどんが冷めないうちに食べないとね」

「あ、そうだね」

そう思っていると、美咲から声が聞こえて夕香も止まっていた箸を動かしてうどんを食べる事にした。

そして数分してうどんを食べ終わると、三人は食器を返して一度さつきまで寝ていた寝室に戻る事にした。

第二十四話 その2 - 3

——別に行っても良いのだけど、昨日の疲れがまだあるからね。菜乃葉のお見舞いも考えたけど、それより私の体を休ませるのが良いかな。明日の為にね。

「ごめん、今日はのんびりここに居るよ。昨日も疲れがあるから」
「え、そっち！？断られるのは何となく分かっていたけど、菜乃葉のお見舞いでじゃないの？」

美咲は夕香の予想外の答えに少し驚いていた。どうやら美咲は断られるのは分かっていたらしいが、それが菜乃葉のお見舞いで断られるのではないかと思っていたのだ。だから夕香の答えには少し驚いたのだ。

「それも考えたけど、明日の為に休みたいと思ったから。私は昨日の静香との練習で結構疲れているから」

「ああ、そういう事ね。じゃあ静香は一緒に行こうかな？」

「忘れたの？私も今日は頼まれた事があるから一緒に行かないわよ。それに私も本当は休みたいくらいだし」

「二人ともなんだよ！！なんかノリが悪いよ。もういいもん。私一人で行くから」

そう言っただけで拗ねた美咲を見て、夕香と静香は笑い出した。拗ねた美咲が可愛い過ぎたのだ。

「笑うな！！」

二人に笑われたのが嫌になった美咲は二人に怒ろうとした。

「ほらほら、冷めないうちに早くうどんを食べちゃいませよ。話は後で聞くからね」

「う、後で話を聞いてくれるんだよね？」

「うん、だから早く食べちゃいませよ」

「……分かった」

美咲は後で話を聞いてくれると言うので、これ以上はこらず、三人で一緒にうどんを食べる事にした。

そして数分してうどんを食べ終わると、三人は食器を返して一度さつきまで寝ていた寝室に戻る事にした。

第二十五話（前書き）

√分岐は後に影響がありますので。
今回は同じ内容です。

第二十五話

「それじゃあ、何している？」

一旦寝室に戻ると、美咲が夕香と静香に聞いてみた。まだ集まる時間まで相当あり、呼ぶ時はアナウンスで流れてくるので安心して時間を使えるのだ。もちろんそれまでの間は自由なので何をしても構わなく、外に出るのも別に良かったりするのだ。静香と夕香は少し考え、数分して静香が何かを思いついた。

「そういえば夕香、洋服はどうしているの？いつもその服を着ているような気がするけど？」

そう、夕香の洋服である。美咲は夕香の洋服がいつも同じ服にか着ていない事に気づき、どうしているのかと思ったのだ。

「本当は買いたいのだけど、時間が無くてね。どうしようかなと思っていたのだけど」

夕香はなんだかんだで女になってからというもの、入院をしたりするなどで洋服なんか買う暇なんて無かったので、服は未だに一つしか持っていないかったのだ。もちろん寝巻きは何とか一つ買ったが、その寝巻きで寝る時に洋服を洗濯して乾燥機で乾燥させていたのだ。まあ唯一持っている洋服が『七つの大罪^{グリモワール}』使用時の服装なのだが、それは夕香のときは洋服として使えるので問題なかったのだ。

「じゃあ、今ここで買っておく？一応ここは洋服も売っているから。まあ緊急時に最低限度の食料や衣類は必要だからといって松藤リー

ダーが取り揃えたと言ってたけど」

「しかも洋服は取り揃えが良いからね。ほとんどここで買えば済む事が多いし」

「二人がそこまで言うなら、本当に良いんだろうね」

美咲と静香はこの朱雀の本拠地にある洋服屋の事を夕香に勧めていた。たしかにここのは洋服の種類が多く、品揃えも良かったりして朱雀の女性陣にはとても嬉しかったりするのだ。わざわざここまで来て買いに行く人だっている位に。

「じゃあ、今すぐ行きたいから一緒に来て貰って良い？」

夕香は二人の話を聞いてその洋服屋に行ってみたくなっていた。

多分忘れかけていると思うが夕香は元男性である。性転換していてどんな女性っぽくなっているがそこは忘れないで欲しい。ちなみに今更ながら何故夕香が女性っぽくなっているのは良く分からない。

「別に良いよ。どうせここに居ても暇なんだし。静香も行くでしょ？」

「私も良いわよ。大勢の方が面白いし」

「それじゃ、頼むね」

そういうことで夕香達は夕香の洋服選びに朱雀の本拠地内にある洋服店に向かった。

2010年6月26日午前9時03分

洋服店に向かっている途中、夕香達は三人で歩きながら話をして

いた。ほんとどうでもいいような学校の話などという戯言のような事を。

そんな会話をしていると、反対から数人の男性二人が歩いてきた。三人はそれに気にせず話していたが向こうは夕香達に気づいたように、二人で小さく話し始めた。

「あの二人だよ。昨日、練習場でもの凄い戦いを繰り広げた二人って」

「紫色と赤色の髪をしている二人だろ。一体どうやってあれほどの戦いができるんだ？」

そう、二人が夕香達を見た理由は、昨日、夕香と静香が練習場で壮絶な戦いを繰り広げた二人を見つけたからだ。昨日の二人の戦いはもう朱雀の中で広まっていたのだ。

噂は風のように広まっていて、もう朱雀のメンバーにはたった一日で広まっていたのだ。

そんなコソコソ話に美咲が気づき、大体何を話しているのか分かった。そのため息を吐いた。

「美咲、どうしたの？」

いきなりのため息にどうしたのかと思った夕香は美咲に聞いてみた。さっきまで普通に話していたのに、突然のため息になったのだ。それは静香も同じだった。

「いや何でもないよ。ただ、夕香と美咲の噂がいつの間にかこんなに広まっているなんてねと思ったただけだから」

「噂って何の？」

静香は何の噂の事かと思い美咲に聞いて、夕香も何の噂なのか分

からないでいたので気になっていた。

「昨日の二人の練習場での戦いの事よ。どうやら、壁と地面に大きな凹みが出来ていたらしくて、それを行ったのが夕香と静香だという事が広まっているの」

「ああ〜」

夕香と静香は納得した。どうやらあの戦いはそれほど凄かったのだと改めて実感し、まさか凹みまで作るとは思っていなかったのだ。まあ、実際に凹みを作ったのは夕香だけなんだが。

「それよりそろそろ着く頃ね。早く行きましょ」

とまあ、そんな話をしていたら洋服店まで後少しだったので夕香達は少し走って洋服店に向かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2597o/>

罪と罰 守りたい人の為の戦い

2011年3月2日17時33分発行